

第2章 青谷上寺地遺跡出土の木製容器

第1節 弥生時代木製品の研究略史

木器は多くの場合土中で腐朽してしまい遺跡から出土することはあまりないのだが、環境によっては現在まで形を留め、大量に出土する場合もある。昭和初期の奈良県唐古遺跡（唐古・鍵遺跡）や静岡県登呂遺跡では数多くの木器が出土し、その後の木器研究の基礎となった。

土器が容器を表すのに対し、木器は容器以外にも、農具・工具・建築材・祭祀具など様々な用途や機能を含んでいる。斧柄など他の素材と組み合わせたりする特異な形態から、当初から機能・用途を解明することに力が注がれており、『木器集成図録 近畿原始篇』[奈良文化財研究所1993]（以下『木器集成』とする）はその最大の成果である。

稲作との関連から、木器の中では農具の研究が発達していたが、近年では出土例の増加により農具以外にも研究対象が広がり、形態・製作技法による工人集団の想定、古環境復元や年輪年代測定による時期決定など遺跡を読み解く重要な位置を占めるまでになっている[飯塚1999a、1999b、2003、樋上2002、山田2003、黒須2004]、

第2節 器種の構成と分類

青谷上寺地遺跡の木製容器は、容器の可能性のある破片資料も含めて約1000点出土している。その形態は実に様々であるため、製作技法による大分類を行い、次に木取り・樹種などを考慮して器種ごとに細分類した。

木製容器は製作技法によって割物・挽物・指物・曲物に大別することができる。『木器集成』によると、「割物は刃物で材を割抜いて形を整えた容器で、（中略）挽物は粗加工した材を轆轤にかけて回転成形した容器。指物は板材を組み立ててほぞ納・紐（樺皮）・釘・接着剤などで結合した容器。曲物は薄板や樹皮を筒状にまるめて側板とし、それに合せて切断した底板と紐（樺皮）・釘・接着剤などで結合した容器である。」

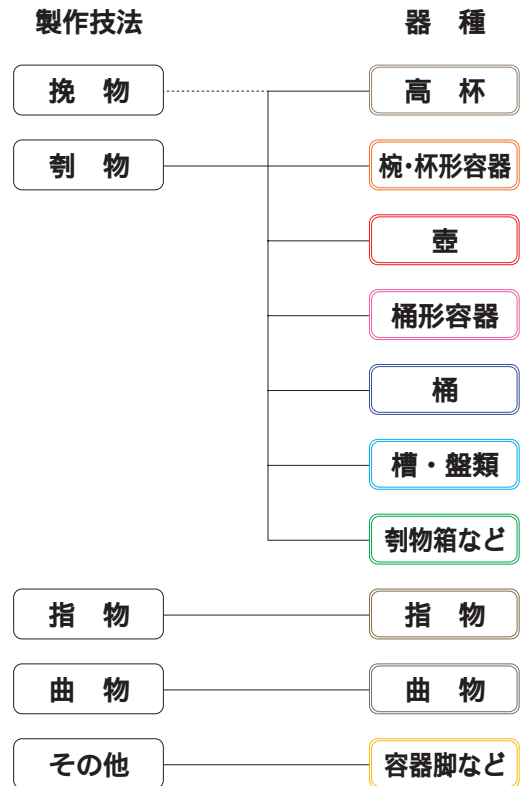


表1 木製容器分類表

とあり、本書でも分類の大枠として参考にした。ただし、青谷上寺地遺跡出土木製容器の中で挽物は高杯で何点か可能性のあるものが指摘されているが区分しにくいものも多く、また製作技法上でも轆轤を使用する部分以外は区分しにくいことから、分類に際しては割物と挽物を一括した。そのため項目としては、高杯、椀・杯形容器、壺など器種ごとに分け、指物・曲物に関してはそのまま項目とした（表1）。

指物では箱以外にも、いわゆる「四方転びの箱」^(註1)のように底がなく、厳密には容器と言い難いものも併せて載せている。また明らかに琴と思われる板材（共鳴用の穿孔や薄く削った痕跡のあるもの）については掲載しなかった。

曲物では側板自体の出土例はないが、側板の痕跡を残す底部は存在し、同様の構造を持つものを曲物として掲載した。

その他として、数本セットで出土し、容器に結合する可能性のある脚などを容器の製作技法

上の分類とは別にした。

木製容器の分類上、「木取り」と「樹種」も非常に重要な要素である。現代でも木目の美しさ、容器の強度・大きさなどから、それぞれ意図的な樹種の選択・加工を行っている。青谷上寺地遺跡の例で言えば、高杯なら横木取りでヤマグワ製が多く、割物桶なら縦木取りでスギ製が多いといったように、器種とその木取り・樹種には深い関係が存在する（第3節参照）。

容器の場合、木取りは縦木取りと横木取りの2つに大別できる。縦木取りは木材の木口面（横断面）を上面として加工してあるもの、横木取りは木材の縦断面を上面にして加工してあるものをいう。どちらも樹心および辺材の白太とよばれる樹皮近くの部分は用いない。樹木の心（樹心）を持つ材は割れ易く、辺材はゆがみやすい。指物などでは板材が使用されるが、この場合樹心に対して放射状に採ったものを柾目材といい、平行に採ったものを板目材という。柾目材には年輪に対して直角となる本柾目と、年輪がおよそ45度の角度となる追柾目がある。その他、容器脚などの棒材において、樹心を残したまま周りを加工する心持材、樹心を外す心去材を挙げておく（第4図）。

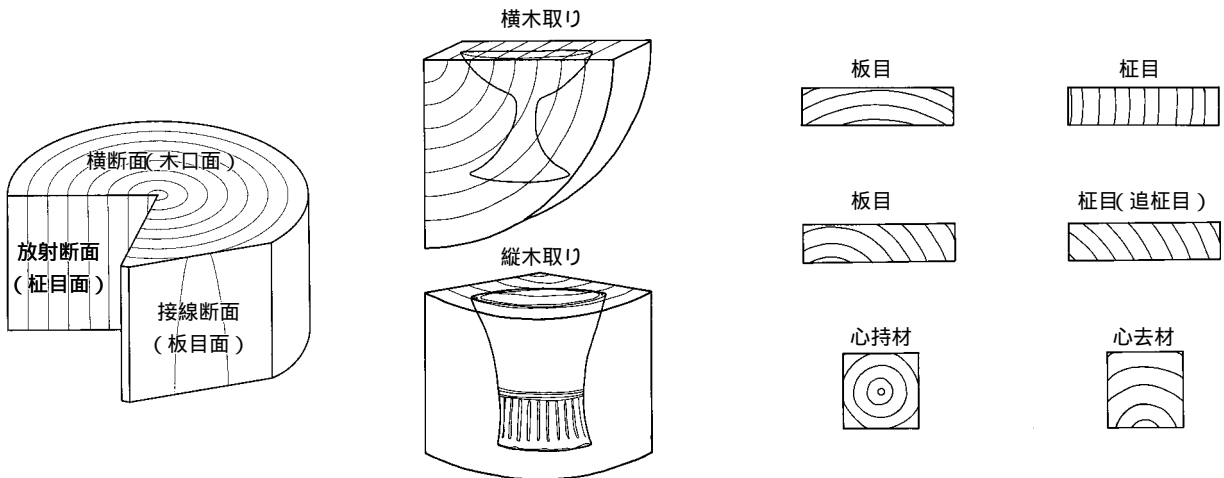
木製容器に利用される樹種も各器種それぞれ傾向が見られ、材質によって使い分けられていたと思われる。製品の用途、加工しやすさ、強度、木目、香りなどがその基準として考えられ

る。例えばスギであれば加工が容易で割れやすく、真っ直ぐに伸びて成長も早いため本遺跡出土木製容器では、割物桶や槽・盤など比較的大型で日常雑器とされるものに多い。

青谷上寺地遺跡出土木製容器に使われる樹種の特徴を表2に掲げた。本書を活用する際の参考にさせていただきたい。

樹種		特徴
針葉樹	スギ	通直に伸び、成長早い。肌目は粗。割れ易く、加工し易い。
	サワラ	通直に伸びる。割れ易く、加工し易い。水湿に強い。
	アスナロ属	通直に伸び、肌目は緻密。保存性・耐水性高く、加工し易い。色・香りが強い。
	カヤ	肌目は緻密で弾力性がある。保存性・高く、加工も容易。
	イヌガヤ	肌目は緻密で耐水性高い。保存性高く、弾力性がある。大径木にはならない。
広葉樹	ヤマグワ	材は堅硬で光沢があり、加工し難い。
	ケヤキ	保存性高く、加工は中庸。大径木となる。
	モクレン属	保存性低く、軽軟な材。加工し易い。
	エノキ属	割れにくく、狂いが出やすい。
	サクラ属	やや重硬で、保存性高い。加工は中庸。
樹	サカキ	材は緻密、堅硬で保存性高い。加工し難く、道具類の柄などに使われる。

表2 木製容器樹種一覧表



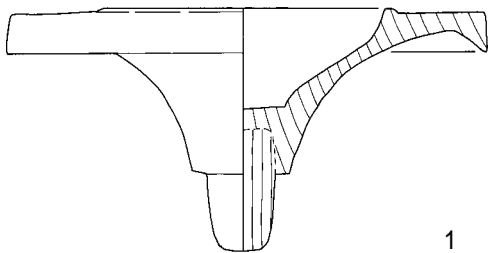
第4図 木取りの種類

高杯は、杯部から脚部まで一木を割りぬいて作る一木式と、2材もしくは3材を組み合わせる組合せ式に大きく分けられる。しかし、多くは杯部と脚部がそれぞれ破損して出土しており、杯部と脚部の形態的繋がりがはっきり分かっているものは少ない。そのため本項では杯部と脚部をそれぞれ分類して掲載している。樹種はヤマグワが多く、ケヤキ、スギなども存在する。木取りはいずれも横木取りである。

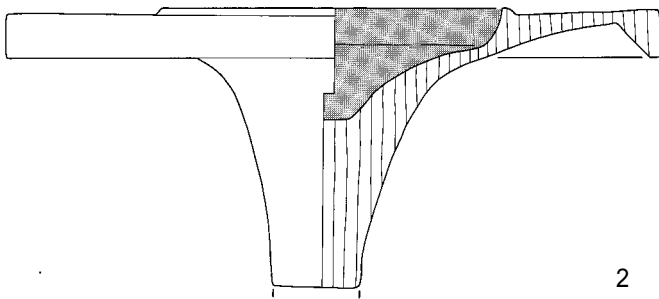
(1) 高杯 杯部 : 1~10



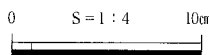
写真6 高杯(1)



1



2



第5図 高杯(1)

1~10は、杯部と口縁部の境でやや突出し、口縁部が水平方向に伸びて、端部はやや厚みを帯びて面を形成する、いわゆる水平口縁の高杯である。このタイプは杯部内径に比べて外径がかなり大きくなる。多くは杯底部がほぼ扁平になっている。

1は組合せ式であり、雇い柄^{ほぞ}(アスナ口属製)を利用して脚部と結合する。

2は水平口縁端部が非常に厚くなるやや大型のもので、内面は黒彩されている。

3は水平口縁幅が狭く、杯部は深い。島根県松江市タテチョウ遺跡出土例と類似し、出土層位および形態的特徴から古い部類に入る。

4は杯部と口縁部の境がやや上に突出し、相対的に水平口縁が下がったような器形となっている。

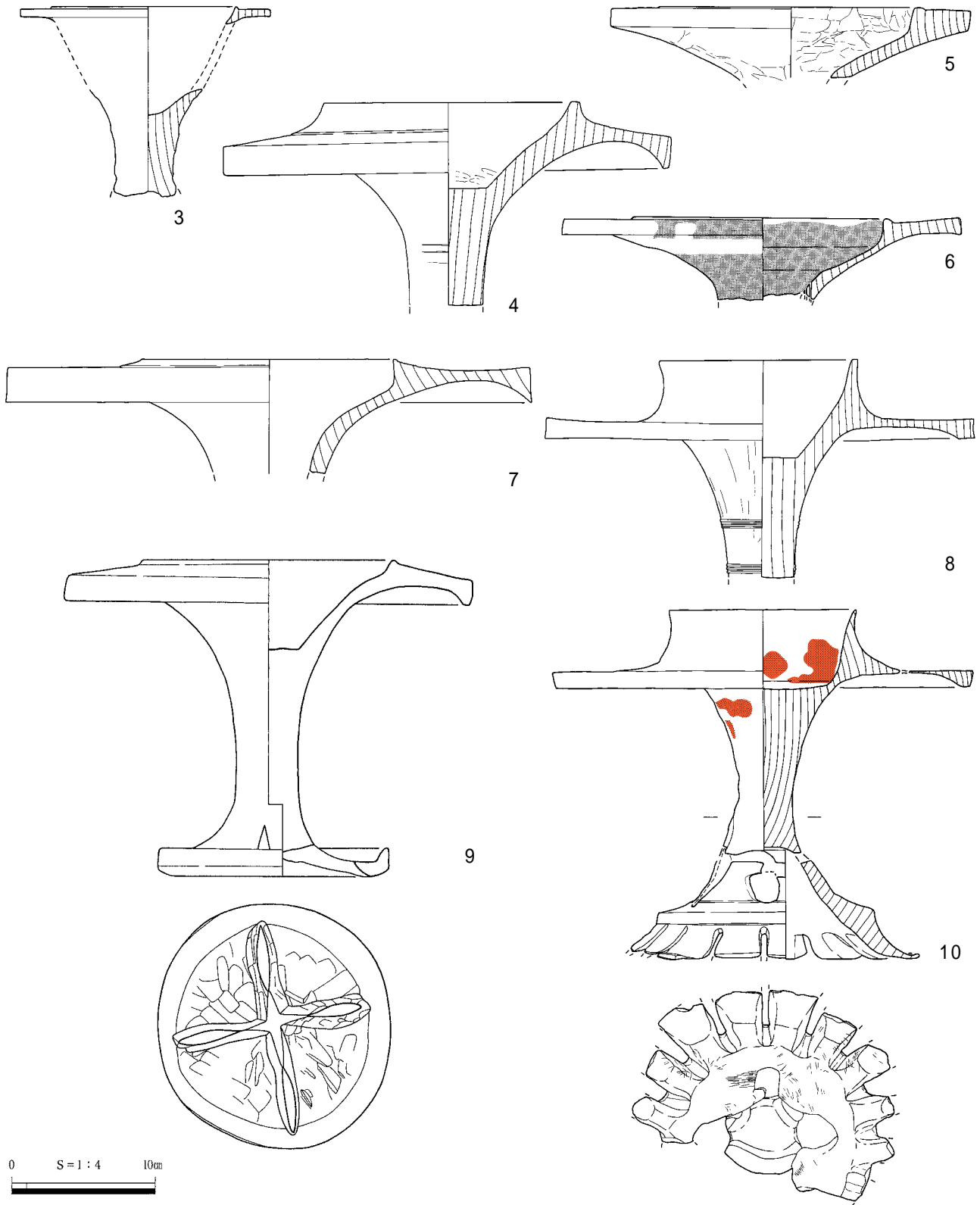
5は水平口縁部の幅が短く、しかも厚い仕上がりとなっている。杯部の内外面に加工痕をよく残しており、未製品の可能性もある。

6は杯底部付近から破損しており、その脇に目釘で補修した痕跡が残っている。内外面に黒彩の痕跡が見られる。

7は比較的大型のものである。杯底部が欠損しているため、脚部とのつながりは不明である。

8、10は杯部と口縁部の境がかなり突出し、水平口縁部が杯部の中ほどから伸びている格好となっている。8の脚柱部には3条1組の突帯が2ヶ所廻っている。10は脚部まで残存する一木式のもので、脚部は花弁状に分割された端部を持つ。脚部には裏側から4方向に透かし孔を開け、その外側下には1段を設けて、端部を16個作り出す。脚端部は斜め上方にやや反り返る。外面の一部に赤彩の痕跡が見られる。

9は脚部まで残存する一木式のもので、脚部は4方向に透かし孔を開け、脚端部は上方に反り返る。



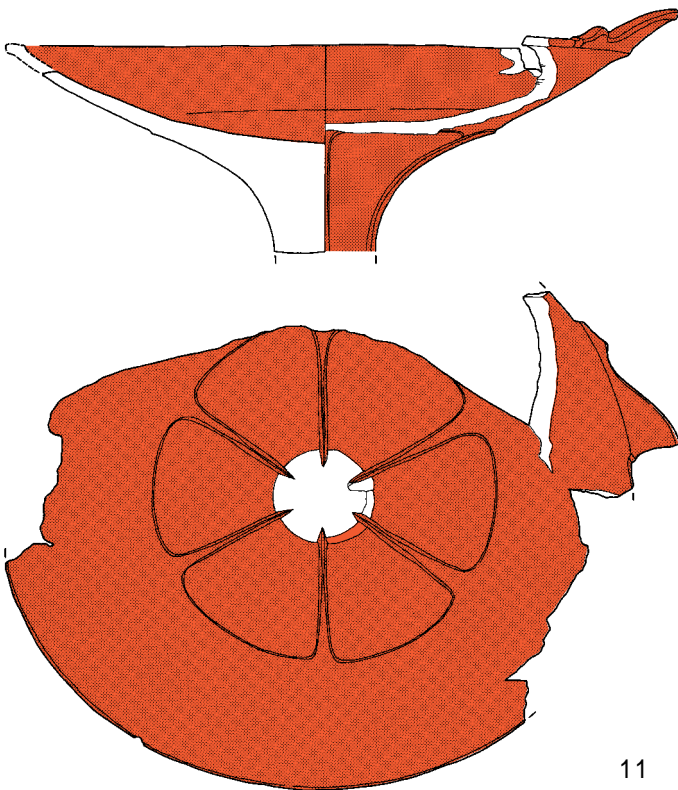
第6図 高杯(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
1	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 12.9,幅25.4,厚0.8	横木取り	ヤマグワ	:293図295	36648-1
2	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 14.8,幅34.8,厚0.8	横木取り	スギ	:293図296 黒彩	36650
3	高杯	国道2区	1層	弥生前期~中期	高 13.4,幅(17.6)	横木取り	ケヤキ	:144図86	6858
4	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 14.2,幅31.2,厚1.7	横木取り	スギ	:294図298	42300
5	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 5.3,幅25.2,厚0.9	横木取り	ヤマグワ	:294図299 一部炭化	36592
6	高杯	国道2区	層	弥生中期~古墳前期	高 5.8,幅28.9,厚0.4	横木取り	ヤマグワ	:144図83 黒彩	6272
7	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 8.1,幅36.8,厚0.8	横木取り	ヤマグワ	:294図297	42332
8	高杯	国道4区	不明	弥生後期~古墳前期	高15.3,幅30.1	横木取り	ヤマグワ	:144図85	16310
9	高杯	国道2区	1層	弥生前期~中期	高23.0,幅28.0,16.0	横木取り	ヤマグワ	:144図84	6447
10	高杯	国道4区	SD38-2	弥生後期	高24.4,(29.3),(21.8)	横木取り	ケヤキ	赤彩	18043

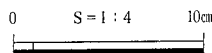
(1) 高杯 杯部 : 11~15



写真7 高杯(2)



11



第7図 高杯(3)

杯底部外面に花卉状の装飾をもつ高杯である。石川県金沢市西念・南新保遺跡出土例など石川県で多く出土することで有名だが、青谷上寺地遺跡でも出土している。西念・南新保遺跡出土例は形状および加工痕が同心円状になることから挽物とされている^(註2)が、青谷上寺地遺跡例ではそのような形跡がなく、今のところ挽物と断定できるものは見つかっていない。11~15はいずれも横木取りで、11と14、15はヤマグワ製、12はカヤ製、13はニレ科である。時期は全て弥生時代後期から古墳時代前期の間に属している。

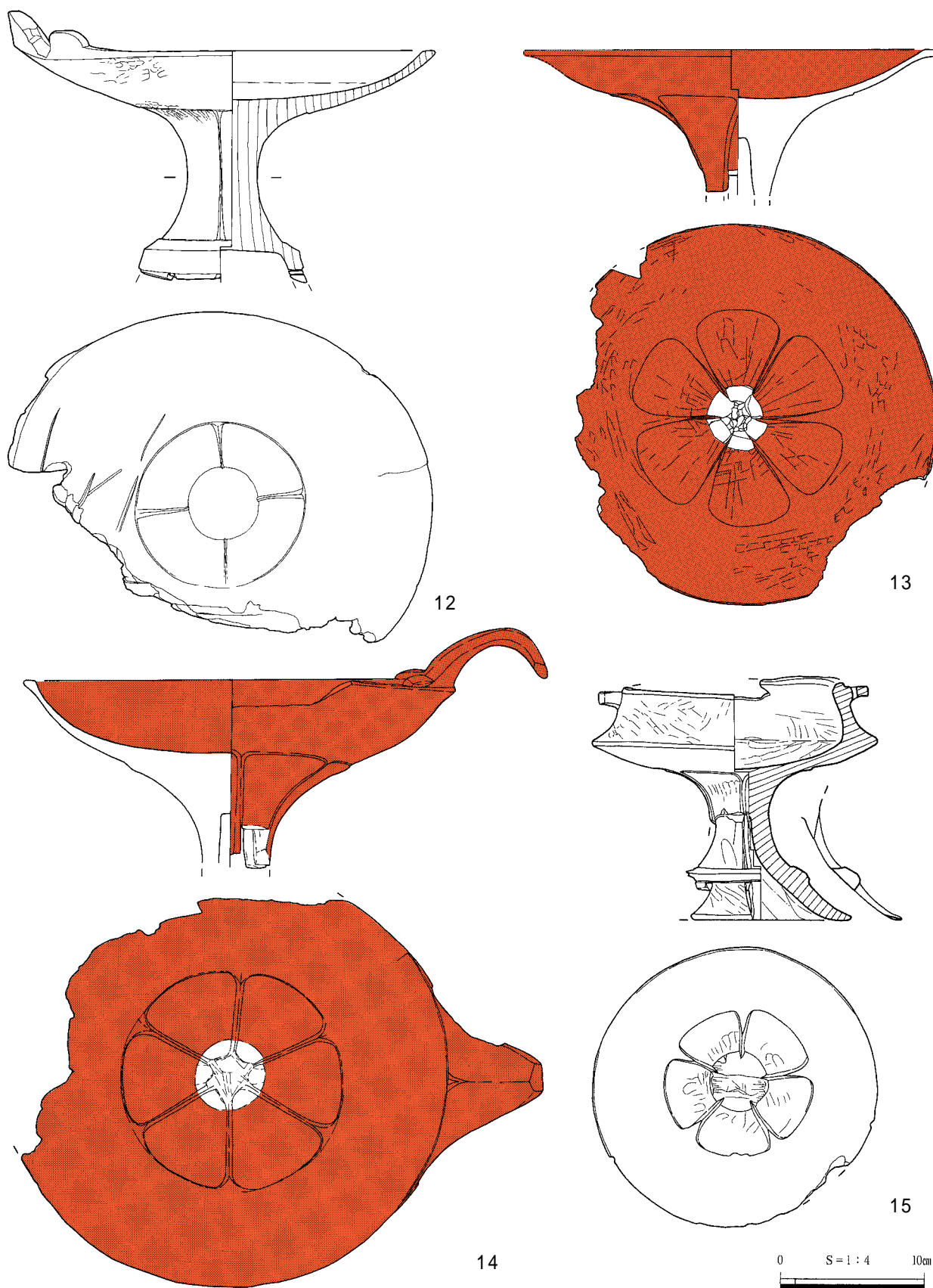
11は花卉高杯の代表例である。6葉の花弁状の装飾を持ち、口縁部に1箇所透かし孔を持つ大きな飾り耳が付く。13、14と違って柄孔を持たず、一木式の可能性がある。

12は4葉の花弁状装飾を持つものである。一木式のもので、口縁部には飾り耳の痕跡がある。この花卉状装飾は周りより一段低く彫られ、他の花卉高杯とは異なる。ただし脚柱部を杯底部まで伸びる溝が透かし孔の変容したものとすれば、花卉高杯の初現ともいえる。また杯部内面は黒彩の可能性がある。

13、14ともに6葉の花弁状装飾を持ち、また脚柱部には柄孔があり、2材または3材の組合せ式と考えられる。14は透かし孔を持つ飾り耳が付いている。

15は5葉の花弁状装飾を持つ一木式の高杯で、他に比べてやや小型である。他の花卉高杯が大きく斜め上方に開くのに対し、15は一旦外に大きく開いた後、鋭角に折り返して立ち上がる。口縁部の両端には紐孔突起が施され、相応する蓋が存在したことを伺わせる。

ここで示した花卉状装飾をよく見ると、杯底部の円形の段と脚柱部から伸びる溝が合成されたもの(12)が、14では6葉になって花卉先端部には面取りが施される。この先端部が徐々に広がって(11、14)5葉のものも出現するようになったと考えられる。



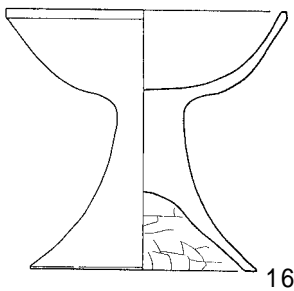
第8図 高杯(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
11	高杯	国道1区	木器溜	弥生後期	高 12.8,厚0.8	横木取り	ヤマグワ	:142図78 赤彩	5259
12	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 19.0,幅29.7,厚0.5	横木取り	カヤ	:291図284	29113
13	高杯	国道4区	SK167	弥生後期	高 13.3,幅26.6	横木取り	ニレ科	:142図77 赤彩	17390
14	高杯	県道4区	SD11	弥生後期	高 17.0,幅(30.2)	横木取り	ヤマグワ	:288図270 赤彩	4262
15	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高17.0,幅15.2	横木取り	ヤマグワ	:288図271	26385

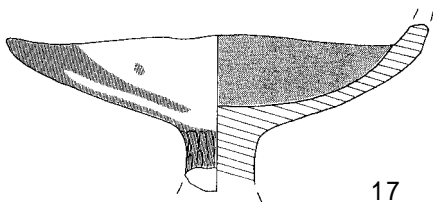
(1) 高杯 杯部 : 16~26



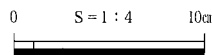
写真8 高杯(3)



16



17



第9図 高杯(5)

無装飾のもの、および杯底部に円形の段を持つもの、脚柱部から溝が伸びるものを掲載した。16、17は一木式の高杯である。16は杯部は斜め上方に緩やかに開き、脚部は八の字状に開く。脚部内面は深く彫りこまず、脚柱部を厚く残している。17は口縁部には飾り耳の痕跡があり、内外面は黒彩されていたと思われる。

18は水平に大きく開いて口縁部付近で斜め上方に立ち上がる。口縁部下と杯底部に段を設け、中段部分が輪状にやや盛り上がる形となる。

19は外面に2段を設け、内面も底部中央を円形に彫り込んでいる。口縁部に付く飾り耳が出土しているが、接合箇所は破損している。

20は脚柱部から杯底部にかけて縦方向の溝を4条施す。杯部内外面は赤彩されている。

21は雇い柄を持つ組合せ式で、雇い柄は杯底部内面まで達している。外面には円形の段を2重に配し、中央側を彫りこんでいる。

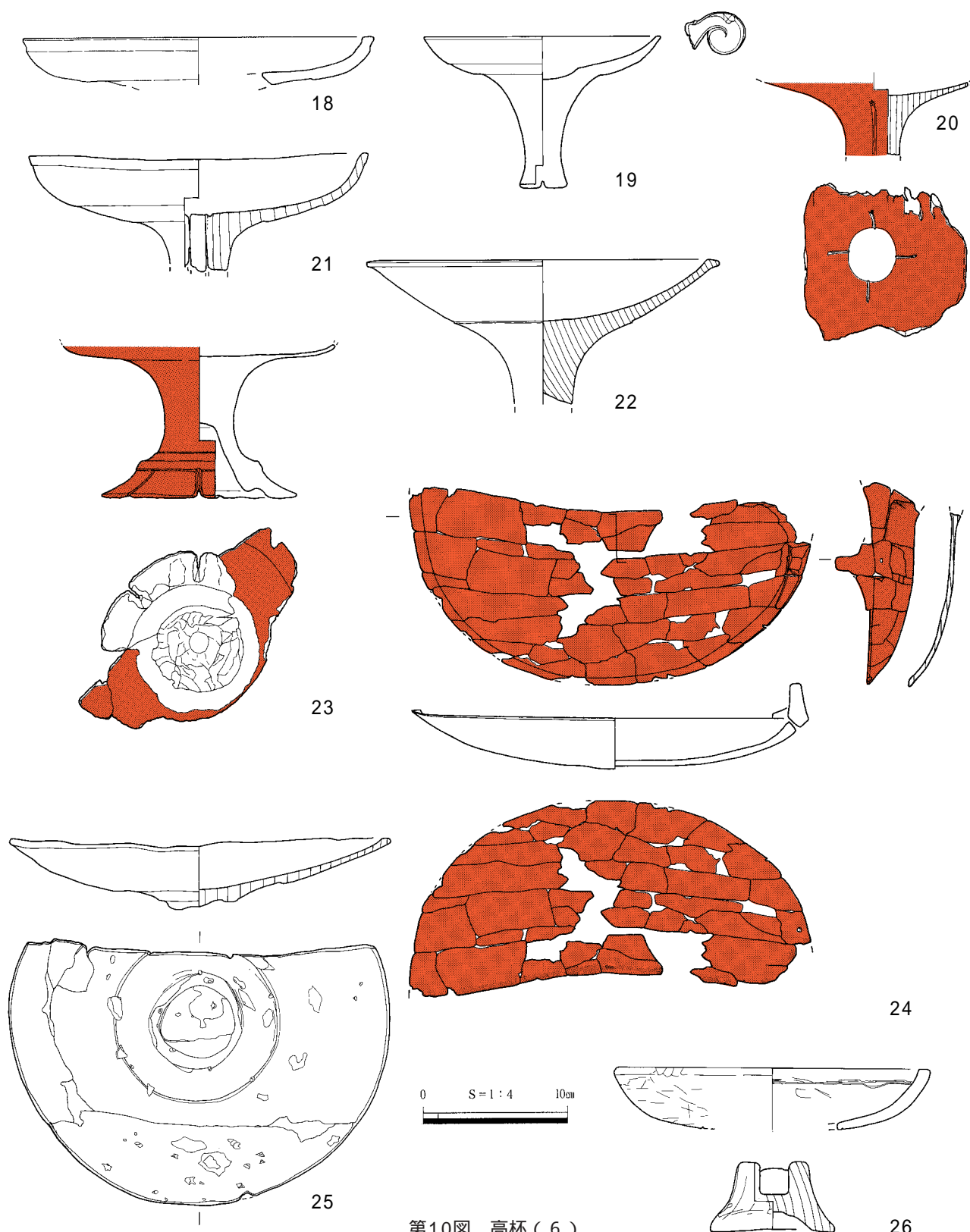
22は口縁端部がわずかに水平となる。杯底部外面に円形の段を設け、外側を彫り込んでいる。

23は一木式のもので、脚部は段を設け、その下で端部を8分割している。杯部内外面・脚部外面は赤彩されている。

24は平面が楕円形を呈し、片側に飾り耳を持つ。脚部の痕跡はないが、横断面の形状や内外面の赤彩から高杯と考えた。樹種はケヤキで、板目面が上面になる木取りとなり、他とは異なる。破断面に黒漆状のもので接着修復した痕跡が認められる。

25は杯部が横に大きく広がり、底部外面中央には脚部が破損した痕跡が見られる。その周囲を一段彫り、目釘を打って脚部と結合した形跡が伺える。またその外側には円形の段を設け、中央側が彫り込むような形となっている。

26は雇い柄を持つ組合せ式のもので、口縁部内側に加工痕が一周廻っている。脚部は小さく粗雑なもので、柄孔に雇い柄が残存している。脚部上面は加工されており、脚部高は他と比べて非常に低い。



第10図 高杯(6)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
16	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高14.0,幅(15.1),(12.3),厚0.5	横木取り	ヤマグワ	:292図290	27982
17	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 8.9,幅(22.2),厚0.7	横木取り		:291図285 黒彩	30462
18	高杯	県道8区	SD54	弥生後期	高 3.4,幅(25.0),厚0.7	横木取り	ヤマグワ	:292図288	34568
19	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 20.6,幅(16.5),厚0.7	横木取り	ヤマグワ		34096
20	高杯	排土中	不明	不明	高 5.1,厚3.8	横木取り	ヤマグワ	赤彩	50121
21	高杯	国道4区	SD38-2	弥生後期	高 8.2,幅(23.7),厚0.6	横木取り	ニレ科		17827
22	高杯	国道4区	SD38-3	弥生後期 ~ 古墳前期	高 10.0,幅(24.6),厚0.7	横木取り	ヤマグワ		16767
23	高杯	国道3区	不明	弥生後期	高 10.6,幅(13.6)	横木取り	ヤマグワ	赤彩	11113
24	高杯	国道4区	SA24	弥生後期 ~ 古墳前期	高 6.0,幅(28.0),厚0.4	横木取り	ケヤキ	赤彩、漆?	16709
25	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 4.7,幅(25.7),厚0.5	横木取り	ケヤキ	:292図289	33293
26	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 4.2, 4.9,幅(22.0),(8.6)	横木取り	ヤマグワ		42320

(1) 高杯 脚部 : 27~33



写真9 高杯(4)

脚部下面周縁に突起を作り出したものである。その個数、形状は様々である。

27は外面赤彩され、4方向の縦長の透かし孔と脚柱部に4条の突帯を持つ。突起は16個あり、間隔の広さから2個1組で、透かしの十字切り込みと対応する位置に割付されている。

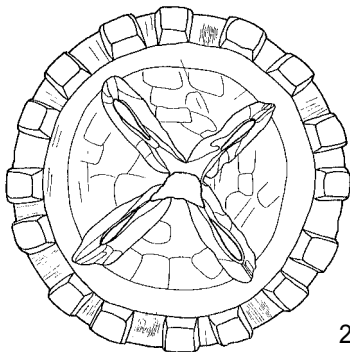
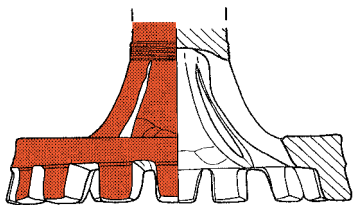
28は杯底部まで残存しており、一木式のものと考えられる。脚部には4方向の透かし孔が施され、脚柱部には4条の突帯を2ヶ所配している。突起は全部で10個あり、2個1組となっている。杯底部内面は平滑になっており、杯部（水平口縁）が作られていたと想定される。

29は脚柱部に突帯を設けている。透かし孔は4方向施されたと思われる、突起は切り離さない3個1組が8箇所配されていたと考えられる。

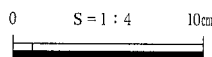
30は端部が欠損しているが、突起の痕跡が認められ、12個あったと推測される。4方向の透かし孔が施され、脚柱部に3条の突帯を2ヶ所配している。脚部内面は上まで割りぬかれ、スギ製の産い柄が目釘で両側から2ヶ所ずつ固定されている。

31、32は非常に小さい突起が付くものである。どちらも縦長の透かし孔が施されていた痕跡があり、4方向あったと思われる。突起は31が8個、32が12個と推測される。

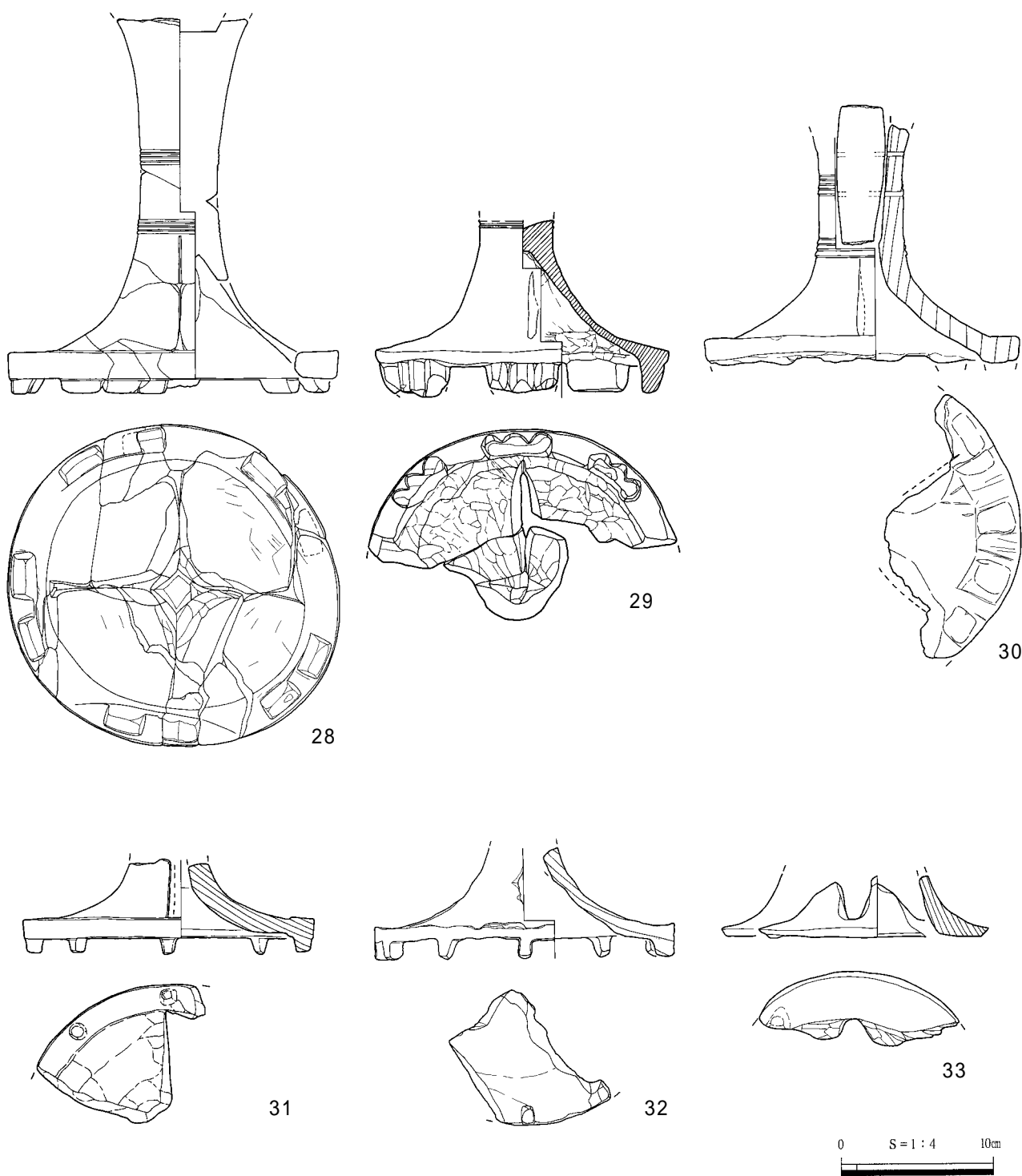
33は裾部まで滑らかに広がる形状を呈し、他と様相が異なる。下面外周に1箇所突起の痕跡が認められ、他よりやや幅広な透かし孔が設けられている。



27



第11図 高杯(7)



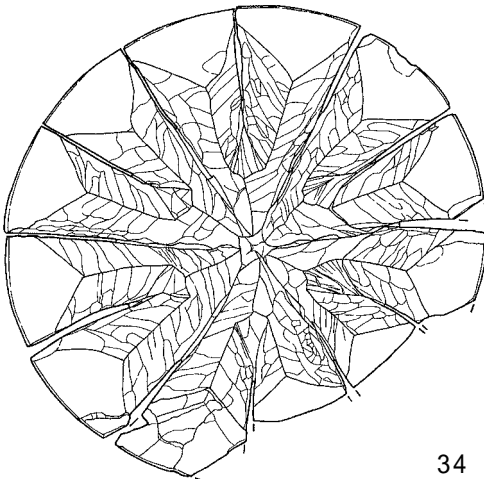
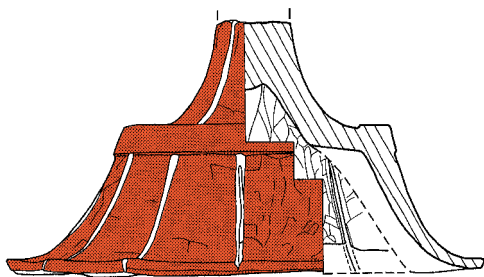
第12図 高杯(8)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
27	高杯	国道3区	SD27	弥生中期	高 9.3,幅18.1	横木取り	ヤマグワ	:143図80 赤彩	13506
28	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 24.8,幅21.2~22.5	横木取り	ヤマグワ		42259
29	高杯	国道4区	c	弥生中期	高 11.7,幅19.4	横木取り	ヤマグワ		18862
30	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 15.5,幅(20.8)	横木取り	ケヤキ 産い柄:スギ	:294図300	42355
31	高杯	県道7区	K層	弥生中期	高 6.7,幅(19.2),厚1.5	横木取り	ヤマグワ	:295図301	36709
32	高杯	排土中	不明	不明	高 7.3,幅(19.8)	横木取り	ヤマグワ		50492
33	高杯	国道4区	不明	不明	高 4.1,幅17.6	横木取り	カヤ		17234

(1) 高杯 脚部 : 34 ~ 45



写真10 高杯(5)



34

0 S=1:4 10cm

第13図 高杯(9)

脚部中ほどに一段を設け、段の上側では4~6に分割する縦方向の溝を配し、段の下では脚端部を構成する切込みとなる。また段の下では4~6の分割が倍の数となる。全て外面にのみ赤彩が施される。

34は脚端部を12分割するものである。脚部内面には6分割する大きな切込みがあり、段の裏にあたる部分で脚端部はさらに倍に分割されている。脚端部の接地面は三角形に近い五角形状となっている。段の上の溝は杯部まで伸びていると考えられ、杯部が対応するものと推定される。

35、36、38、40、42、43も同様の形態と推定される。ただし内面の彫りこみは脚柱部のかなり上部まで及んでいる。

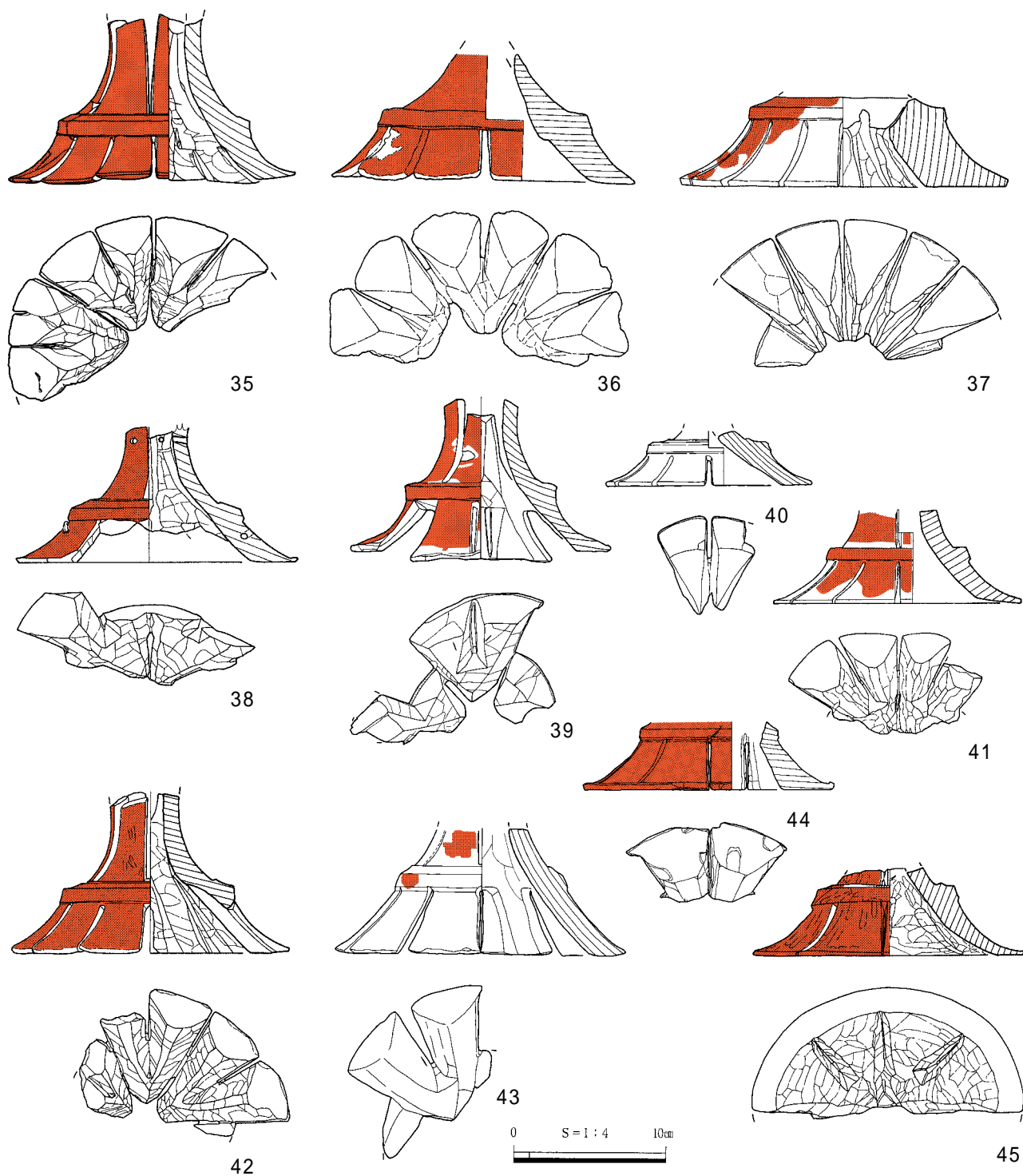
37は段から上の部分が残存していないため、溝が脚柱部まで及んでいるか不明である。端部の接地面は細長の二等辺三角形形状を呈する。発掘調査報告書では端部の復元個数を14個としているが、木理の状況から変形しているものと考えられ、復元個数は12個と推定される。

39は脚端部が12個となるものであるが、裾端部を切り離さずに繋げた状態となっており、やや上方に折り返される。接地面は台形状となっている。

41は脚端部と脚柱部にそれぞれ穿孔があり、樹皮と思われる紐状のもので緊縛固定して補修した痕跡を残している。端部は12個に分割されている。

44は38と同様に段より上の部分が残存していないため溝が脚柱部まで及んでいるか不明である。裾端部は若干やや上方に折り返されており、39と同様に切り離さずに繋げた状態であったと思われる。接地面は台形に近い形状を呈す。

45は8分割にされたタイプである。脚端部は切り離さず、接地面は底面の外周を回る円形である。



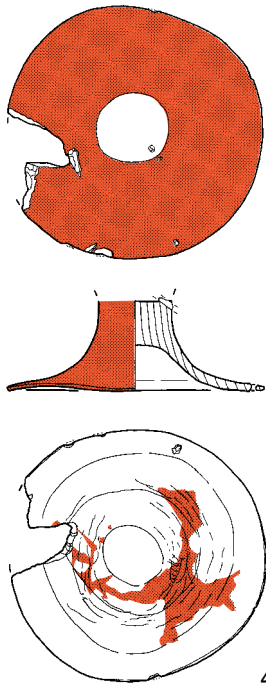
第14図 高杯(10)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
34	高杯	国道4区	SD38-2	弥生後期	高 13.5,幅25.2	横木取り	ヤマグワ	:143図79 赤彩	17370
35	高杯	国道4区	b	弥生中期	高 11.3,幅(19.0),厚1.2~	横木取り	ヤマグワ	赤彩	18509
36	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 8.2,幅(20.0)	横木取り	ヤマグワ	:289図274 赤彩	33149
37	高杯	県道8区	SD54	弥生後期	高 5.8,幅(21.6)	横木取り	ヤマグワ	:289図275 赤彩	34779
38	高杯	国道1区	木器溜	弥生後期	高 9.0,幅(18.4),厚1.6	横木取り	ヤマグワ	:143図81 赤彩	5319
39	高杯	国道4区	SD38-3	弥生後期 ~ 古墳前期	高 10.8,幅(17.8),厚1.2	横木取り	ヤマグワ	赤彩	15465
40	高杯	県道8区	SD54	弥生後期	高 3.6,幅(13.6)	横木取り	ヤマグワ	:289図278	34219
41	高杯	県道8区	SD54	弥生後期	高 6.1,幅(16.4)	横木取り	ヤマグワ	:289図276 赤彩	34724
42	高杯	国道4区	SD11	弥生後期	高 10.8,幅(18.3)	横木取り	ヤマグワ	:289図272 赤彩	6067
43	高杯	国道4区	SD11	弥生後期	高 8.2,幅 9.6	横木取り	ヤマグワ	:289図279 赤彩	3000
44	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 4.5,幅(16.6)	横木取り		赤彩	33388
45	高杯	国道4区	SD11	弥生後期	高 5.8,幅(11.9)	横木取り	カヤ	:289図273 赤彩	3187

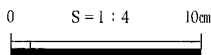
(1) 高杯 脚部 : 46 ~ 56



写真11 高杯(6)



46



第15図 高杯(11)

無装飾あるいは分類不能なものをここに挙げた。全て横木取りである。樹種はヤマグワが多いが、ケヤキ、カヤ、トチノキなどもある。

46は外面に赤彩が施されたもので、裾端部までほぼ均質の厚さで緩やかに広がる八の字状を呈す。脚柱部には目釘が施されているが、組合せ式ではなく、一木式で補修されたものと思われる。

47は均質な厚みで八の字状に広がる。上部の破断面には4方向の穿孔の痕跡があり、目釘で留めた組合せ式と推定される。内面は加工痕が顕著で、一彫り毎に回転させながら加工していたと推測される。

48は脚部中ほどで大きく屈曲し、脚柱部が円柱状となる。内面は脚柱部の奥まで彫りこまれている。トチノキ製。

50は脚部の器高が低く、後述する椀・杯形容器の可能性もある。一木式である。

49は46と同様の形態をしているが、赤彩は確認されていない。一木式と考えられる。

51は脚柱部が長く、裾が短いもので、一木式と考えられる。裾端部まで残存していないため不明であるが、48に近い器形と思われる。

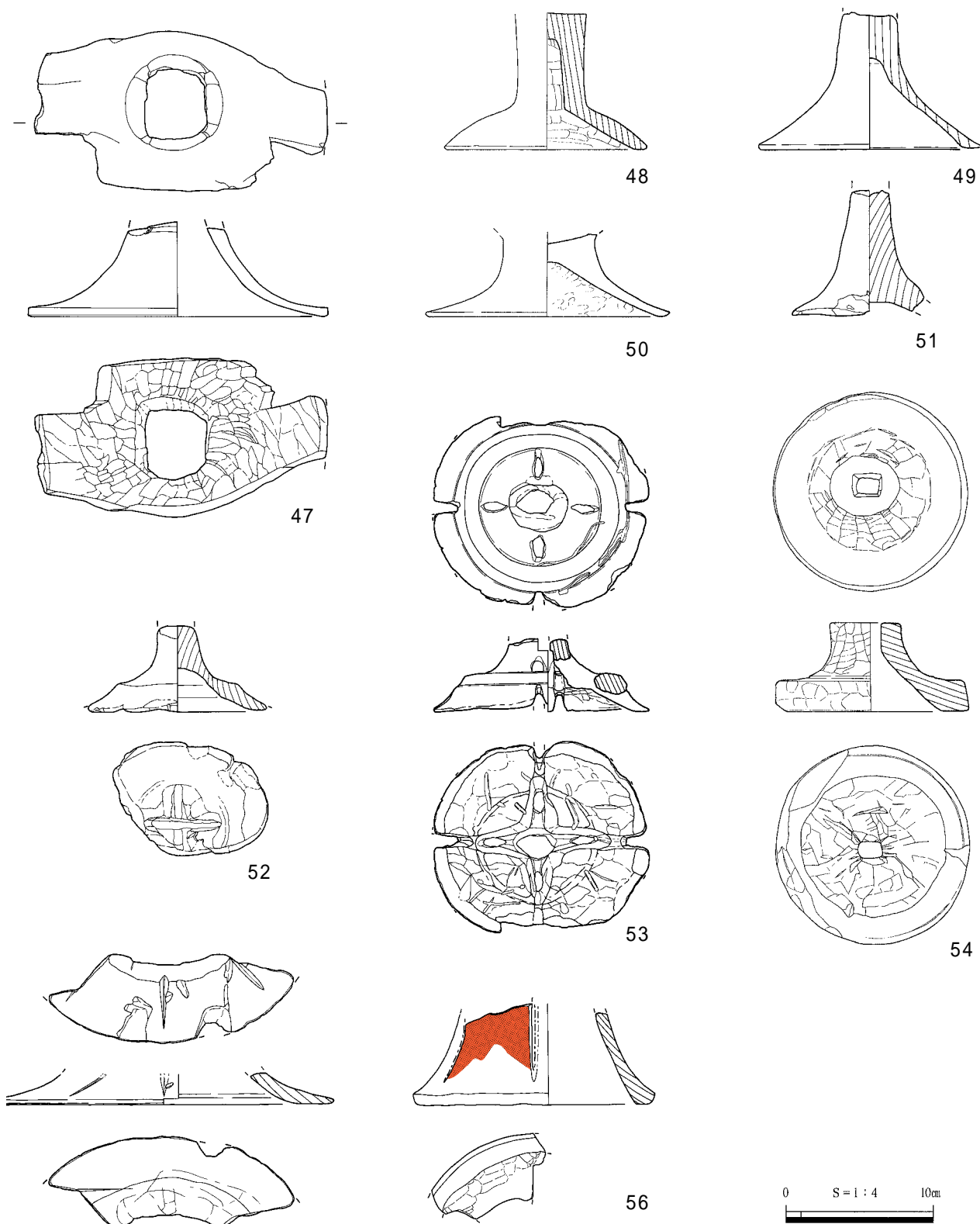
52は脚部中ほどにわずかに段を形成している。内面中央には十字の切り込みがあるが、透かし孔は形成していない。

53は明確な段を形成し、段の上下には4方向の縦長透かし孔を施している。内面には透かし孔に対応した十字の切り込みがあり、段の裏に当たる部分も水平に加工され、段を形成している。

54は発掘調査報告書で未製品とされていたものである。裾端部が厚く、上部は平坦に施されている。高杯脚部以外に紡織具のタタリ台の形状にも似ている。

55は外面におそらく8条の縦長の溝を彫っていたものと思われる。

56は6方向に縦長の透かし孔を施すもので、外面には赤彩が見られる。



55

第16図 高杯 (12)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
46	高杯	国道4区	SA24	弥生後期～古墳前期	高 4.8幅13.5厚0.5	横木取り	ヤマグワ	赤彩	16574
47	高杯	県道4区	層?	～弥生前期	高 6.5幅(20.6)厚1.0	横木取り	ヤマグワ	:295図303	6260
48	高杯	県道8区	不明	不明	高 5.6幅(17.0)	横木取り	ヤマグワ	:292図292	27024
49	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 9.4幅15.2	横木取り	スギ		33250
50	高杯	県道4区	SD11	弥生後期	高 9.5幅14.0	横木取り	トチノキ	:292図293	3707
51	高杯	国道4区	SD38-3	弥生後期～古墳前期	高 8.5幅 9.0	横木取り	ヤマグワ		15970
52	高杯	県道7区	層?	弥生中期～奈良	高 6.4幅(12.1)	横木取り			38909
53	高杯	国道4区	SD38	弥生後期～古墳前期	高 5.0幅(14.7)	横木取り	ヤマグワ		17942
54	高杯	県道7区	K層	弥生中期	高 6.1幅13.5厚1.1	横木取り	ヤマグワ	:295図304	42428
55	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 2.2幅(23.1)厚1.1	横木取り	ヤマグワ		29334
56	高杯	県道4区	SD11	弥生後期	高 6.9幅(16.4)厚1.2	横木取り	ヤマグワ	:292図294 赤彩	3716

(1) 高杯 飾り耳：57～64



写真12 高杯(7)

高杯の飾り耳と思われる資料を挙げた。その判断基準は、短辺側に木口面があり、高杯の中で特に花卉高杯の杯部に形成される飾り耳と木取りが同じであること、全体に赤彩されていることである。多くは口縁部との接点に透かし孔を施している。形態はそれぞれ違うように見えるが、いくつかのまとまりに分けられる。

先端が尖るもの

57と61である。平面形はどちらも先端が尖っているが、厚さは先端までほぼ同じである。口縁部と接する部分には透かし孔を施し、57は途中で屈曲し、上面には外形に沿った線刻を施して装飾性を増している。

帯状のもの

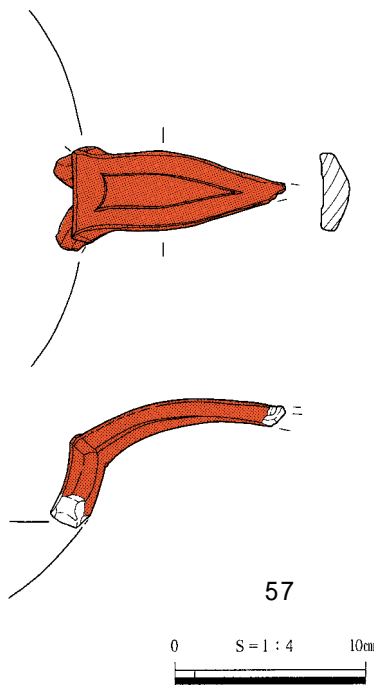
58～60である。58は口縁部との接点から同じ幅でほぼ水平に飛び出し、先端部で下に丸く折り返す形状となっている。59は口縁部との接点に透かし孔を施し、先端まで杯部の立ち上がりと同じラインで緩やかに外反する。60も59とほぼ同様だが、中央でやや幅を狭め、先端部はまた広がって小さな突起状の装飾を付ける。58と59はわずかだが、すべて赤彩されている。

幅広で先端に小さな装飾を作るもの

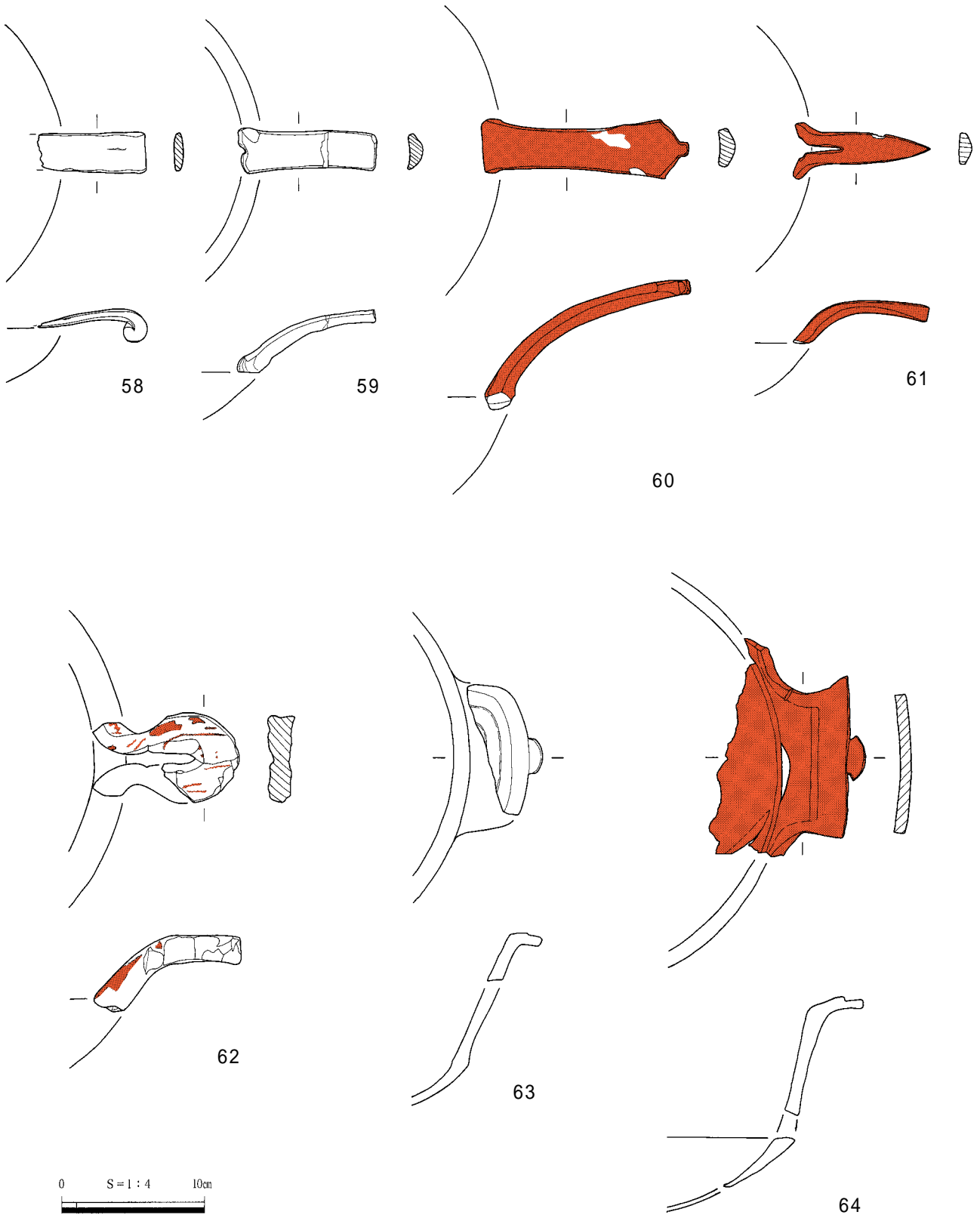
63と64である。63は先端しか残存していないため不明であるが、64は杯口縁部からやや角度を変えて立ち上がり、先端付近で再び外側に屈曲して小さな装飾を付ける。外形に沿って一回り小さい形に線刻を施し、装飾性を増している。64は口縁部との境に透かし孔を施している。

丸く膨らむもの

62である。杯口縁部の傾きに沿ってほぼ水平の状態まで外反する。透かし孔は膨らんだ部分の中心まで及んでいる。



第17図 高杯(13)



第18図 高杯 (14)

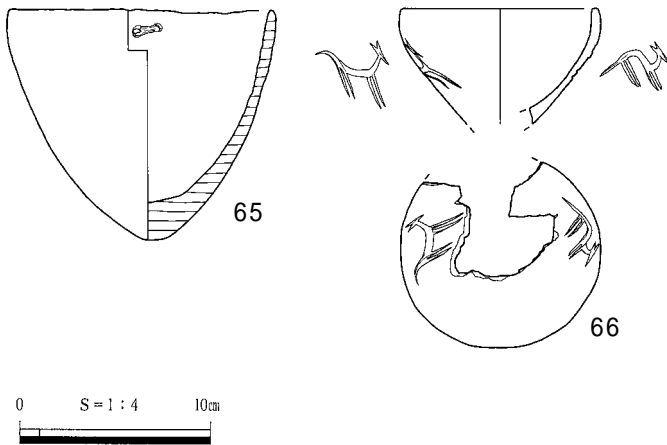
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
57	高杯	国道1区	SD11	弥生後期	高 7.0,厚1.3	横木取り	ヤマグワ	:142図76 赤彩	5709
58	高杯	国道4区	SD38-3	弥生後期～古墳前期	高 2.4,幅2.8,厚0.6	横木取り	ヤマグワ		15919
59	高杯	国道4区	SD38-2	弥生後期	高 9.8,幅3.3,厚1.2	横木取り	ヤマグワ		17371
60	高杯	県道7区	H層	弥生後期	高 4.6	横木取り		:290図282 赤彩	36314
61	高杯	県道4区	SD11	弥生後期	高 3.0	横木取り	ヤマグワ	:290図281 赤彩	5966
62	高杯	国道4区	SA24	弥生後期～古墳前期	高 10.3,幅6.3,厚1.7	横木取り	ヤマグワ	赤彩	16597
63	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 2.5	横木取り	カヤ	:290図283	30239
64	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 11.9,幅 15.1	横木取り		:290図280 赤彩	33038

厳密に椀と杯を分けることは難しく、ここでは一つにまとめた。今後の資料の増加や機能・用途によっては別器種となる可能性も否定できない。

(2) 椀・杯形容器 : 65~84



写真13 椀・杯形容器(1)



第19図 椀・杯形容器(1)

「コップ形容器」または「砲弾形容器」と言われているものである。いずれも底部は尖底を呈し、胴部は細長くなっている。未製品も見つかっており、いずれもヤマグワ製である。木取りはほとんど縦木取りであるが、横木取りのものも1点存在し、木目を活かした作りをしている。製品はいずれも内外面ともに丁寧に調整されており、赤彩や黒彩と思われる痕跡が残っているものもある。弥生時代中期のものが多く、後期はやや出土量が減少する。用途は不明であるが自立しないため、器台のようなものが存在するか、もしくは民俗例にある「^{べくはい}可杯」と呼ばれる酒器のように中身を飲み干すまで置くことができないものであろうか。74のような角杯状のものも出土しており、その用途は今後の課題となる。

65は横木取りの例で、この中ではやや大型の部類となる。口縁部に2孔を開け、樹皮と思われる紐を通してある。

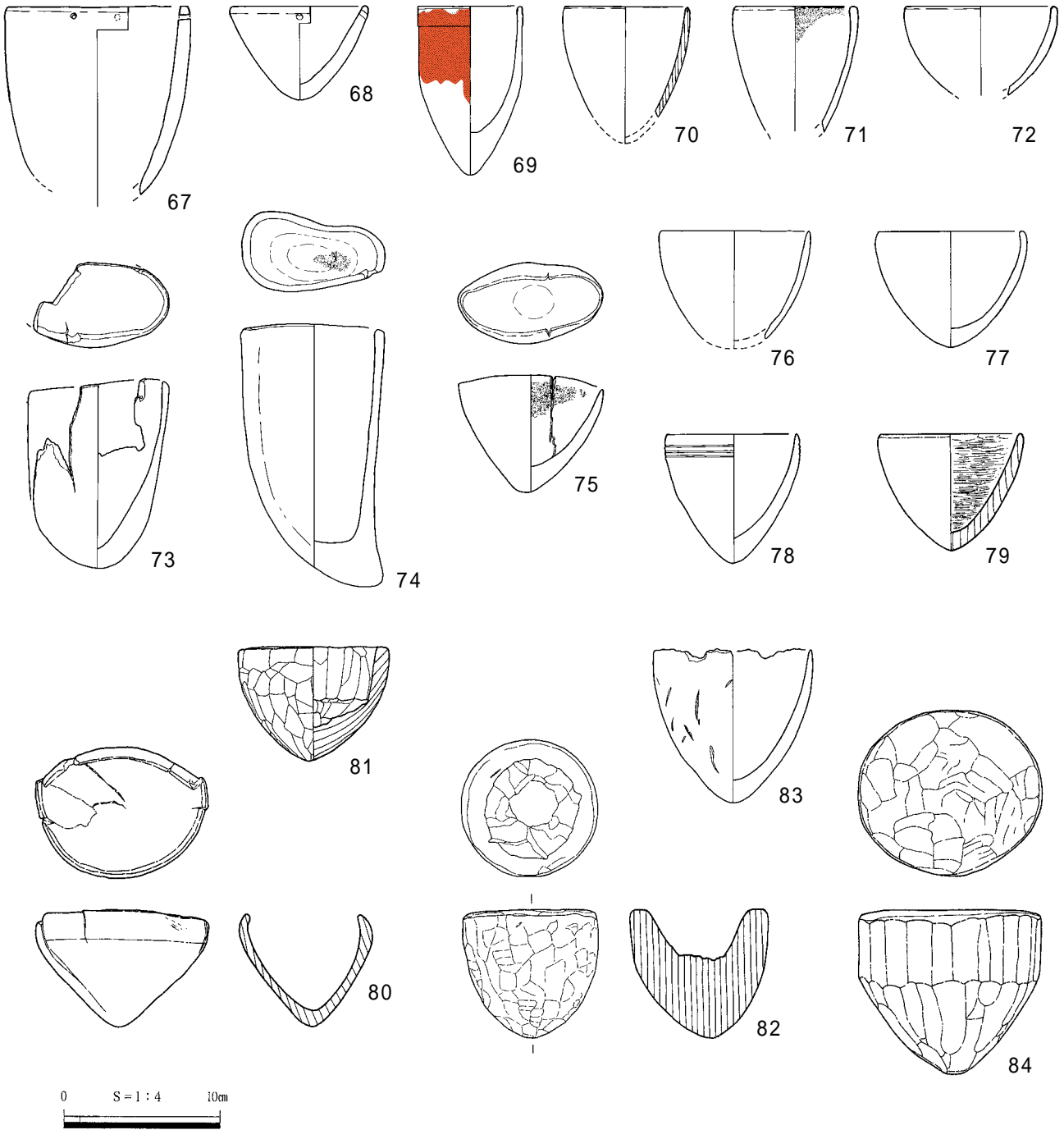
66は胴部に2頭のシカと思われる動物の線刻が施されたものである。2頭は対になる位置に、跳ねる姿と立つ姿で表現されている。

69は口縁径に対して深さがあるタイプで、口縁部を段状に肥厚させ、胴部は筒状の部分と尖底となる部分で構成される。胴部には赤彩が施されている。

78は口縁部に3条の突帯を廻らすものである。67、68は口縁部に穿孔をもつもので、67は2孔1対で口縁の向かいに2ヶ所施された形跡がある。

74は角杯状のものである。縦木取りで、内部も丁寧に彫りこまれている。平面はやや楕円形を呈している。

81、82、84は未製品である。外面の粗削りをしてから内面の粗削りを行っていたと考えられる。



第20図 碗・杯形容器 (2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
65	碗・杯形容器	県道8区	木器溜4	弥生後期	高12.2,幅14.2,厚0.5	横木取り		:286図249	30364
66	碗・杯形容器	県道8区	D層	弥生中期～後期	高 6.1,幅10.6,厚0.3	縦木取り	ヤマグワ	:286図248 シカ線刻	27000
67	碗・杯形容器	県道7区	木器溜3	弥生中期	高 12.2,幅(11.6),厚0.7	縦木取り		:286図260	39110
68	碗・杯形容器	県道7区	K層	弥生中期	高6.0,幅8.9,厚0.8	縦木取り	ヤマグワ	:286図253	42385
69	碗・杯形容器	国道4区	SD38	弥生後期～古墳前期	高11.9,幅 6.8	縦木取り	ヤマグワ	赤彩	17873
70	碗・杯形容器	県道7区	不明	不明	高 7.2,厚0.4	縦木取り	ヤマグワ		42883
71	碗・杯形容器	県道7区	N層	弥生中期	高 8.5,幅(8.0),厚0.4	縦木取り	ヤマグワ	:286図256	44733
72	碗・杯形容器	県道7区	L層	弥生中期	高 5.7,幅(9.8),厚0.5	縦木取り	ヤマグワ	:286図254	43979
73	碗・杯形容器	県道7区	J層	弥生中期	高12.2,厚1.6	縦木取り	ヤマグワ	:286図250	43903
74	碗・杯形容器	県道7区	J層	弥生中期	高17.0,幅9.2,厚2.7	縦木取り	ヤマグワ	:286図261	35824
75	碗・杯形容器	県道7区	J層	弥生中期	高7.6,幅9.3,厚1.6	縦木取り	ヤマグワ	:286図258	42351
76	碗・杯形容器	県道7区	SD27	弥生中期	高 7.0,幅9.6,厚0.5	縦木取り	ヤマグワ		43406
77	碗・杯形容器	県道8区	D層	弥生中期～後期	高7.5,幅(9.4),厚0.5	縦木取り	ヤマグワ	:286図251	27731
78	碗・杯形容器	県道7区	SD27	弥生中期	高8.3,幅8.4,厚1.6	縦木取り	エノキ属	:286図255	42302
79	碗・杯形容器	県道7区	K層	弥生中期	高7.6,幅8.9,厚0.8	縦木取り	スギ	:286図252	42431
80	碗・杯形容器	県道7区	J層	弥生中期	高7.7,厚0.4	縦木取り	ヤマグワ	:286図257	36605
81	碗・杯形容器	国道2区	1層	弥生前期～中期	高7.4,幅9.7	縦木取り	ヤマグワ	:145図94	6597
82	碗・杯形容器	県道7区	I層	弥生中期	高8.5,幅9.0	縦木取り	ヤマグワ	:286図262 未製品	40860
83	碗・杯形容器	県道7区	H層	弥生後期	高 9.9,幅(10.6),厚0.7	縦木取り	ヤマグワ	:286図259	35805
84	碗・杯形容器	国道2区	1層	弥生前期～中期	径11.8,高10.7	縦木取り		:163図183 未製品	6694

(2) 椀・杯形容器 : 85~91



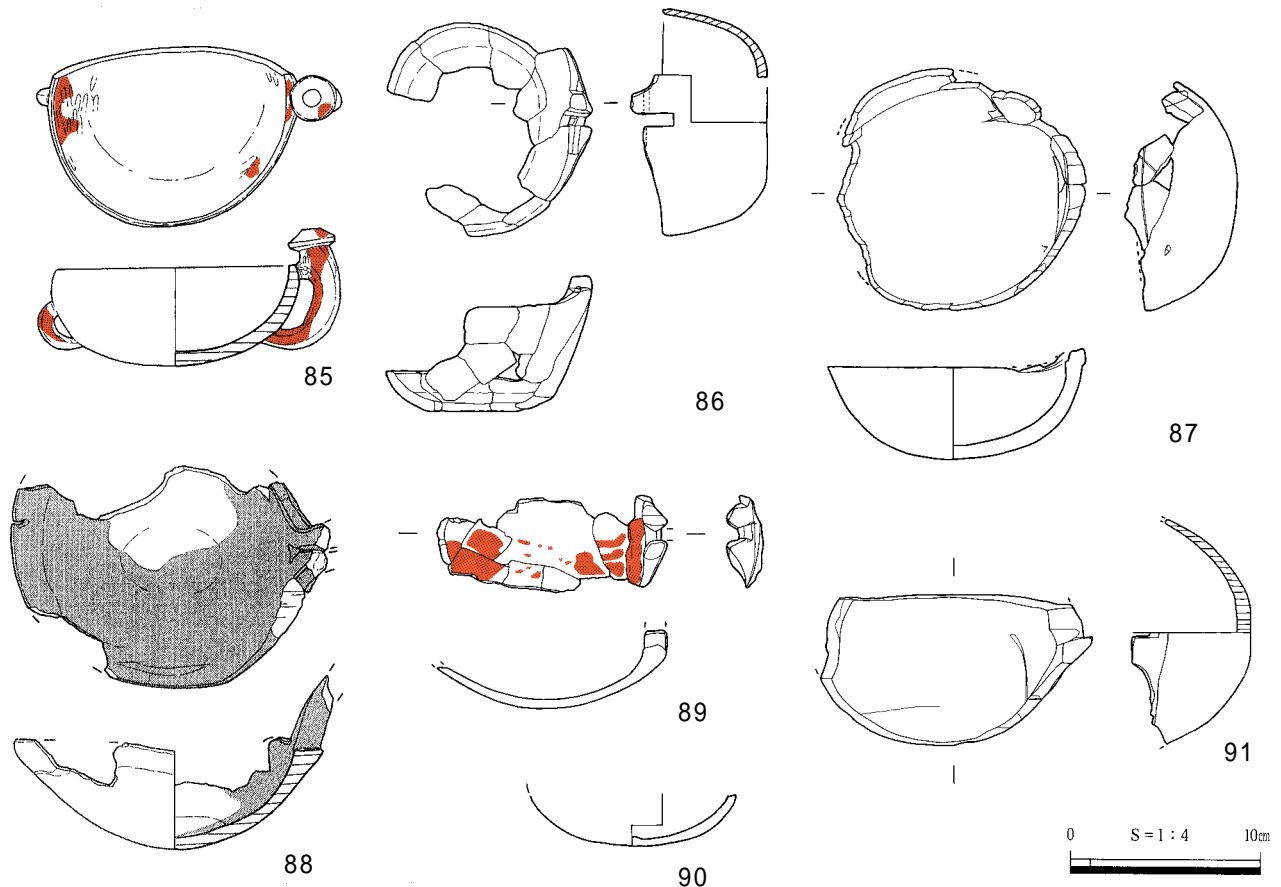
写真14 椀・杯形容器(2)

杓と混同する可能性もあるが、容積に対して把手が小さいものを容器として分類した。把手の大きさは85以外不明であるが、口縁部との接合部の形態が非常に似ている。

86~89、91は把手(飾り耳?)が口縁の一方に付くもので、平面形はやや楕円形を呈する。形態的には杓や片口と似ているが、(杓・片口としては)使用に際してやや小さいと思われる。横木取り・柁目で、木口方向に飾り耳を作り出している。

85は片側に大きな把手が付き、対になる位置には小型のものが付く。把手先端部は笠状となっている。内外面ともに丁寧に磨かれており、外面には赤彩の痕跡が見られる。樹種はイヌガヤで、横木取りである。

90は丸底のもので、上部構造は不明である。横木取りである。



第21図 椀・杯形容器(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
85	椀・杯形容器	県道8区	SD54	弥生後期	高5.2、幅12.6	横木取り	イヌガヤ	:285図247 赤彩	28000
86	椀・杯形容器	県道8区	木器溜3	弥生後期	高7.2、幅10.7	横木取り	ヤマグワ		30267
87	椀・杯形容器	県道3区	層	弥生後期	高 5.9、幅14.0	横木取り	ヤマグワ	赤彩	20309
88	椀・杯形容器	国道2区	木器溜	弥生後期	高 5.2、幅14.7	横木取り	ヤマグワ	:146図99 黒彩?	5798
89	椀・杯形容器	県道8区	SD38	弥生後期	幅 12.2	横木取り	スギ	赤彩	28746
90	椀・杯形容器	国道1区	木器溜2	弥生後期	高 2.7、幅10.8	横木取り	ヤマグワ	:145図93	5886
91	椀・杯形容器	国道4区	b層	弥生後期	高 6.2	横木取り			17263

(2) 椀・杯形容器 : 92~98

92~98は脚付のものである。高杯と比べて脚部の高さの比率が小さく、脚上部の径が大きい。杯部は緩やかに斜め上方に開き、杯部の外面・内面および脚部の外面には赤彩が施される。

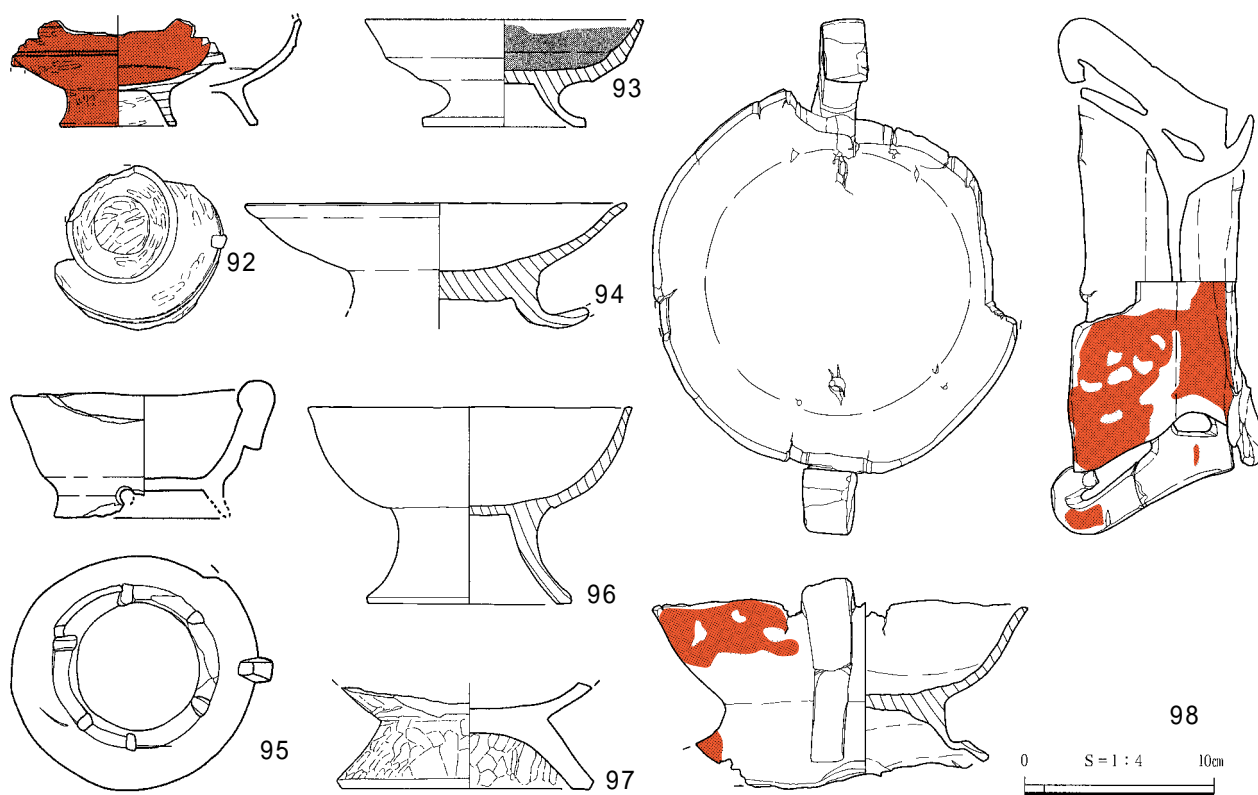
92は口縁部が欠損のため不明だが、器壁が内湾して壺状の器形となる可能性がある。胴部には把手が付いていた形跡が見られ、外面全体と胴部内面には赤彩が見られる。

95は口縁部に耳状のツマミを付け、脚部には円形の透かし孔を6方向開けている。

98は大型の低脚杯で、脚部下方から口縁部にかけて大型の飾り耳を一对削り出している。把手と胴部・脚部の間には透かしを入れ、装飾性を増している。横木取り、ヤマグワ製で、耳は木口方向に付けられている。内面は不明だが、外面には赤彩の痕跡が見られる。



写真15 椀・杯形容器(3)



第22図 椀・杯形容器(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
92	椀・杯形容器	県道4区	層	弥生後期	高 5.6,幅(11.3),(6.1)	横木取り	ヤマグワ	:285図243 赤彩	5453
93	椀・杯形容器	県道8区	SD38	弥生後期	高5.7,幅(14.6),(8.6)	横木取り	ヤマグワ	:285図244 黒彩?	30403
94	椀・杯形容器	国道3区	不明	弥生後期	高6.7,幅20.3	横木取り	ケヤキ		11367
95	杯形容器	国道1区	木器溜	弥生後期	高6.7,幅13.0,9.3	横木取り	ヤマグワ	:146図101	5823
96	椀・杯形容器	国道4区	SD38-2	弥生後期	高10.4,幅(17.0),(10.8)	横木取り	ケヤキ		17476
97	椀・杯形容器	県道8区	SD38	弥生後期	高 5.4,幅15.2×13.6	横木取り	スギ	:302図340	33364
98	椀・杯形容器	国道4区	SD38-3	弥生後期~古墳前期	底径(20.4),高 11.2,底径(18.6)	横木取り	ヤマグワ	赤彩	16059

(2) 椀・杯形容器 : 99~103



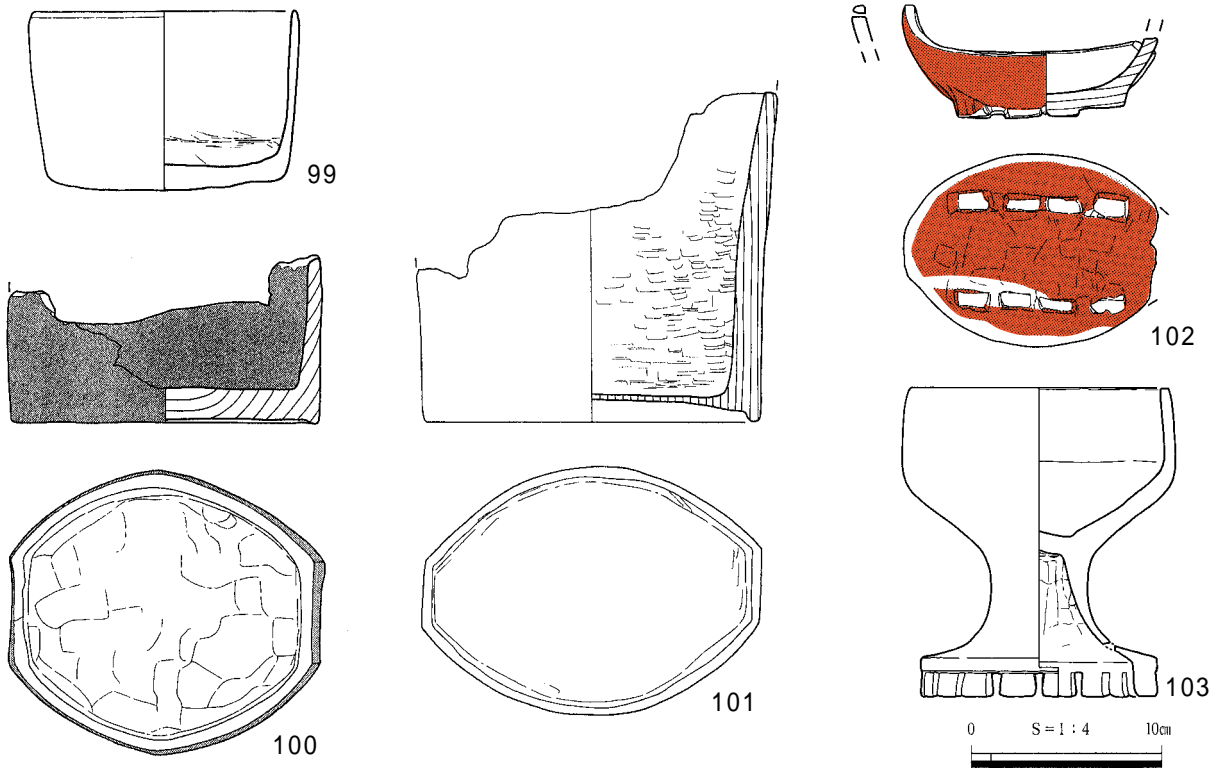
写真16 椀・杯形容器(4)

その他としたものをまとめた。

99~101は胴部が垂直に立つ筒形タイプで、99は平面が楕円形、100・101は舟形の両先端をカットした形をしている。100は底部以外黒彩されている。類似例が島根県松江市西川津遺跡や佐賀県生立ヶ里遺跡から出土している。

102は8個の脚を持つ平面が舟形の容器であり、外面全体に赤彩されている。島根県出雲市海上遺跡や山口県阿武郡阿東町宮ヶ久保遺跡から類似例が出土している。

103は高杯とするには杯部がかなり深く、ワイングラス状となる。樹種はヤマグワ製だが、縦木取りであり、高杯とは製作技術上異なる。脚部は端部に突起を16個持ち、高杯脚部に類似する。



第23図 椀・杯形容器(5)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
99	椀・杯形容器	県道8区	SD38	弥生後期	口径(13.6)底径(12.4)高9.5,身深8.1,厚0.4~		ヤマグワ	:302図342	33135
100	椀・杯形容器	国道2区	2層	弥生前期~中期	底径16.6×15.0	横木取り	ヤマグワ	:146図100	6605
101	椀・杯形容器	県道7区	J層	弥生中期	高(17.7)底径18.0×13.1,脚高0.5,厚0.3~	横木取り	ヤマグワ	:302図341	36823
102	椀・杯形容器	県道7区	N層	弥生中期	長(13.4)幅10.2,高6.0,脚高0.4,身深2.3,厚0.6~	横木取り		:285図245 赤彩	44977
103	椀・杯形容器	県道7区	I層~J層	弥生中期	高16.4,幅(13.6),(12.6)	縦木取り	ヤマグワ		42895

(3) 桶形容器 104~106

発掘調査報告書 で桶形容器と呼んでいるものである。これらには蓋がセットで出土しているものもある。すべてヤマグワ製である。

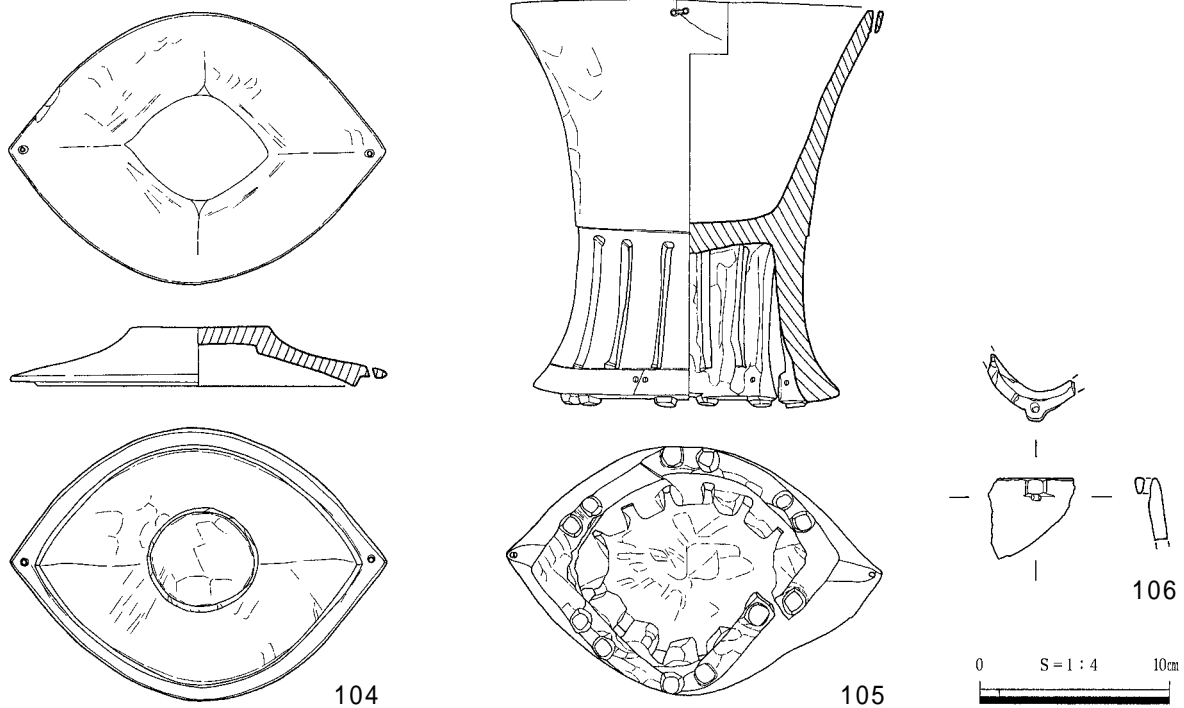
104はこの容器とセットとなる蓋である。平面は舟形を呈し、頂部はやや盛り上がりて扁平となる。先端部には穿孔が開けられ、身と紐で綴じるものと思われる。裾部内側には段があり、栓蓋(後述)状を呈している。

105の平面形は舟形を呈し、器形は脚端部から内傾しながら底部で最小径となり、その後口縁部まで外反する。口縁部両端には縦方向の紐孔を作り出している。脚部には12条の縦長透かし孔と脚部下面に2個1組の突起を6組対称的な位置に配している。脚部の透かし孔が施されている部分は他より一段削られている。また口縁部や脚部には補修痕がみられる。

106は破片だが、平面形状と口縁部の紐孔からここに分類した。横木取りで、他のものと異なる。



写真17 桶形容器



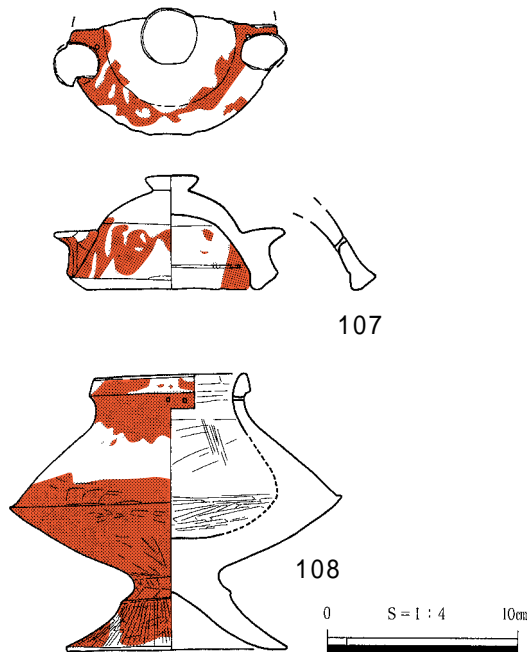
第24図 桶形容器

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
104	蓋	県道7区	J層	弥生中期	高3.0,幅19.6×14.3,厚0.8	横木取り	ヤマグワ	:287図264	44000-2
105	桶形容器	県道7区	J層	弥生中期	径19.8×14.3,高3.0,厚0.8~	縦木取り	ヤマグワ	:287図263	44000-1
106	桶形容器	県道7区	J層	弥生中期	高 4.3	横木取り	ヤマグワ		37561

(4) 壺 107~110



写真18 蓋(上)と壺(下)

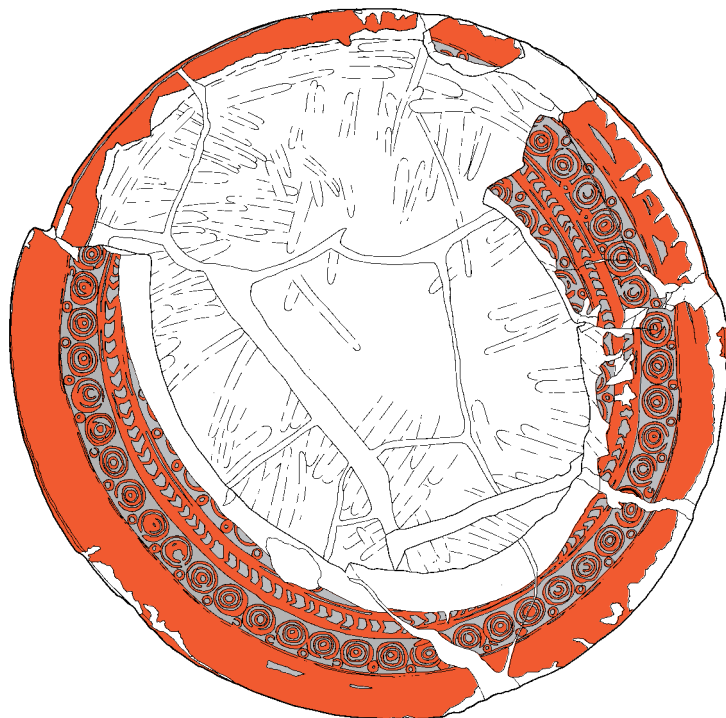
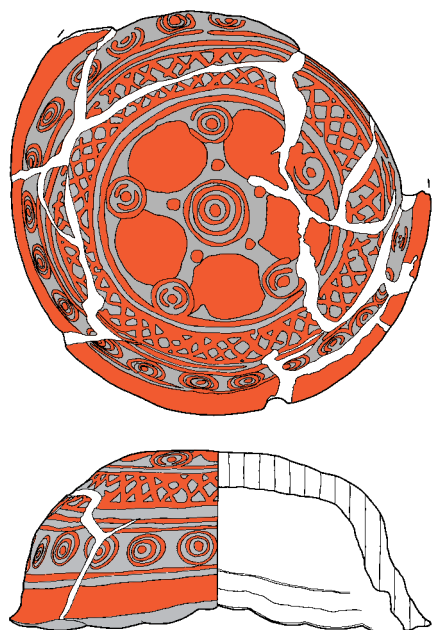


第25図 壺(1)

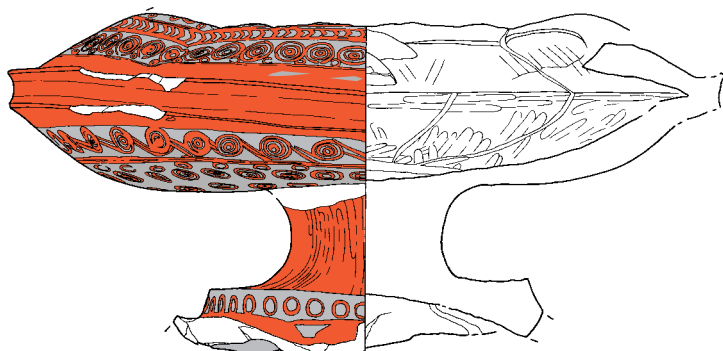
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
107	蓋	県道8区	SD38	弥生後期	高6.1,幅8.4,厚0.2~1.2	横木取り	ヤマグワ	:285図239 赤彩	26614
108	壺	県道8区	SD38	弥生後期	口径8.0,高14.6,幅17.5,厚0.5~底径11.6,身深8.7	横木取り	ヤマグワ	:285図240 赤彩	26711

107、108は壺とその蓋である。出土位置が近く、壺の口縁と蓋がぴったり合うほか、紐綴じと思われる1対の孔の位置も一致するため、セット関係であったと考えられる。蓋は頂部にツマミを持ち、裾の両端にもツマミ状のものを作り出している。壺は算盤玉状の胴部と八の字状に広がる脚部で構成される。胴部の張り出しには突帯状に段をつけている。口縁部はやや外反して肥厚する。内部は加工痕が顕著で、小型の鑿やヤリガンナ等で加工したものである。107、108とも外面に赤彩の痕跡が見られる。どちらも横木取り、ヤマグワ製である。

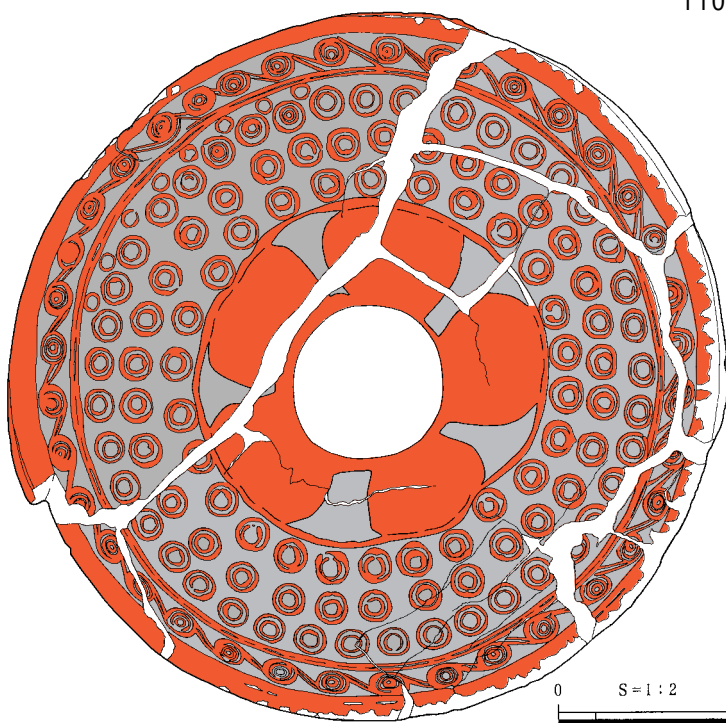
109、110は装飾壺とその蓋である。その意匠から、土器の台付装飾壺と非常に関連が深いと思われる。壺、蓋ともに外面に黒漆を塗布した後、赤漆で文様を描いたものと推測される。109は壺蓋で、赤漆の線で文様帯を分け、頂部から四重圏同心円文と5つの小円、その外に5つの三重圏同心円文と円を交互に配し、さらにその外には斜格子文、三重圏同心円文となり、裾部は赤漆で縁取られている。同心円文の観察から、筆状の道具によって描かれていることがわかる。裾部内面には一段を設け、壺の口縁部と合うようになっている。壺は算盤玉状の胴部と脚部から成り、端部はどちらも欠損のため不明であるが、蓋の形状から口径も同程度の大きさと考えられる。胴部の張り出し部内側にまでも丁寧な加工痕が見られ、また脚部内面にも黒彩され、全体に非常に丁寧な仕上がりとなっている。胴部および脚部にも文様帯を設け、胴部上半には逆くの字状の刺突文風の文様と、それを挟む三重圏同心円文と一重圏円文を交互に配す文様が描かれる。下半には中央に5葉の花弁文様とその外側の3列の二重圏同心円文、一番外側に三重圏同心円文を2本の斜線でつないだ連続渦文が描かれる。壺、蓋ともに横木取りであり、樹種は、壺がモクレン属、蓋がサクラ属である。



109



110



0 S=1:2 5cm

写真19 蓋(上)と壺(中)および出土状況(下)

第26図 壺(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
109	蓋	県道8区	SD38	弥生後期	高4.9,幅11.1,厚0.9	横木取り	モクレン属	:285図237 漆塗り	30027
110	壺	県道8区	SD38	弥生後期	高 9.0,幅 19.0	横木取り	サクラ属	:285図238 漆塗り	34542

本書でいう桶とは刳物桶のことで、割りぬいた胴部に別作りの底板を結合するものを指す。ほとんどが針葉樹、特にスギで作られている。木取りはいずれも縦木取りである。

(5) 刳物桶 : 111~117



写真20 桶(1)

胴部は平面が小判形、立面が筒形を呈し、長辺の口縁部片側に把手を作り出すタイプである。把手の形状から、丸いアーチ形のものと同様直線形のものに細分することができる。

111は把手が直線形のものである。長辺側の底部に一对の方形穿孔をし、木材を通していたと思われる。底部内面は肥厚し、底板が留められていた部分は圧力のためか痕跡を残している。これらの状況から、底板を下から入れ、孔に通した支木で底板を固定していたと考えられる。また、底部には長辺の対応する位置に切り込みがあり、おそらく2組あったものと推定される。

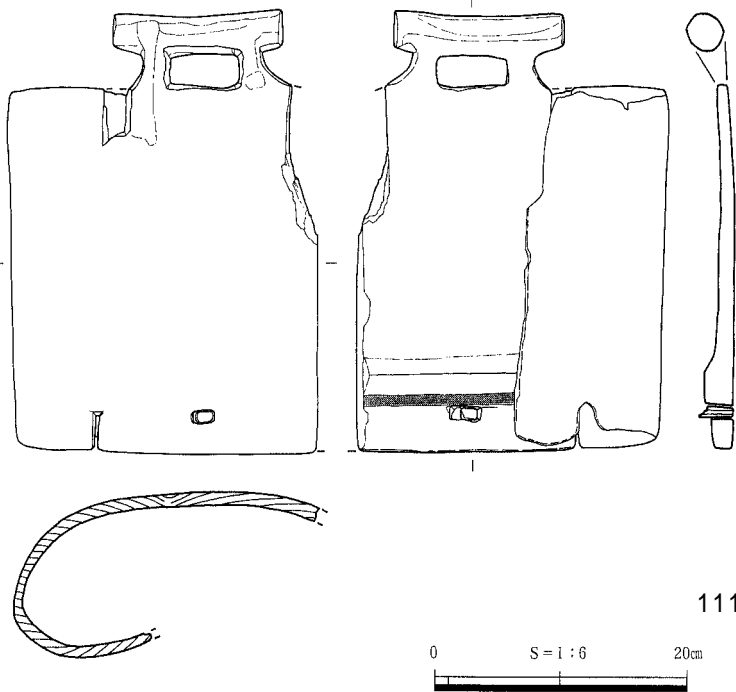
112は把手が直線形のもので、逆台形の形状となる。底部には穿孔が開けられており、木製の釘(以下目釘と呼ぶ)を内側から打ち込んで底板を固定していたと考えられる。

113は把手がアーチ形のもので、内面底部付近は黒彩の痕跡を残しているが、底板の位置でくっきりと切れる。ここに目釘を内側から打ち込んで固定したものと思われる。

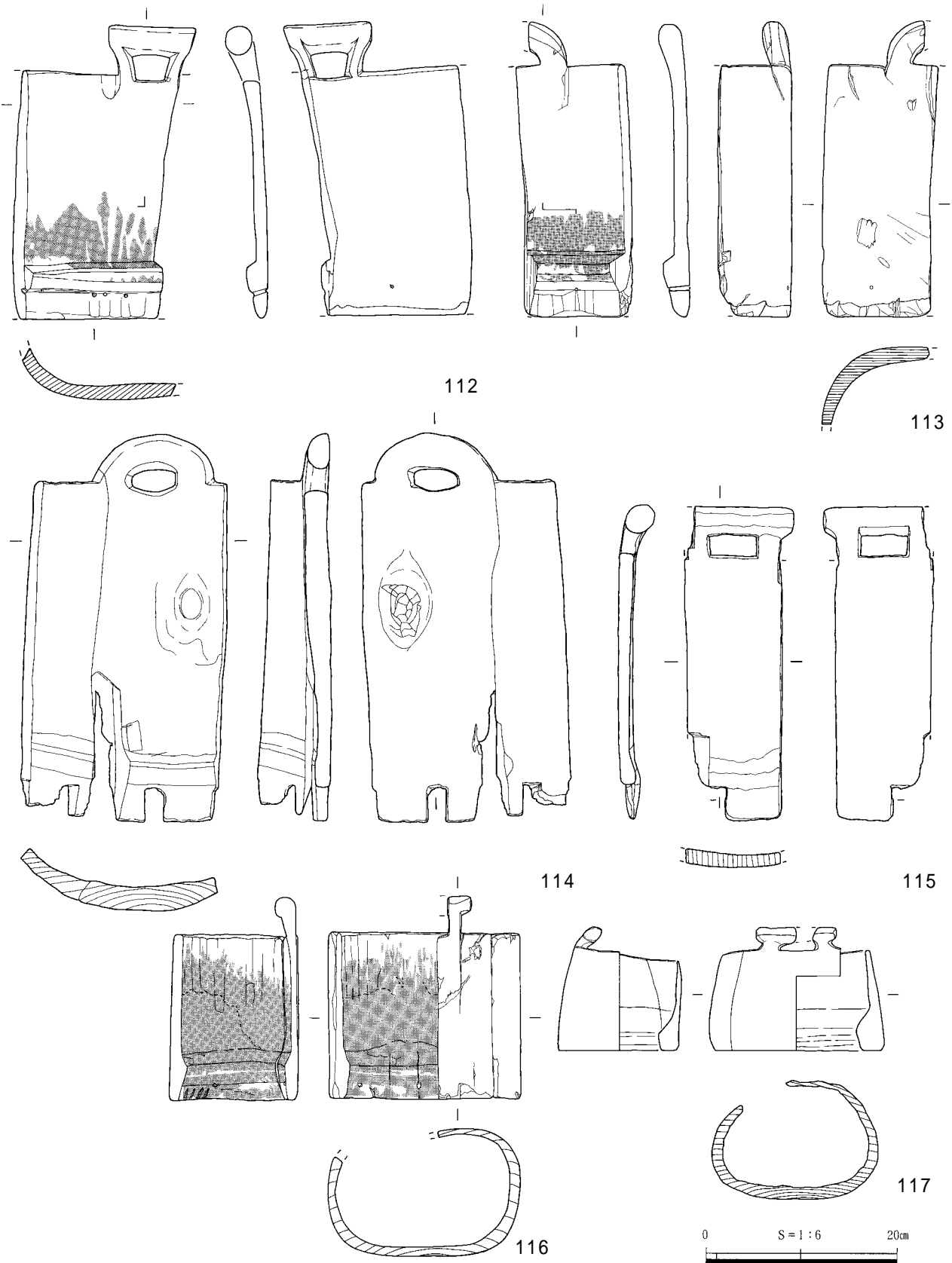
114は把手がアーチ形のもので、底部が他ほど肥厚しない。117と同様に、方形の穿孔の痕跡があり、支木で底板を固定していたと推定される。

115は把手が直線形のものである。欠損しているが、把手部下の底部に方形の穿孔の痕跡があり、支木で底板を固定していたと推定される。

116、117は把手が直線形のもので、器高の低いタイプである。116は内面に黒彩がかなり残っている。底板は内側から目釘を打ち込んで固定したものと考えられる。117はかなり残存しているが、底板の留め方は痕跡がほとんどないため不明である。



第27図 桶(1)



第28図 桶(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
111	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高34.9	縦木取り	スギ	:309図375	30262
112	桶	国道4区	SD38	弥生後期 - 古墳前期	高 31.5, 幅 19.8	縦木取り	マキ属	内面 黒彩	19029
113	桶	国道4区	b	弥生中期	高31.6, 幅 11.5	縦木取り	スギ		18387
114	桶	県道7区	S39	弥生中期	高 41.2, 幅 22.1	縦木取り			36682
115	桶	国道3区	SK154下層		高33.5, 幅 10.4, 厚3.0	縦木取り			14814
116	桶	国道4区	SD38-2	弥生後期	高17.9, 幅20.5	縦木取り	スギ	内面 黒彩	18251
117	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高13.2, 幅17.4	縦木取り			27335

(5) 剝物桶 : 118 ~ 124



写真21 桶(2)

胴部が円筒形のタイプである。口縁部に2孔1対の紐孔突起を持つものや別作りの把手を装着するものがある。破片資料においては桶 との区別が難しい。木取りはすべて縦木取りで、スギ製のものが多く、サワラ、マキ属などもある。

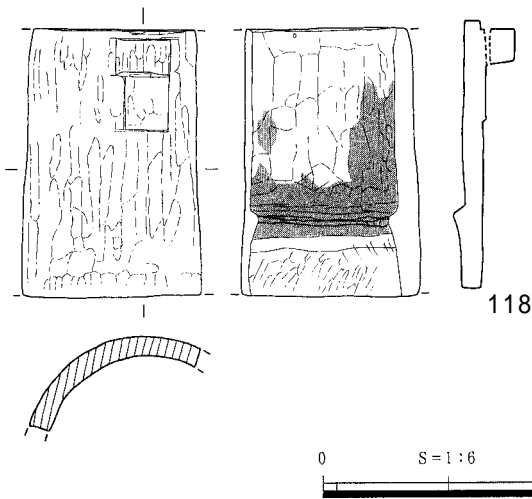
118は内面に黒彩を残し、底板のあたっていた部分がはっきりと判る。底板は目釘を内側から打ち込んで固定している。紐孔突起は口縁部やや下に作られ、平面半円形で直径5mmの穿孔が施される。突起の下は長形状に彫り残されているが、これは突起にかかる負荷に対する強度を増すための工夫と考えられる。

119は内面に黒彩を残し、底板のあたっていた部分がはっきりと判る。紐孔突起は口縁部やや下に作られ、その下には撥形の段を呈す。さらに下の肥厚する部分外側には溝が彫りこまれている。

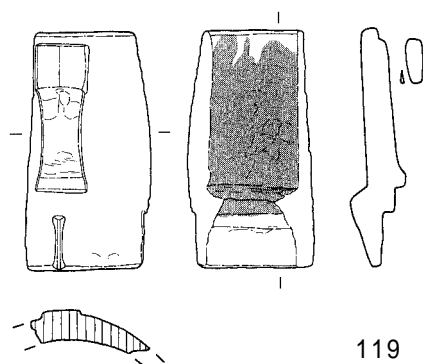
122、123の紐孔突起の作りは118と同様である。123は底板とセットで出土しており、内側から目釘を打ち込んで固定していたと考えられる。

121と124は口縁部と同じ位置に紐孔突起が作られるものである。どちらも突起の下に段は見られない。121は断面が台形になるタイプで、底部は残存していない。124は内面に黒彩が残るが、底板の位置は特定できない。どちらも底板の留め方は不明である。

120は胴部に長方形の彫りこみを入れ、上部と下部に2孔1対の目釘孔が開けられている。これはおそらく把手がつくものと考えられるが、目釘孔を持つ把手は現在のところ確認されていない。底板の留め方は不明である。

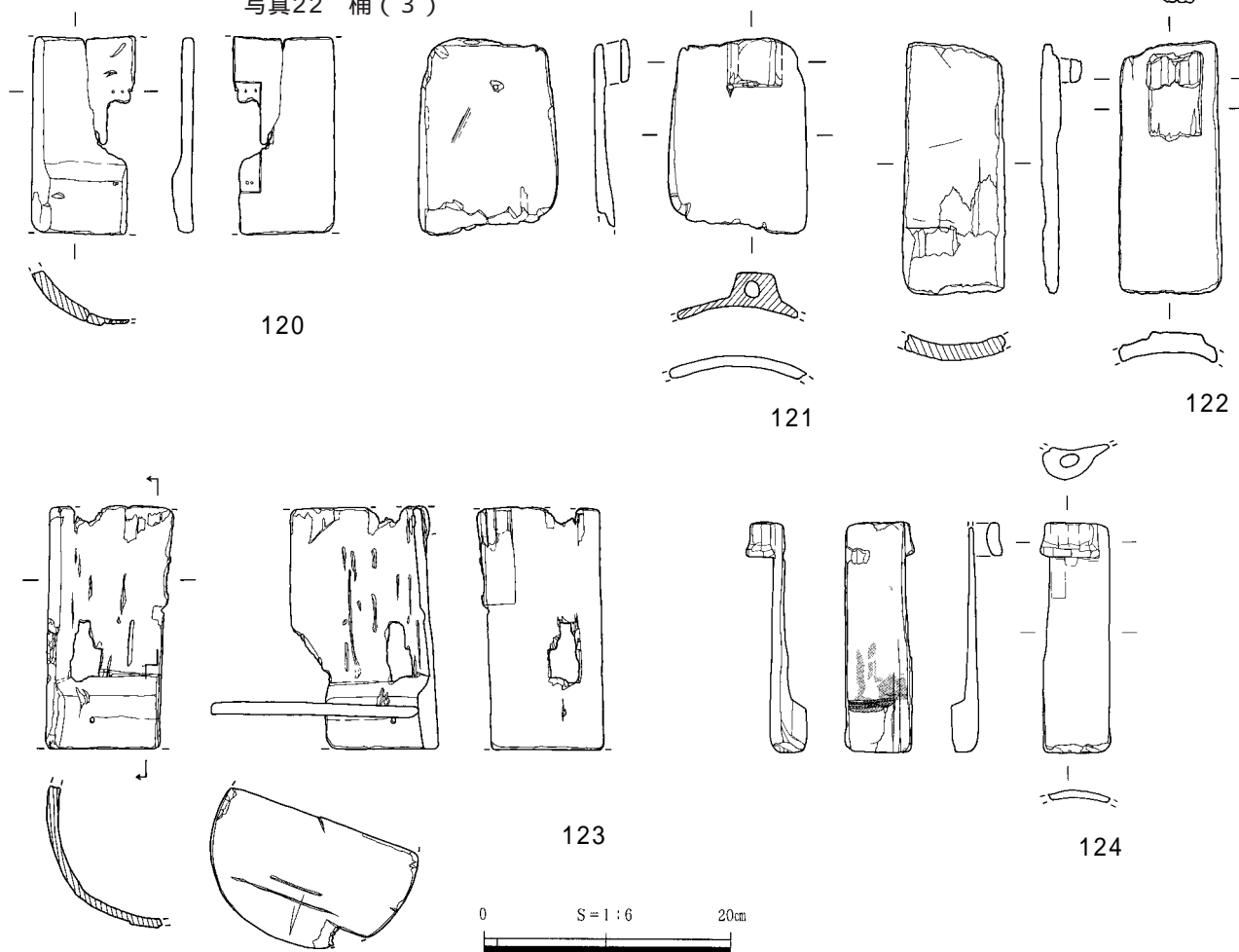


第29図 桶(3)



119

写真22 桶(3)



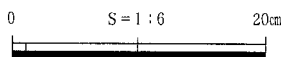
120

121

122

123

124



第30図 桶(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
118	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高21.6,幅 10.4	縦木取り	スギ	:310図380 内面黒彩	33366
119	桶	県道8区	木器溜3	弥生後期	高19.0,厚2.2	縦木取り	スギ	:310図377 内面黒彩	30296
120	桶	県道3区	SD20	弥生後期	高16.3,幅8.4,厚1.6	縦木取り			21056
121	桶	国道4区	SA24	弥生後期～古墳前期	高 16.1,幅(23.0)	縦木取り			16559
122	桶	国道4区	不明	不明	高20.9,幅(19.0)	縦木取り			16451
123	桶	国道4区	不明	不明	高 20.0,幅17.0	縦木取り			16277
124	桶	県道8区	SD69	弥生後期～古墳前期	高19.2,幅(18.2)	縦木取り		内面黒彩	27681

(5) 剝物桶 : 125 ~ 127



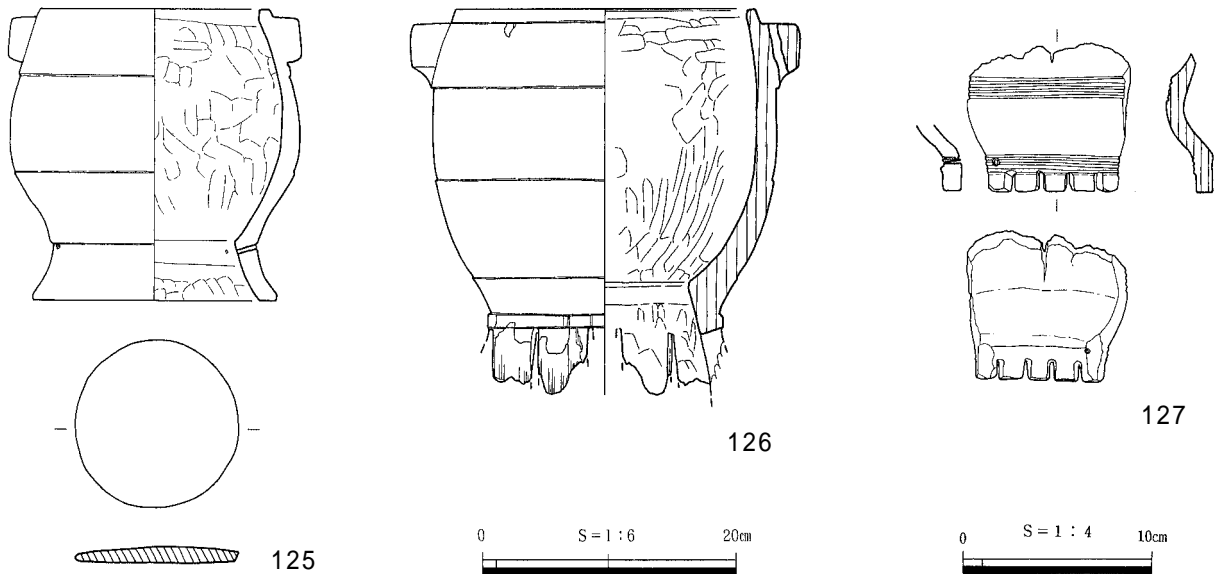
写真23 桶(4)

胴部中央で最も径が大きくなる平面円形の桶で、底板を留める位置で屈曲して内径を小さくし、それより下は脚台となる。底板は桶外側から目釘を打ち込んで直接固定する。胴部中央には帯状の段または突帯を施し、装飾効果を出しており、樹皮のようなものを巻いていた可能性もある。器壁はいずれも全体にほぼ均一な厚さとなっている。いずれも縦木取りで、125、126はスギ製、127はヤマグワ製である。

125は脚部が分割されずに高台状となっている。底板もセットで出土しており、底板側面に目釘痕が残っており、外側から打ち込まれた証拠となる。脚部にはそれ以外にも穿孔の痕跡が残っているが、補修痕と思われる。

126は脚台部が分割されており、曲物や高杯脚部などの表現に近い。端部は12個作られていたと推定される。口縁部やや下には一対の紐孔突起が作られており、相応する蓋が存在すると考えられる。

127は胴部中央から脚部までしか残存していない。胴部には3条の突帯を2ヶ所施し、底板の位置より下部は突起状を呈している。底板は外側から目釘を打ち込んで固定していたと考えられる。



第31図 桶(5)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
125	桶	県道8区	A層	弥生後期	高23.5,幅18.2,19.6,厚1.2	縦木取り	スギ	:311図384	27147
126	桶	国道4区	b	弥生中期	高 30.9,幅23.8	縦木取り	スギ	:148図109	18511
127	桶	県道7区	I~J層	弥生中期	高 7.9,幅 8.5	縦木取り	ヤマグワ	:287図269	38476

(5) 剝物桶 : 128、129

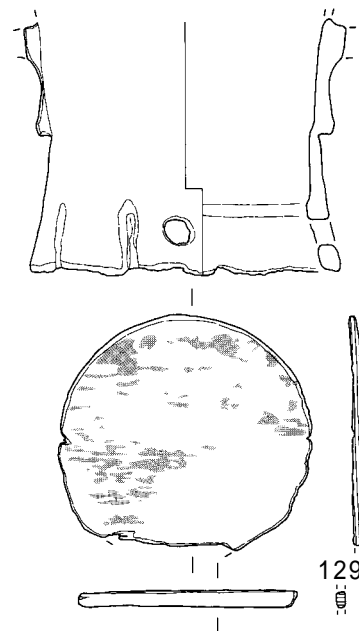
平面形が円形で、胴部が斜め上方に外反するタイプである。どちらも底部はやや厚いが、胴部はやや薄い。いずれも縦木取り、スギ製である。

128は底板を留める位置で最小径を測り、胴部は斜め上方に外反する。胴部は帯状に段を形成し、その間隔はほぼ一定である。目釘孔が外側から内面の底板の位置に向かって開いていることから、目釘を外側から底板まで打ち込んで固定していたと考えられる。外面には赤彩、内面には黒彩が施されている。

129は口縁部が欠損しているが、胴部はほぼ一周する。胴部上方に紐孔突起があり、桶と同様に蓋の存在が想定される。底板を留める位置は最も内径が小さくなり、底板の圧痕がその下に来ることから下から底板を嵌めていたことがわかる。底部両端には直径約1.8cmの穿孔を施しており、目釘の痕跡もないことから、支木で底板を固定するタイプと考えられる。セットで出土した棒材が支木と考えられるが孔の径と合わないので、欠損したか別材が用いられた可能性も考慮すべきである。また、底部には10ヶ所の溝が施され、桶と同様の形状を意図するものと考えられる。底板の片面には黒彩の痕跡が認められることから、内面全体に黒彩されていたと考えられる。



写真24 桶(5)



第32図 桶(6)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
128	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高20.2,幅(17.4)	縦木取り	スギ	外面赤彩 内面黒彩	33385
129	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高 20.5,幅(23.6),25.0	縦木取り	スギ	:310図379 底板・支え木あり	34520

(5) 剝物桶 : 130 ~ 136



写真25 桶(6)

平面形は円形で、底部からゆるやかに内湾して立ち上がり、口径は底径よりも小さくなるドーム状の桶である。口縁部には一対の紐孔突起が作られている。一部には底部下面に突起を付したものもある。すべて縦木取りで、多くはスギ製であるが、サワラなども存在する。

130は口縁部両端に紐孔突起を持ち、蓋とセットになっていたと考えられる。底板を留める部分は肥厚し、複数の目釘孔が残されている。多くは内側から開けられ、ほとんどは貫通していないことから内側から目釘で固定していたと考えられる。底部下面には突起が4ヶ所作られていた痕跡が見られる。紐孔突起には赤彩された形跡があり、おそらく外面全体に彩色されていたものと思われる。

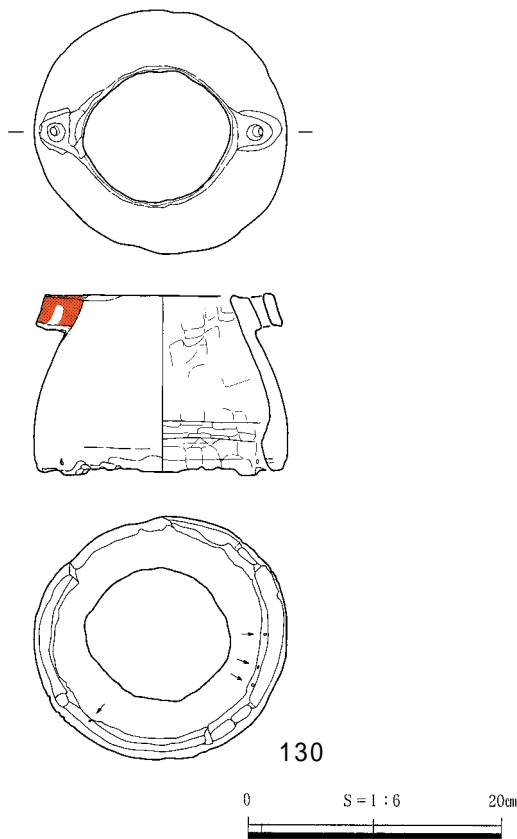
131は内側から目釘で底板を固定するもので、底板の圧痕が底部の肥厚部分に残されている。口縁部には耳が付いていた形跡が見られ、130と同様のものと思われる。

132は破片のため、口縁部の耳や底部の目釘孔が不明であるが、130や131と同様のものではあったと思われる。

133は底部に炭化米が付着した状況で出土したもので、このタイプの桶の用途が推測できる例である。底板の側面には目釘孔が残っており、外側から目釘を打ち込んで固定している。

134、135はともに炭化した破片である。どちらも底部下面には方形の突起を持ち、目釘を内側から打ち込んで固定したものと思われる。

136は口縁部が残存していないが、130などと同様に紐孔突起が作られていたものと思われる。底板は内側から目釘を打ち込んで固定していたと考えられる。



第33図 桶(7)

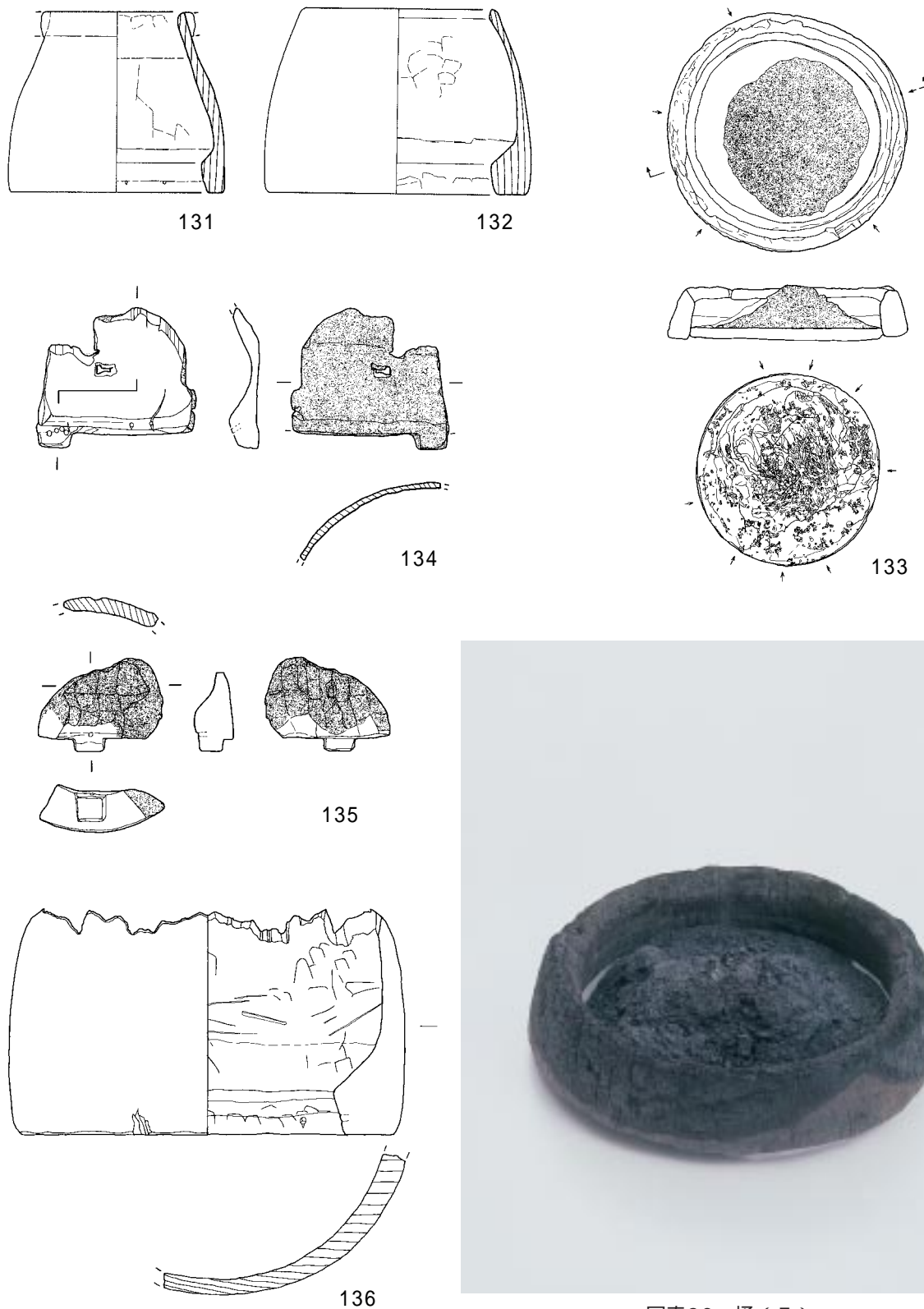


写真26 桶(7)

第34図 桶(8)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
130	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高14.6,幅11.8,19.7,厚1.0	縦木取り	サワラ	:311図383 一部赤彩	3591
131	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高17.7,幅15.1,21.2,厚1.1	縦木取り	スギ	:311図382	27412
132	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高18.0,幅18.3,(25.9),厚0.5	縦木取り	スギ	:311図381	29222
133	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高 5.4(長径18.7短径17.7)/長径18.9短径17.9	縦木取り	スギ	:311図385 炭化米入り	27129
134	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高 13.7,幅(29.6)	縦木取り		外側炭化	2856
135	桶	国道4区	SA24	弥生後期～古墳前期	高 9.1,幅(21.4)	縦木取り		炭化	16438
136	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高 14.5,幅(25.6)	縦木取り			33201

(5) 刳物桶 : 137~141



写真27 桶(8)

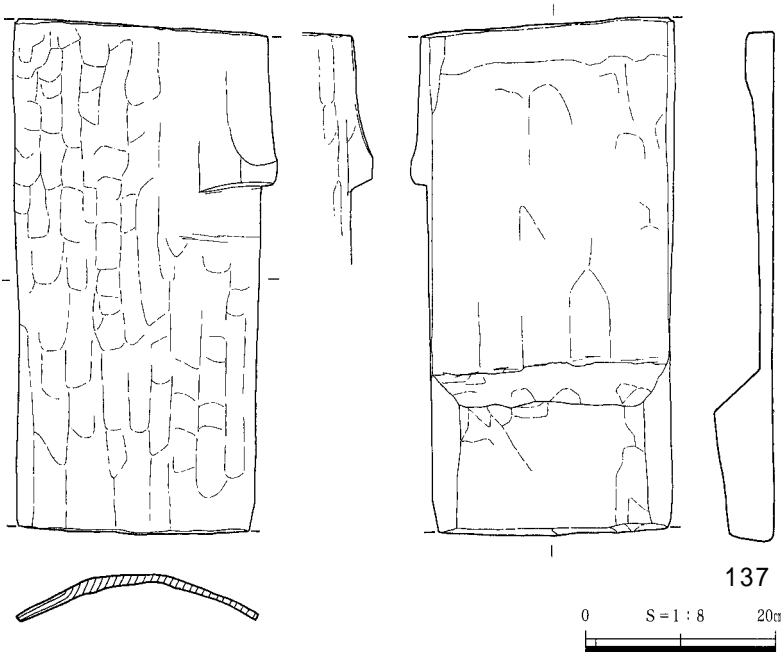
器高40cmを超える大型の刳物桶で、平面は楕円形である。1点を除いて胴部には把手が作られている。把手下側は外に張り出し、上側は滑らかに胴部に続いていく。おそらく内容物を入れたときに把手部には大きな加重がかかるためにこのような形状を採用したものと思われる。他の桶に比べて非常に大型であるが、樹心を外して製作しているために、径での限界はありそうである。

137は器高40.5cmとなる大型桶である。破片のため全体の平面形が分からないが、およそ楕円形を呈すると思われる。底部には目釘孔や方形穿孔がなく、底板の留め方も不明である。口縁部は内側にやや肥厚して段を形成する。

138は器高66.7cmとなる大型の桶で、胴部下半に方形の穿孔が開けられている。内面の穿孔やや上の位置には底板の圧痕が残っていることから、支木を通して底板を固定したものと考えられる。また口縁部は内側にやや肥厚して段を形成している。

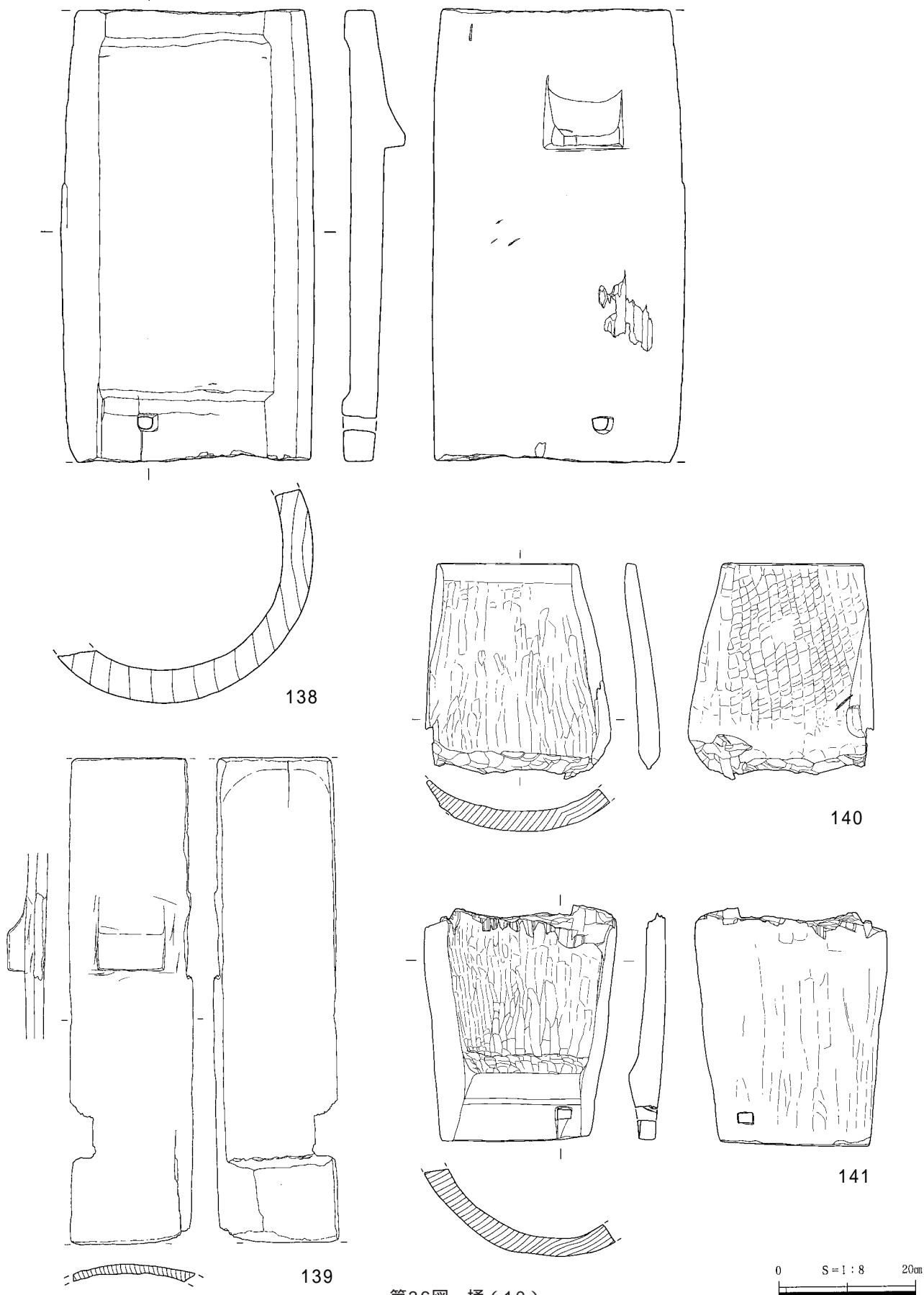
139は器高71.5cmで、出土した桶の中では最も大きいものである。目釘孔などは見られないことから、138と同様に支木で底板を固定していたものと考えられる。また口縁部は内側にやや肥厚して段を形成している点も138と同様である。

140、141は胴部中央で切断された同一個体の大型桶である。形態的には、他のものが円筒状となっているのに対し、胴部中央がやや膨らんでおり、若干異質である。底部には方形の穿孔があり、内面には穿孔の上に底板の圧痕が見られることから、支木で底板を固定するものと考えられる。また内面、外面ともに加工痕が顕著に見られるが、口縁部内側と底部内側は丁寧に加工されている。



第35図 桶(9)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
137	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高40.5,厚1.1	縦木取り	スギ	:310図376	29337



第36図 桶(10)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
138	桶	国道4区	SD38-2	弥生後期	高66.7,幅(44.0-44.5)	縦木取り	スギ		17477
139	桶	県道4区	SA4~6	弥生後期	高71.5,厚1.3	縦木取り		:310図378	2546
140	桶	県道7区	不明	不明	高 30.5,幅(38.0)	縦木取り	スギ		37107
141	桶	県道7区	不明	不明	高 34.0,幅(39.8)	縦木取り	スギ		37108

(5) 刳物桶 その他：142～169



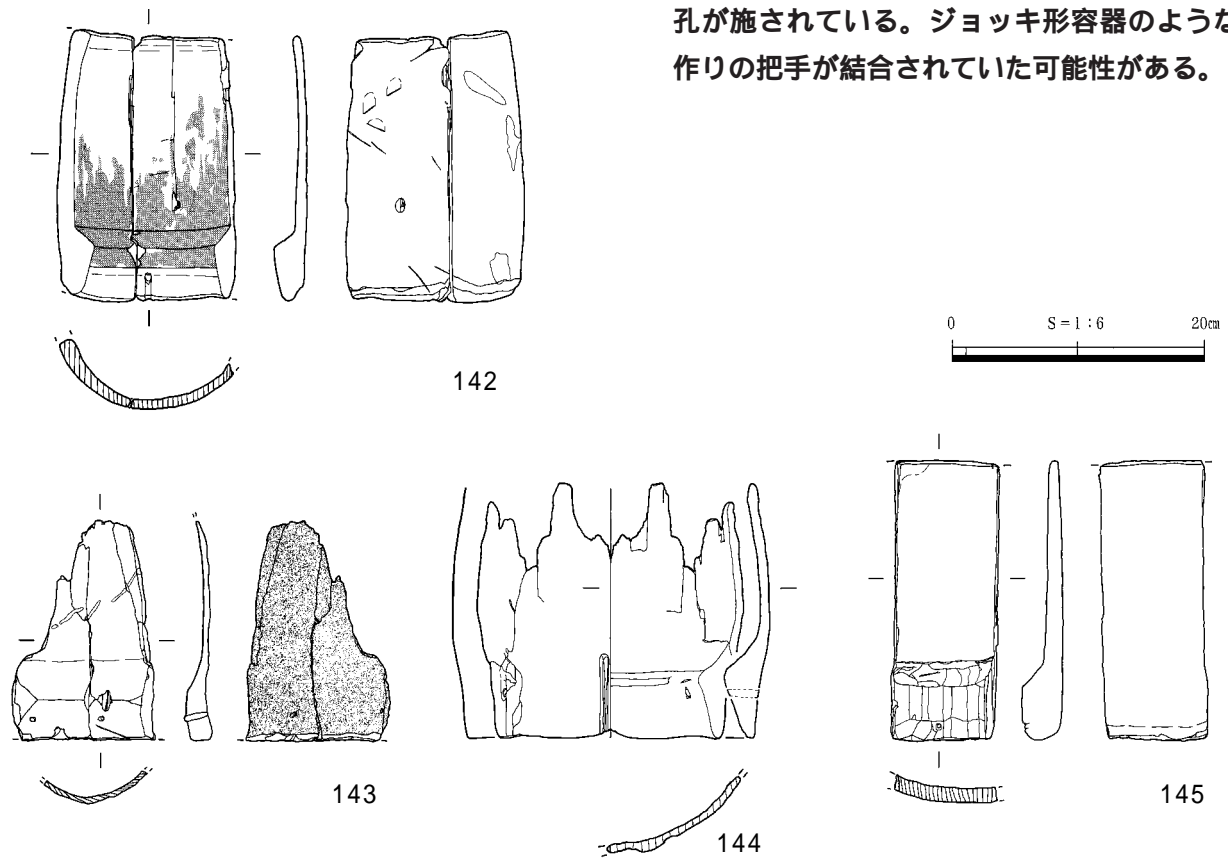
写真28 桶(9)

その他分類が難しい桶の破片資料を挙げた。桶の判断基準は、底板を留めるための特徴的な段を持つこと、あるいは弧となる横断面に目釘孔や底板の圧痕が認められるものである。破損の仕方によっては平面が小判形か円形か判別できるものもある。

縦断面が直線のもは、平面が小判形もしくは円筒形の桶である。器高16cm前後のもの(160、162、163)は底部に穿孔を持つことから、目釘で固定していたものと考えられる。器高20～30cm程度の中型のもの多くは平面が小判形の桶と考えられ、目釘孔を持つものが多い。

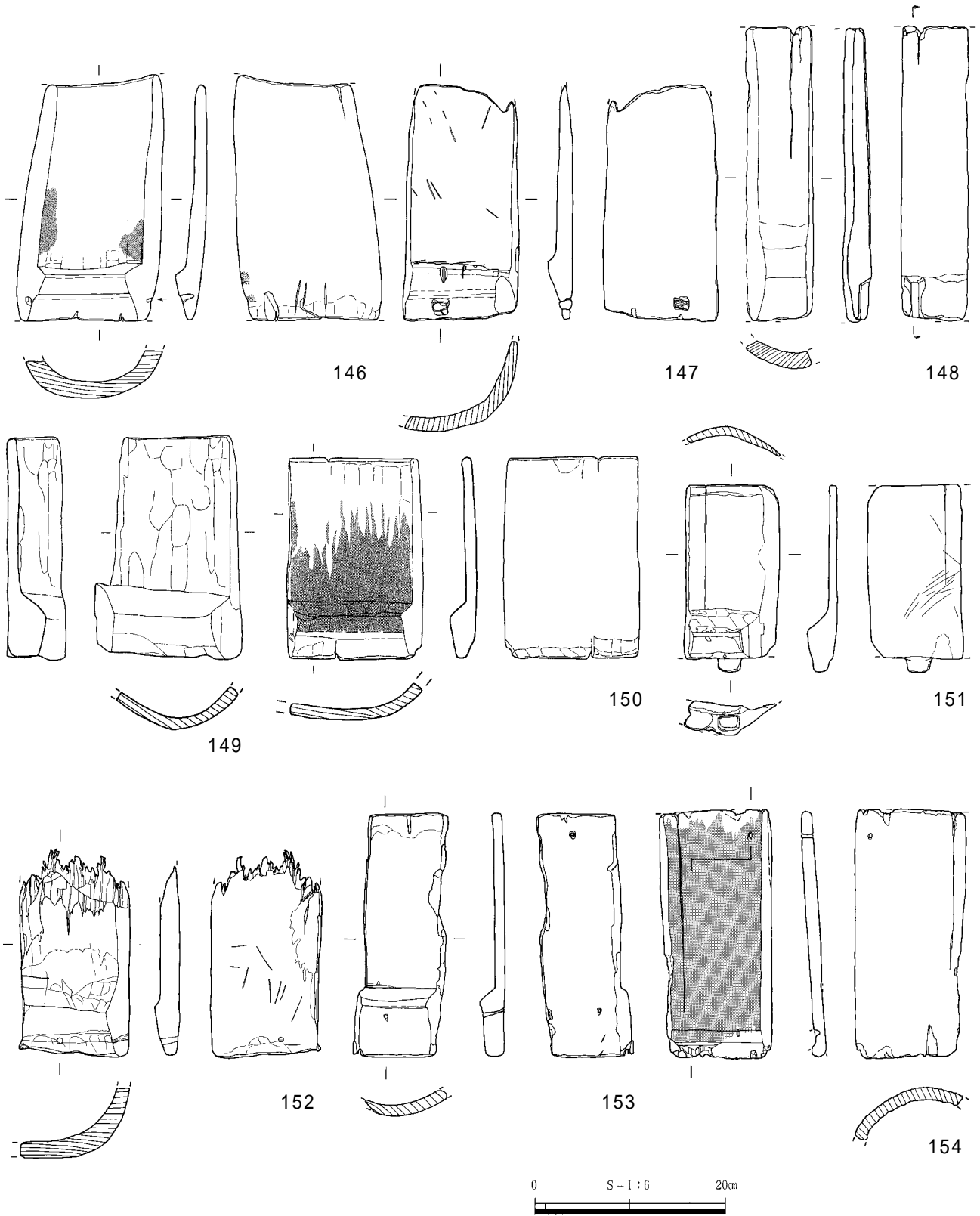
142、146、150、154、160、164は内面が黒彩されており、底板の位置できれいに途切れる。144、148、167は底部に縦長の切り込みもしくは溝が施されており、桶に見られる底部の装飾と同じ効果を出しているように思われる。

155は胴部外面に長方形に割り込みを入れ、穿孔が施されている。ジョッキ形容器のような別作りの把手が結合されていた可能性がある。



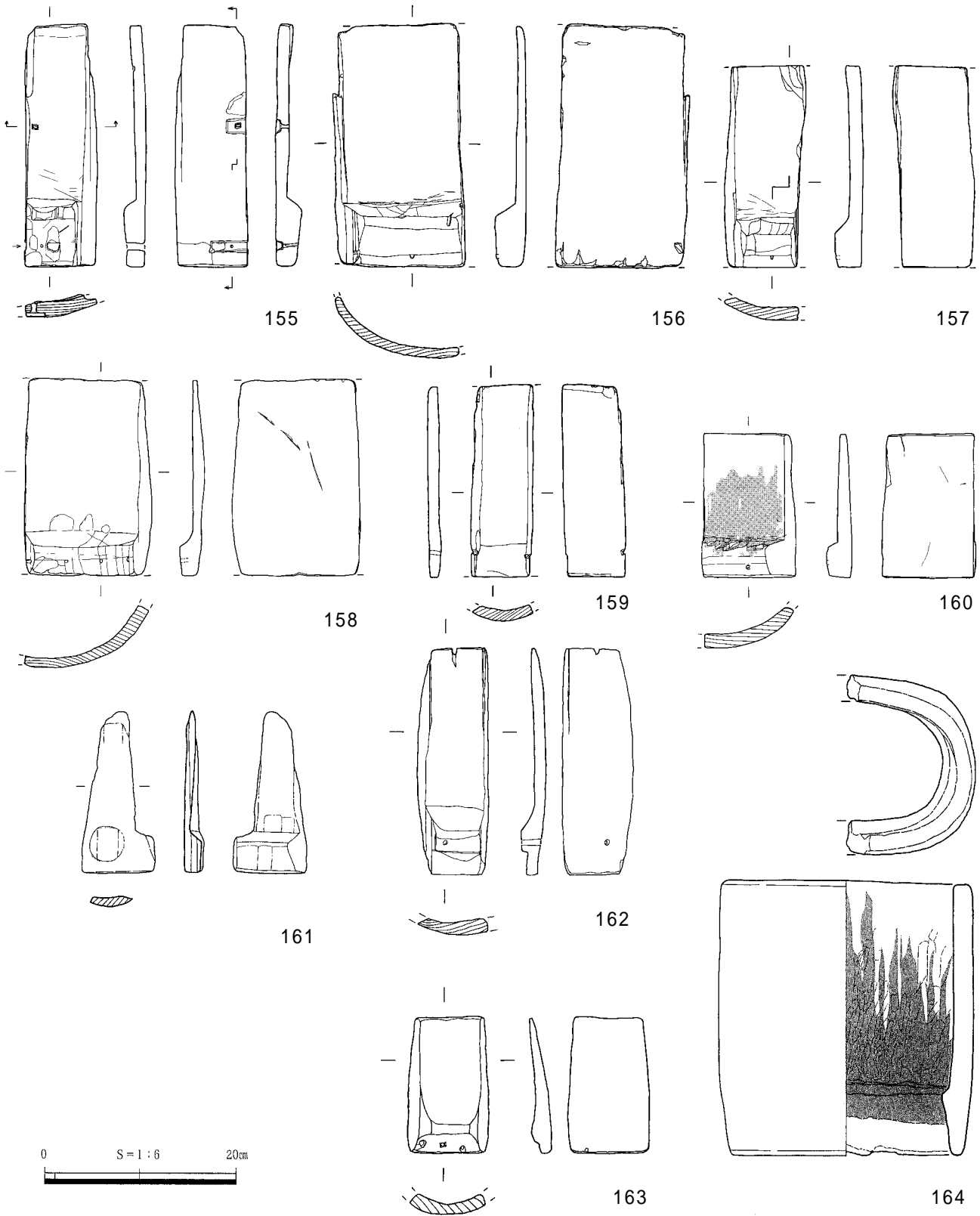
第37図 桶(11)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
142	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高21.5,幅(16.9)	縦木取り	スギ	内面黒彩	4035
143	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高 17.6,幅 11.3,厚1.8	縦木取り		外面炭化	4037
144	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高 20.4,幅(22.8)	縦木取り			3168
145	桶	県道4区	層	弥生～奈良	高22.6,幅 8.4,厚3.2	縦木取り			695



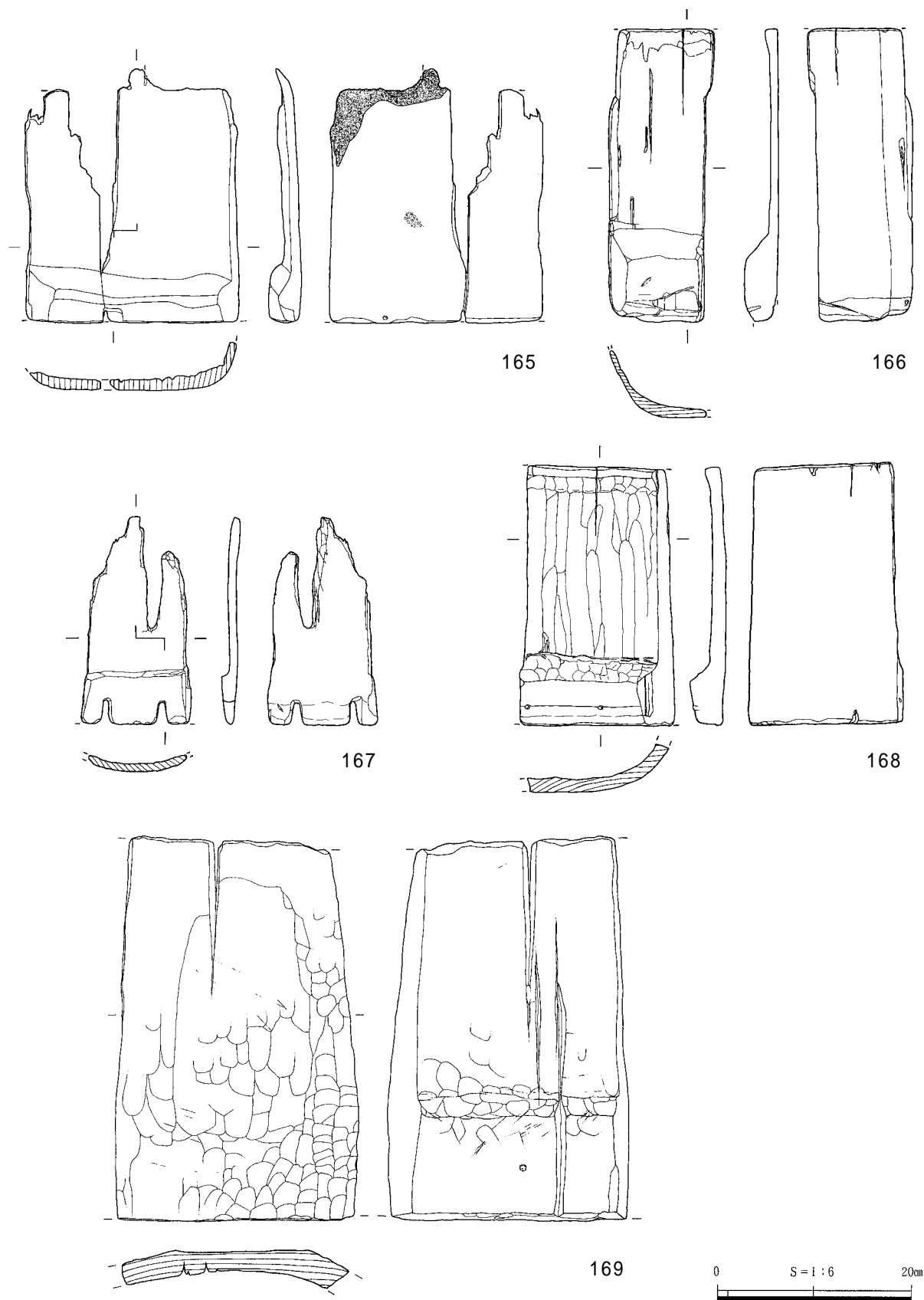
第38図 桶(12)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
146	桶	国道4区	SD38-A層	弥生中期～奈良	高26.3,幅15.0,厚1.8	縦木取り		内面黒彩	15122
147	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高 25.2	縦木取り	スギ		30313
148	桶	国道1区	木器溜	弥生後期	高31.3,幅 7.1,厚2.5	縦木取り			5310
149	桶	県道4区	SA4～6	弥生後期	高23.9,厚1.2	縦木取り	スギ	:309図371 内面黒彩	3688
150	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高21.4,厚1.1	縦木取り	スギ	:309図370	4054
151	桶	県道8区	不明	不明	高20.0,幅(20.6)	縦木取り			26471-2
152	桶	排土中	不明	不明	高 22.2,幅 11.7	縦木取り			50068
153	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高 25.9,幅 16.5	縦木取り			30199-2
154	桶	県道7区	J層	弥生中期	高 26.0,幅 11.8	縦木取り		内面黒彩	42402



第39図 桶(13)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
155	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高25.9,幅7.7,厚2.3	縦木取り			30199-1
156	桶	県道4区	SA4~6	弥生後期	高25.7,幅 13.6,厚3.2	縦木取り			3533
157	桶	県道3区	SD20	弥生後期	高21.4,幅(8.0),厚2.9	縦木取り			20854
158	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高20.9,幅 13.6,厚2.3	縦木取り	スギ		2930
159	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高20.5,幅 6.5,厚1.2	縦木取り			6117
160	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高15.5,幅(19.9)	縦木取り		内面黒彩	28488
161	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高 17.2,厚0.9	縦木取り		:309図374	4290
162	桶	県道8区	D層	弥生中期	高15.9,幅(11.8)	縦木取り			34287
163	桶	国道4区	SD38-3	弥生後期~古墳前期	高 9.6,幅(10.0)	縦木取り			15749-3
164	桶	県道8区	SD69	弥生後期~古墳前期	高29.2,幅(27.2),厚2.1	縦木取り	スギ	:309図372 内面黒彩	27563



第40図 桶(14)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
165	桶	県道8区	SD38	弥生後期	高 26.8,幅 22.4	縦木取り		一部炭化	30142
166	桶	国道4区	SD38-3	弥生後期～古墳前期	高 30.6,幅 10.1	縦木取り			15749
167	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高 22.7,幅 11.2,厚1.8	縦木取り			5979
168	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高27.3,幅 16.3	縦木取り	スギ		2978
169	桶	県道4区	SD11	弥生後期	高38.9,厚2.0	縦木取り		:390図373	3493

(5) 割物桶 底板：170～187



写真29 底板

円形および楕円形（小判形）の板は、およそ割物桶の底板と考えられる。側面に目釘が打ち込まれているものや、片面が黒彩されているものがある。断面の形状は台形となり、桶底部の形状と合うように加工されている。木取りは追衤目材が多く、板目材や本衤目材は少ない。大きさには若干ばらつきがあるが、楕円形・円形でそれぞれサイズごとに区分できる可能性がある。

170は円形の底板である。周囲には9ヶ所の目釘が打ち込まれている。

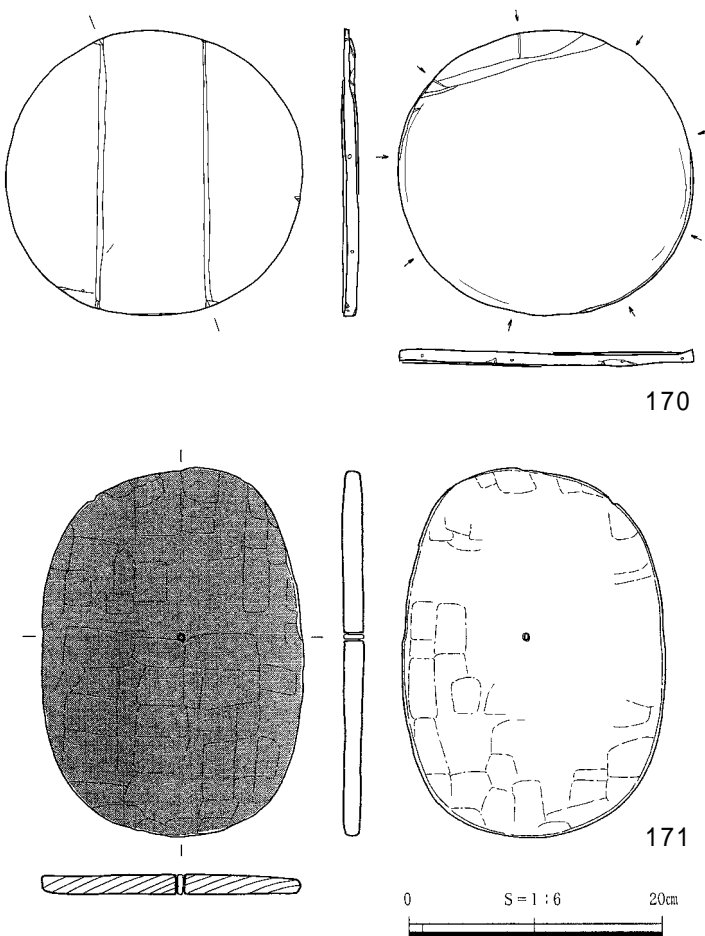
171は楕円形の底板である。周囲に目釘の痕跡は見られず、中央に目釘と思われるものが打ち込まれている。片面が黒彩されている。

172～174、179、187は側面に目釘が打ち込まれているものである。

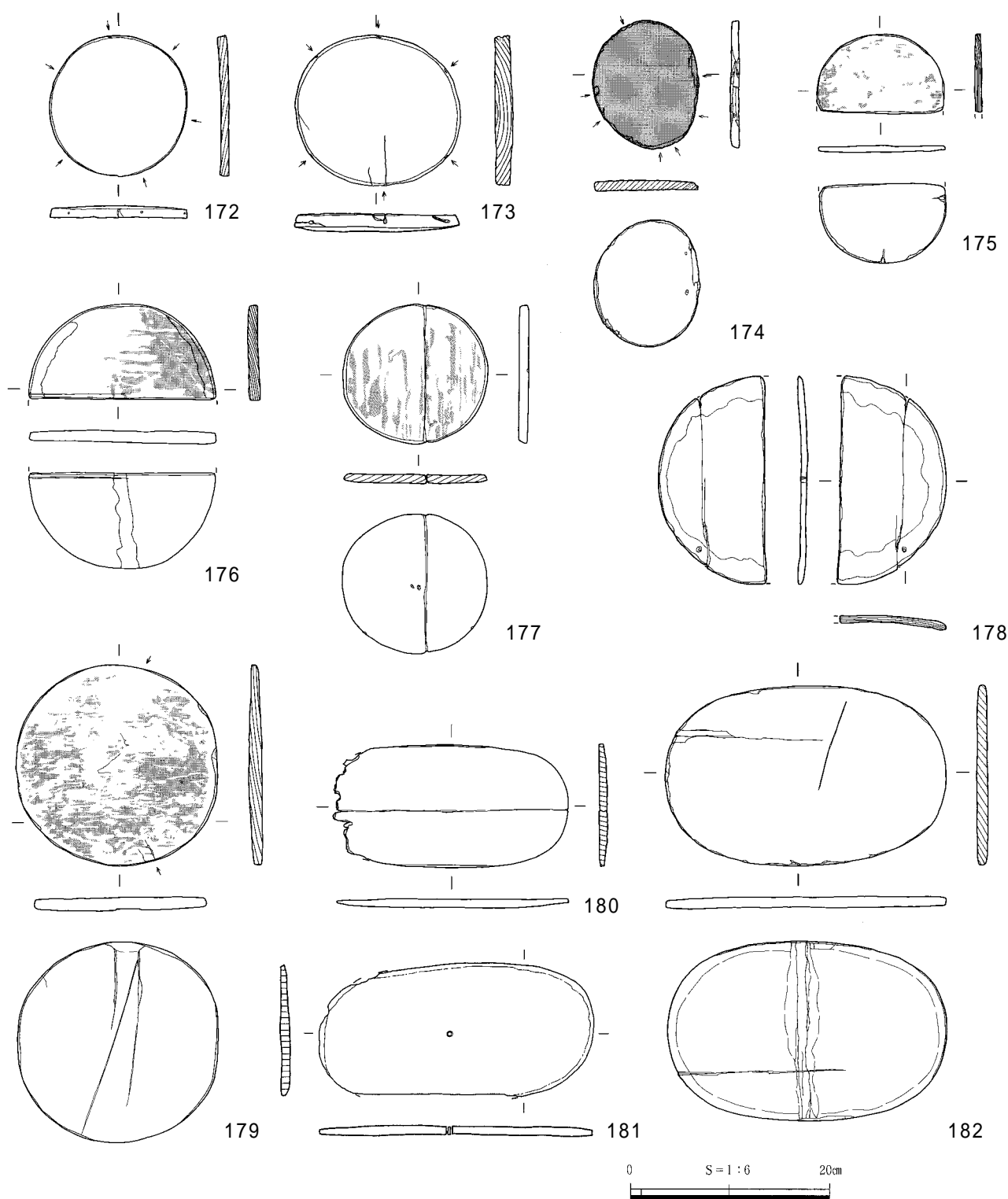
175～178、186は側面に目釘の痕跡がないものである。片面に黒彩のあるものもある。175は黒彩されていない面に2ヶ所傷が残っている。これは底板を桶の下から入れ、目釘を桶の内側から打ち込んで底板を支えていた痕跡と考えられる。また176では黒彩されていない面に中心を通る圧痕が見られるが、これは支木によって底板を留める桶に使われていたと思われる。

180～182、185は小判形の底板であり、182には支木の痕跡が認められる。181は中央に目釘が打ち込まれており、171と同じである。支木と底板を固定させるために目釘を打ち込んだ可能性がある。

183、184は大型の底板である。いずれもほぼ中央に目釘もしくは穿孔があり、大型桶の底板の留め方が支木によるものが多いことから、支木と底板を目釘で固定していた可能性がある。

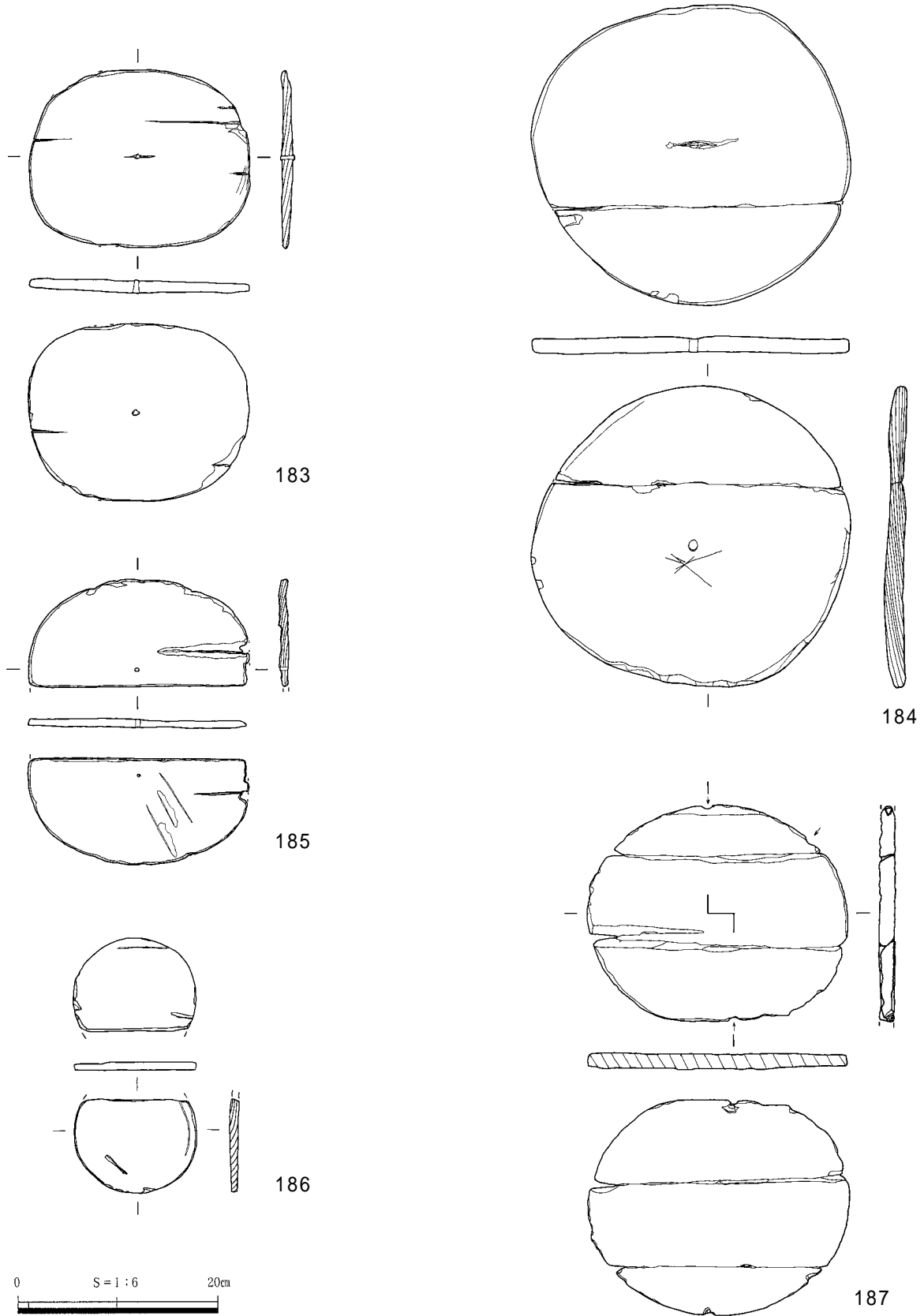


第41図 底板(1)



第42図 底板(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
170	底板	県道7区	J層	弥生中期	幅23.0~23.7,厚1.1	柱目	スギ		36636
171	底板	国道2区	J層	弥生中期~古墳前期	長径29.9,短径21.6	柱目	スギ	:149図118 片面黒彩	6090
172	底板	県道7区	不明	不明	幅14.0,厚0.9	板目	スギ		35839
173	底板	県道7区	J層	弥生中期	幅16.9,厚1.9	板目	スギ		36818
174	底板	国道3区	I層相当	弥生中期	幅12.3×13.1,厚1.0	柱目		片面黒彩	14561
175	底板	県道7区	SD62	弥生後期	幅12.9,厚0.9	板目	スギ	片面黒彩	37420
176	底板	県道7区	H層	弥生後期	幅19.1,厚1.1	板目	スギ	片面黒彩	36282
177	底板	県道8区	A層	弥生後期	幅14.7,厚1.0	柱目	スギ	片面黒彩	27131
178	底板	国道3区	SD28	弥生中期	高1.0,幅(21.4),厚1.0	板目	スギ		13279
179	底板	国道4区	SD38	弥生後期~古墳前期	幅20.5,厚1.5	板目	スギ	片面黒彩	17775
180	底板	県道8区	SD69	弥生後期~古墳前期	幅24.0,厚1.0	柱目	スギ		27632
181	底板	県道3区	SD20	弥生後期	幅27.9,厚0.9	柱目		:311図386	21335
182	底板	国道1区	SD11	弥生後期	幅28.7,厚1.1	柱目			5692



第43図 底板(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
183	底板	県道8区	A層	弥生後期	幅22.5,厚1.2	板目	スギ		28764
184	底板	国道4区	SD38-2	弥生後期	幅(30.7)	板目			17768
185	底板	県道5区	~層	弥生~奈良	幅 22.3,厚0.9	板目			8181
186	底板	国道4区	SD38	弥生後期~古墳前期	幅12.4,厚1.0	板目	スギ		19033
187	底板	県道7区	~H層	弥生中期~奈良	幅(26.3),(22.0),厚1.6	柱目	スギ		38976

(5) 桶 把手：188～194



写真30 把手

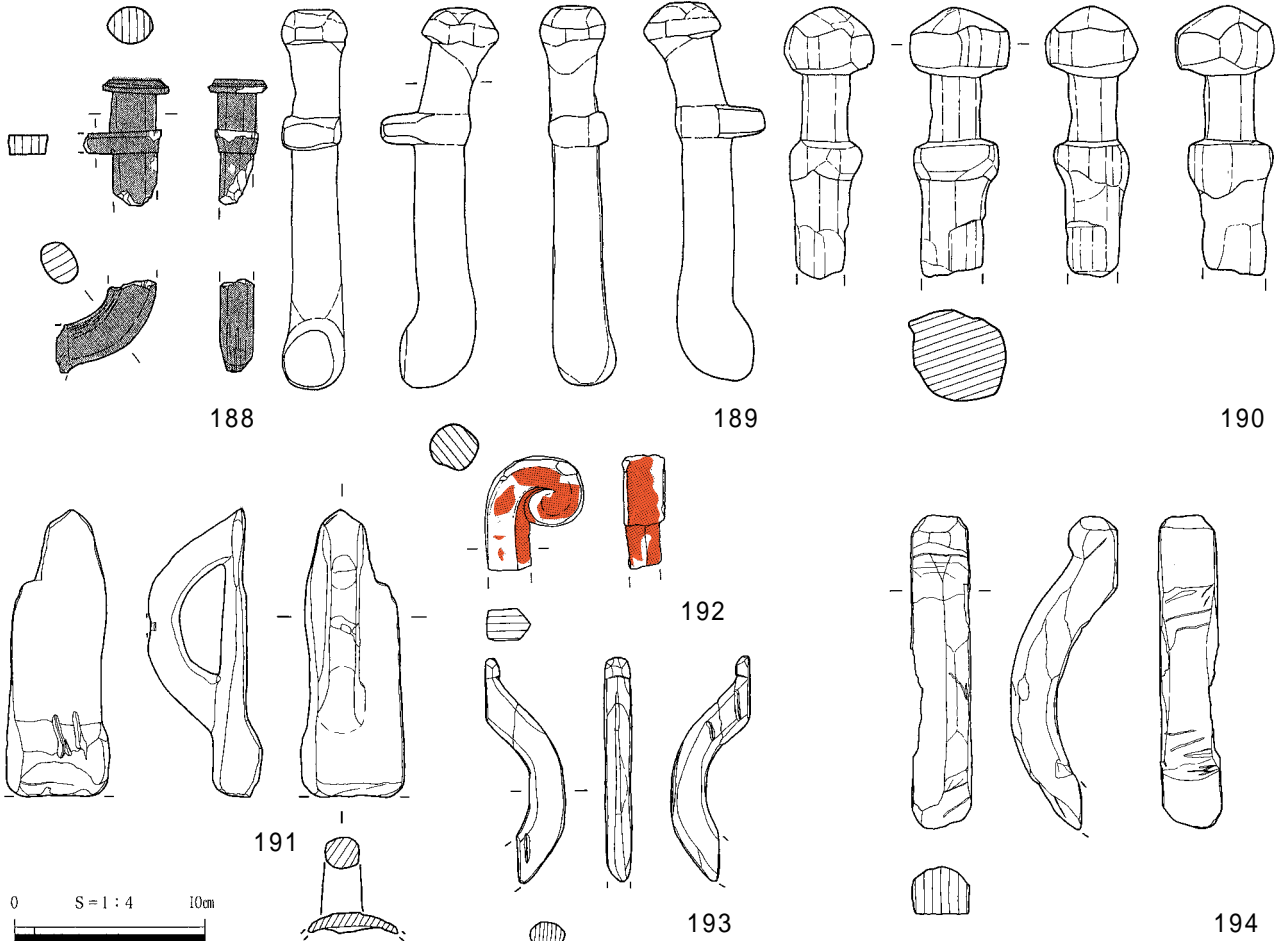
桶の把手と思われる資料群である。

191はアーチ状の把手が桶の側面に付くものである。一木を割りぬいて作られている。縦木取り、スギ製である。

188～190はヒの字状の把手で、頂部が笠状にやや肥厚する。いずれも縦木取りで、一木式のものと思われる。189、190はスギ製のため桶の把手と思われるが、188の樹種はヤナギ属で、しかも黒彩されていることから、桶状の容器もしくは第21図85に類似した器形とも考えられる。

192は把手の先端部と考えた。全体に赤彩されており、精製品の一部と思われる。縦木取り。

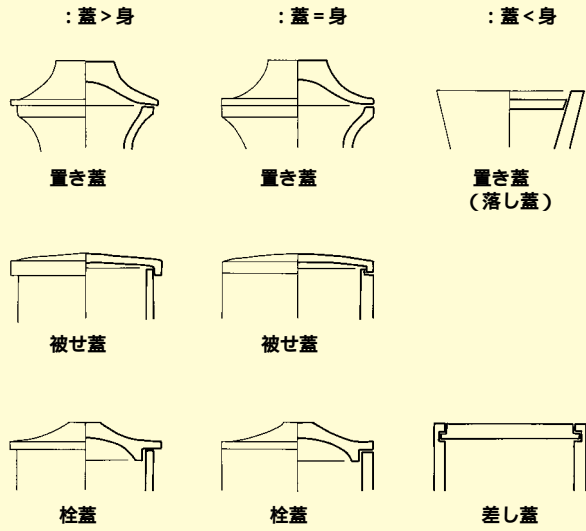
193、194はアーチ形のもので、先端が肥厚して紐で固定するものと思われる。蓋もしくは盾にくくりつけられる把手とも考えられる。



第44図 把手・その他

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
188	把手	国道4区	SD38	弥生後期～古墳前期		縦木取り	ヤナギ属	:145図95 黒彩	17901
189	把手	国道4区	SD11	弥生後期	高(20.1)握り部長8.9,径2.6	縦木取り	スギ	:302図346	3035
190	把手	国道4区	SA4～6	弥生後期	高(14.3)握り部径3.4	縦木取り	スギ	:302図345	2275
191	把手	国道4区	SD38-3	弥生後期～古墳前期	高 15.1,幅(21.0)	縦木取り	スギ		15716
192	把手	国道3区	SD20	弥生後期	高(6.1),把手径2.3×1.6	縦木取り	ケヤキ	:302図343 赤彩	20816
193	把手	国道4区	不明	不明	長11.8,幅2.4,厚1.2	縦木取り			17824
194	把手	国道4区	SD38-2	弥生後期	高16.5,幅3.2,厚2.5	縦木取り	スギ		17497

蓋はその被せ方によって、置き蓋・被せ蓋などに分けられる〔奈良1993〕身との組合せ及び径の違いから以下のように分けられる。(『木器集成』fig.146の一部を改変して再トレースした)



(6) 蓋 : 195~212

裾両端に紐孔突起が付く蓋である。ほとんどがスギ製で、一部にサワラ、ヤマグワなどが使用されている。すべて横木取りである。紐孔突起は木口方向に作られ、平面半円形のものや断面が逆台形の平面円形となるものがある。蓋頂部はゆるやかに盛り上がり、裾端部は置き蓋状、被せ蓋状、栓蓋状などがある。

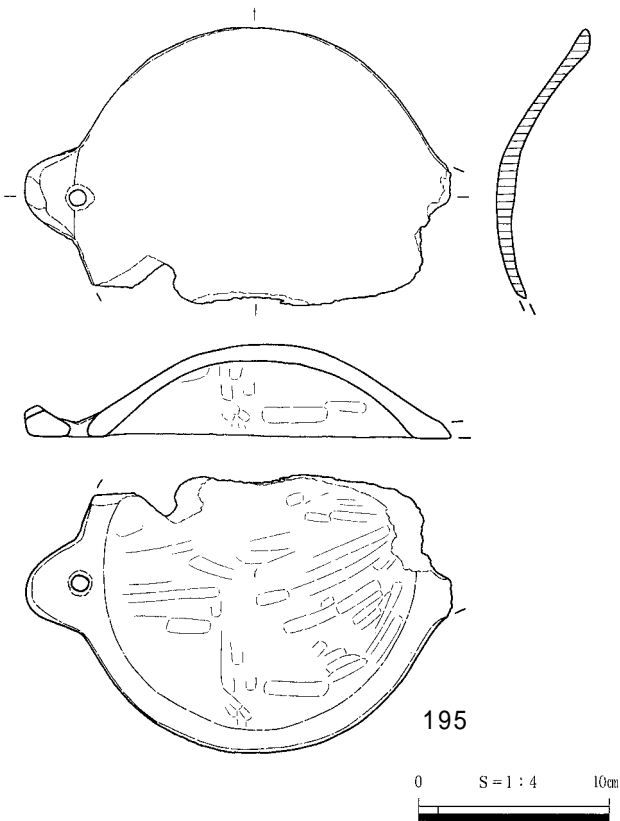
195~199、210は、裾部内側に面を持ち、その後屈曲してゆるやかなカーブを描く。身の大きさによるが、置き蓋 または と考えられる。

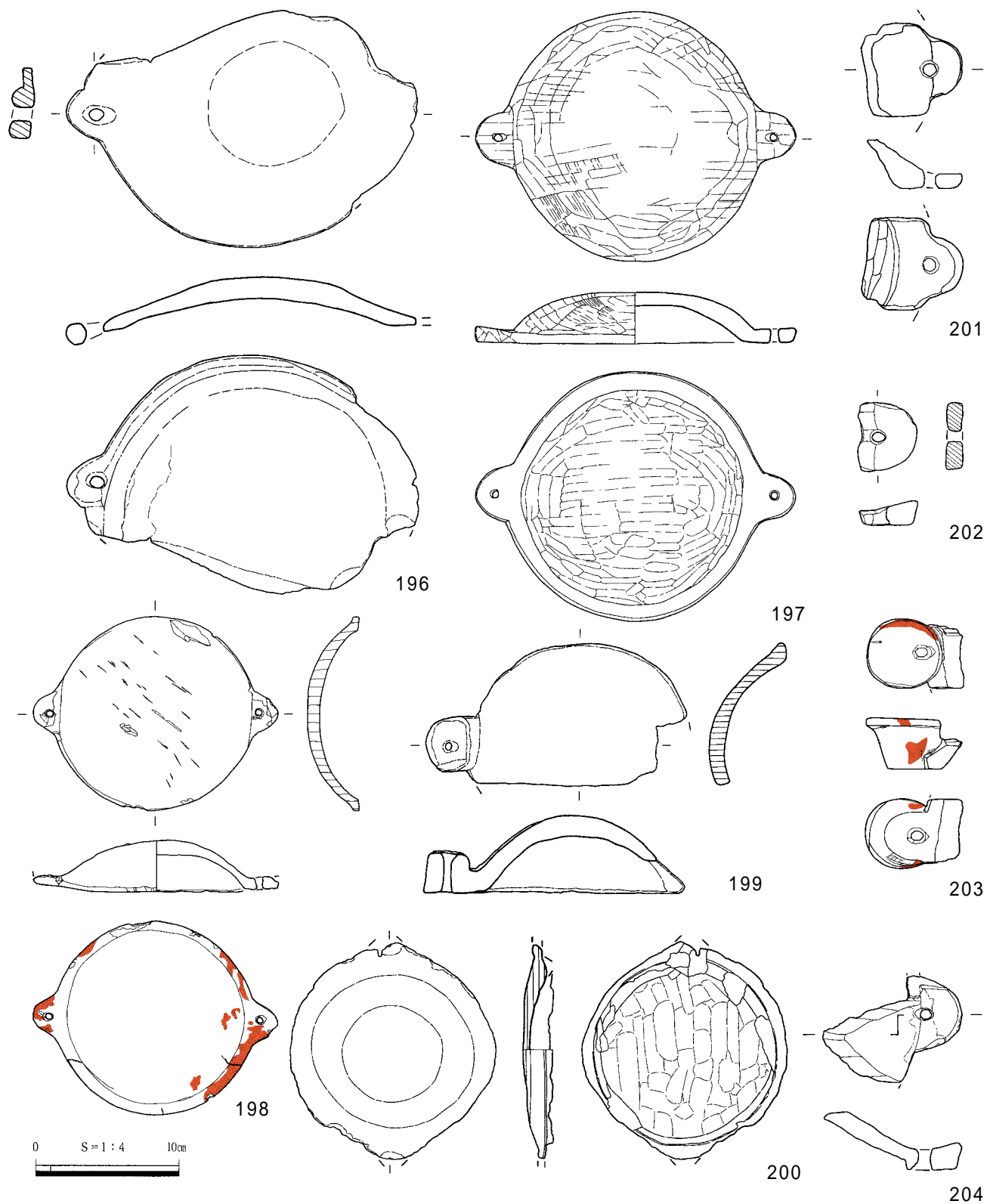
200は裾部内側で突帯を設け、栓蓋の構造をしている。紐孔突起は2ヶ所あったと思われるが、欠損している。外面に2重の円形ケビキ痕が見られ、コンパス状工具の使用が想定される。

201~204は突起部分のみの資料である。203は断面が逆台形となって赤彩されており、精製品と思われる。

205~209、211は、裾部内側に段を持つもので、被せ蓋の構造をしている。206、207は外面が赤彩されており、211は内外面とも赤彩が見られる。207、208は外面に円形のケビキ痕が見られ、特に207は中央に穿孔があり、コンパス状工具の使用が想定される。

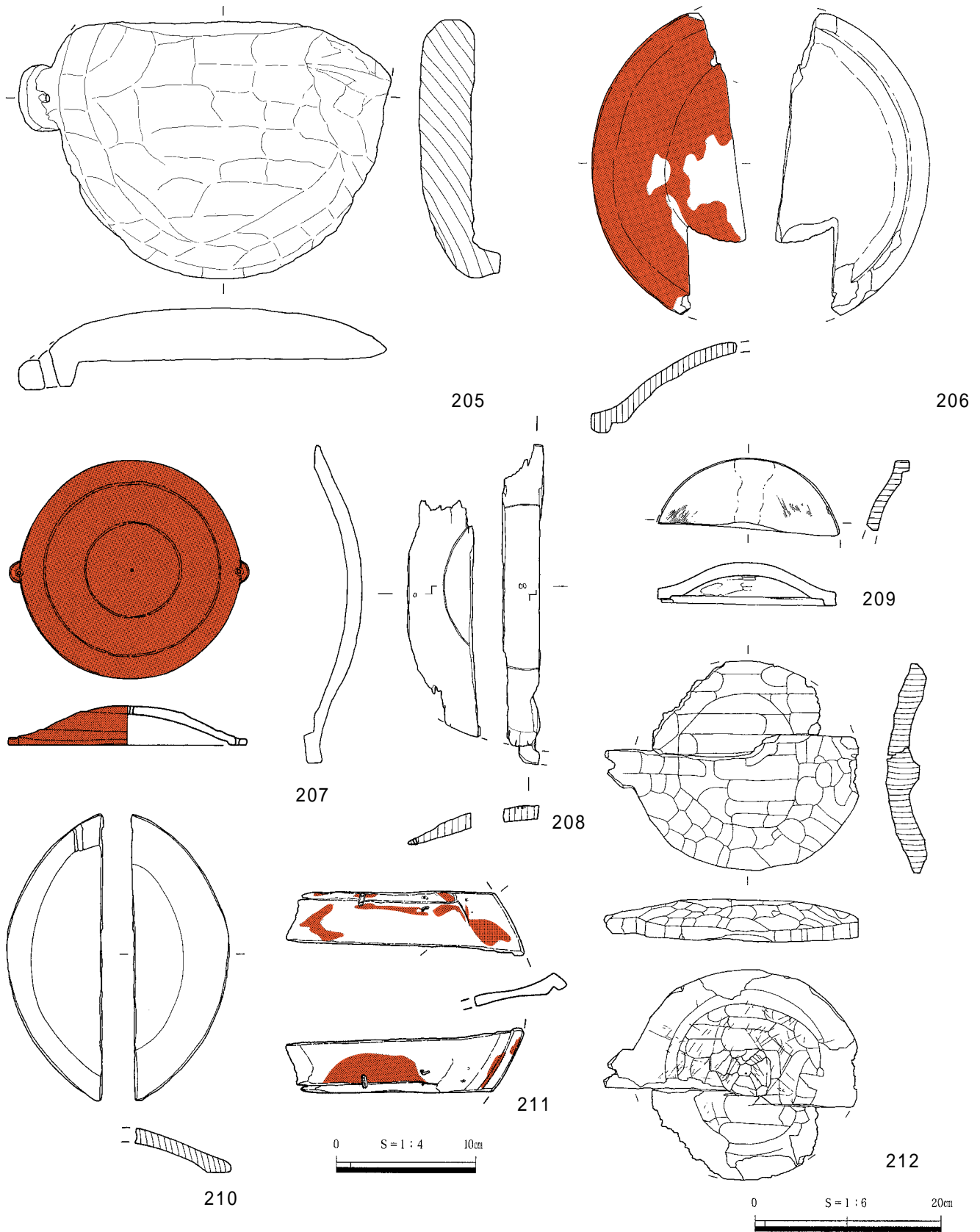
212は蓋の未製品である。粗削りの段階と思われる。内面外周は面を形成するように仕上げているが、内面中央はやや削り残され、突起状となっている。製作手順の検討材料となる資料である。





第47図 蓋(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
195	蓋	県道8区	SD69	弥生後期～古墳前期	高5.0,幅 22.7	横木取り	スギ	:300図326	27630
196	蓋	県道4区	SD11	弥生後期	高4.3,幅 24.5	横木取り	スギ	:299図324	6056
197	蓋	県道4区	SD11	弥生後期	高3.6,幅17.5,厚1.3	横木取り	スギ	:299図323	3860
198	蓋	国道4区	SA24	弥生後期～古墳前期	高3.6,幅 14,厚1.0	横木取り	ヤマグワ	赤彩	16558
199	蓋	県道8区	SD38	弥生後期	高 5.4,幅(18.2)×(10.0),厚1.0	横木取り	スギ	:299図325	30400
200	蓋	県道5区	SK143	弥生中期	高2.1,幅 15.3,厚0.5	横木取り	スギ	:300図329	9098
201	蓋	国道4区	不明	不明	高 3.4,幅 7.0,厚2.3	横木取り	スギ	突起のみ	18169
202	蓋	県道4区	木器溜	弥生後期～古墳前期	高 4.7,幅 4.1	横木取り	スギ	突起のみ	2765-1
203	蓋	国道5区	c	弥生後期～古墳前期	高 3.5,幅 5.3	横木取り	スギ	突起のみ 一部赤彩	9006
204	蓋	県道4区	SD11	弥生後期	高 3.9,幅(23.0),厚1.6	横木取り	サワラ	突起のみ	3869



第48図 蓋(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
205	蓋	県道7区	SD66	弥生後期	高5.8,幅(21.2),厚3.9	横木取り			40418
206	蓋	県道5区	SK51	弥生中期	高 6.4,幅 21.7	横木取り	スギ	:299図321 赤彩	15277
207	蓋	県道8区	SD54	弥生後期	高2.9,幅15.7	横木取り	ヤマグワ	:299図319 赤彩	34699
208	蓋	県道8区	不明	不明	長 23.1,厚1.2	横木取り	スギ	赤彩	26393
209	蓋	国道1区	木器溜	弥生後期	高 4.5,幅 19.4,(20.5),厚1.3	横木取り	スギ	:148図112	5790
210	蓋	県道3区	SD20	弥生後期	高 3.6,幅 7.0,厚1.1	横木取り		:299図320	20925
211	蓋	県道8区	SD54	弥生後期	厚0.5	横木取り	スギ	:299図322 赤彩	34647
212	蓋	国道2区	層	弥生中期~古墳前期	高 4.5,幅 27.2	横木取り	ヤマグワ	:148図113 未製品	6241

(6) 蓋 : 213~220

蓋の分類としては置き蓋の部類に入る。器形は尖底を成す椀・杯形容器とよく似ており、頂部が突き出るような形となっている。内面の調整が雑になっていることも蓋とする理由の一つである。裾部が垂直に立つものと水平方向に広がるものの2つに分けることができる。

213、214は裾部が垂直に立つもので、内部が広く作られている。どちらもヤマグワ製で、横木取りである。

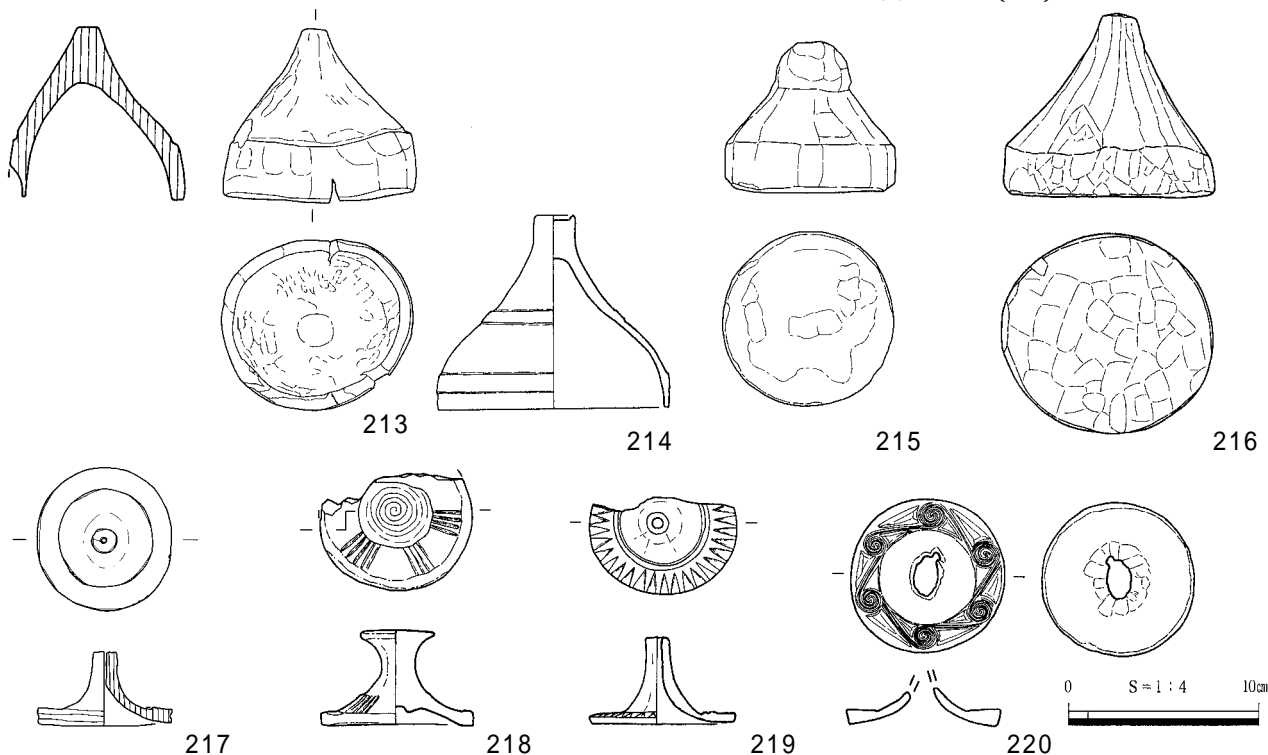
217~220は裾部が水平方向に広がるもので、装飾が施される。いずれも横木取りで、ヤマグワ製である。218は胴部下半に4条の沈線を3ヶ所施し、頂部は扁平でやや大きくなって渦文を施している。217は裾部側面に2条の沈線を、219は裾部に鋸歯文を施し、どちらも頂部は穿孔されている。鋸歯文は弥生時代中~後期の在地の土器には一般的ではなく、意匠としては外来(山

陰西部、山陽など)の要素が強い。220は頂部が欠損しているが、裾部に連続渦文が施され、同様の形態をしていたと考えられる。

215、216は未製品である。器形から蓋としたが、縦木取りのため椀・杯形容器とも考えられる。



写真32 蓋(2)



第49図 蓋(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
213	蓋	県道7区	J層	弥生中期	高9.2,幅1.0×9.0,厚0.8	縦木取り	ヤマグワ	:301図335	36637
214	蓋	県道7区	SD27	弥生中期	高10.3,幅12.3	縦木取り	ヤマグワ	:301図334	42254
215	蓋	県道7区	S26	弥生中期	高 8.0,幅9.2	縦木取り	ヤマグワ	:301図337 未製品	38012
216	蓋	県道7区	J層	弥生中期	高9.7,幅11.2×10.6	縦木取り	ヤマグワ	:301図336 未製品	36602
217	蓋	国道3区	I層上面	弥生中期~古墳前期	高4.0,幅7.6	縦木取り	ヤマグワ		14434
218	蓋	県道8区	SD54	弥生後期	高5.1,幅8.0	横木取り	ヤマグワ	:301図331 文様あり	34587
219	蓋	県道7区	J層	弥生中期	高4.7,幅7.8,厚0.5	横木取り	ヤマグワ	:301図332 文様あり	37898
220	蓋	県道7区	SD27	弥生中期	高 1.9,幅8.1	横木取り	ヤマグワ	:301図333 文様あり	42287

(6) 蓋 : 221~226



写真33 蓋(3)

主に桶形容器とセットになると考えられる蓋である。桶形容器と同じく平面形は舟形をしており、中央部はやや盛り上がる。中央部は稜線のみのもので、扁平な頂部を作り出すものの2種類存在する。長軸の両端には身と紐で綴じるための穿孔が施される。

221~224は裾部内側に外周より一回り小さい突帯を作り、容器口縁部の内側にはまる栓蓋の構造となっている。

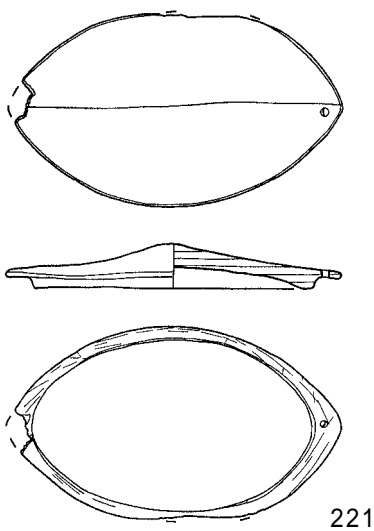
221、222は長軸方向に稜線が入り、222は中央付近に2箇所穿孔がほどこされている。

223は頂部を扁平にし、第24図104と同様の形態となっている。

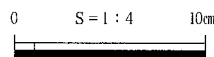
平面形が舟形ではないが、頂部を扁平にし、穿孔を持つものも合わせてここに掲げた。

225の平面形はほぼ円形であるが、穿孔のある裾端部を舟形状にやや外に尖らせる。内面には容器口縁内側にはまる段を形成し、栓蓋となる。224も平面が円形の栓蓋であり、2孔1組の穿孔が裾内部の突帯外側に2ヶ所施される。

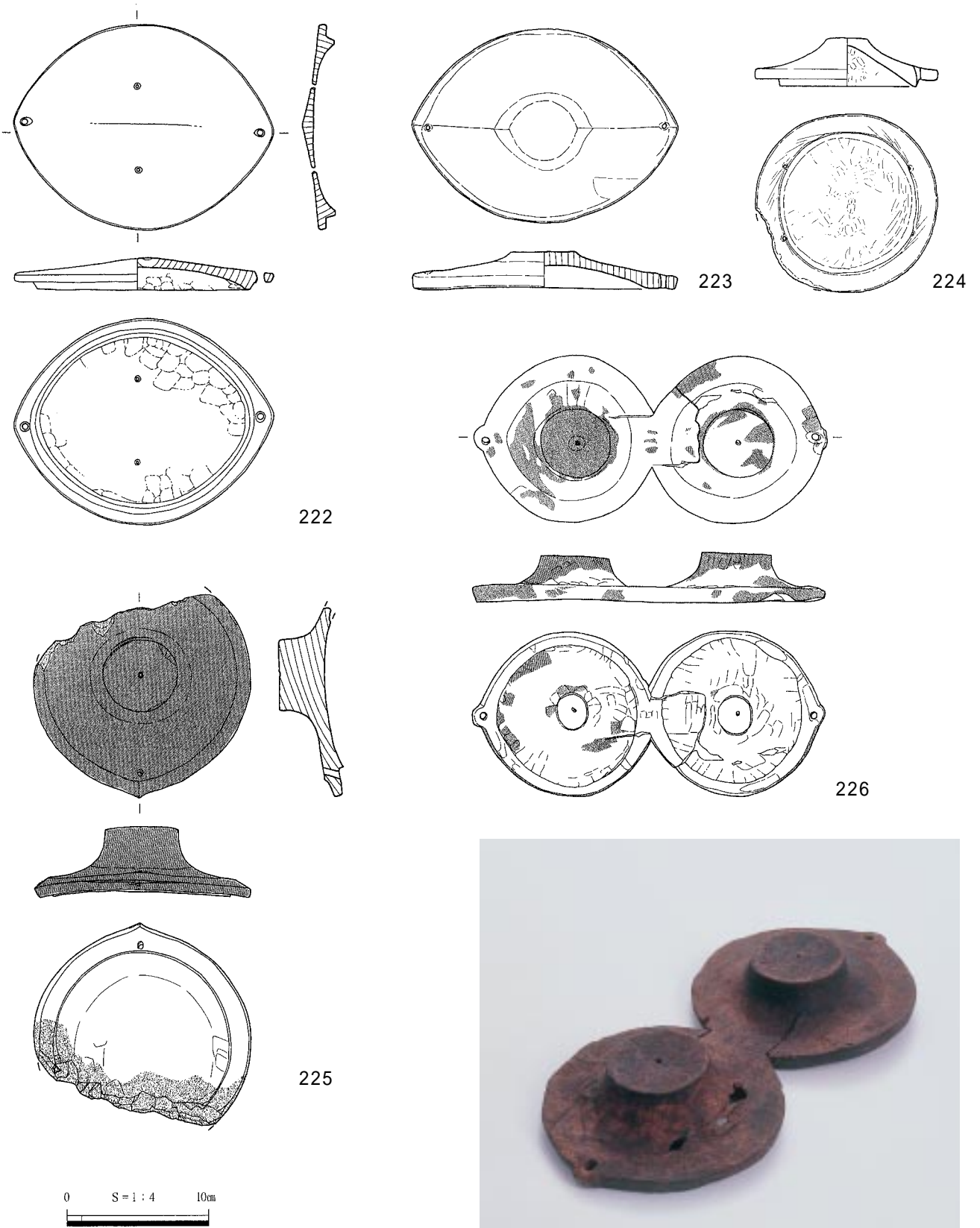
226は二連蓋とでもいうべき、同形の蓋2つが結合した状態の蓋である。長辺両端にはそれぞれ紐孔突起を作り、蓋と蓋の結合部には突起を作る余地がないことから、未製品ではなく完結した製品と考えられる。全体に黒彩されている。それぞれの頂部は扁平で、中心は穿孔されている。今のところ、この蓋に対応する容器は出土していない。



221



第50図 蓋(5)



第51図 蓋(6)

写真34 蓋(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
221	蓋	国道2区	1層	弥生前期～中期	長径16.6,短径10.2	横木取り	ヤマグワ	:145図88	6661
222	蓋	国道2区	層	弥生中期～古墳前期	高2.3,幅18.3,厚2.3	横木取り	ヤマグワ	:145図87	6284
223	蓋	県道7区	I層	弥生中期	高2.7,幅18.7	横木取り	ヤマグワ	:287図265	40818
224	蓋	県道7区	J層	弥生中期	高3.4,幅12.9	横木取り	ヤマグワ	:287図266	42417
225	蓋	国道3区	SD25	弥生中期	高 5.0,幅15.3,厚3.4	横木取り	ヤマグワ	:146図97 黒彩 一部炭化	13719
226	蓋	国道3区	不明	不明	高3.6,幅 11.0	横木取り	ケヤキ	:146図96 黒彩	12737

(6) 蓋 : 227~237

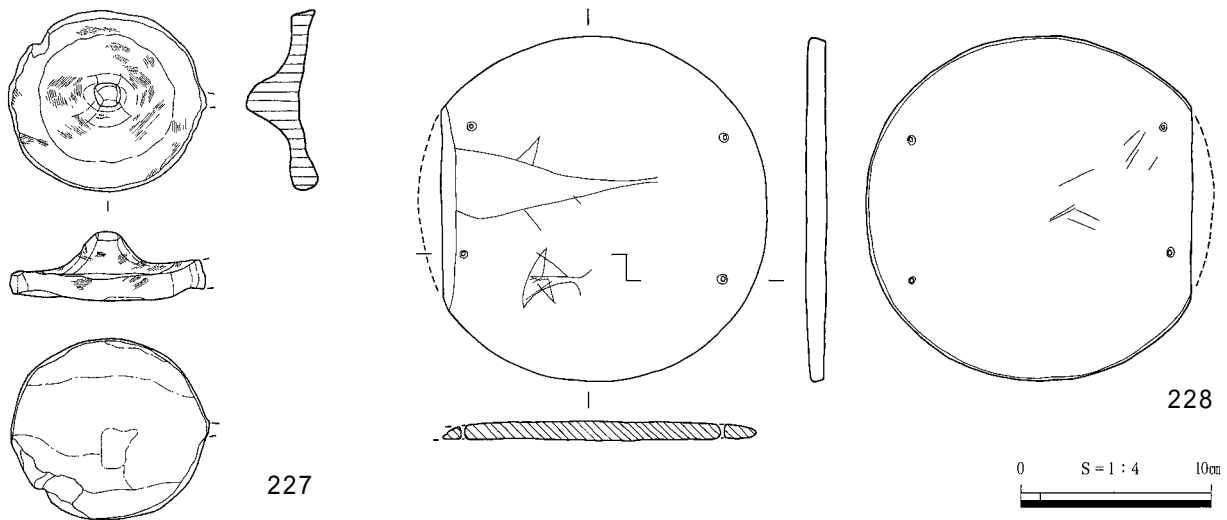


写真35 蓋(5)

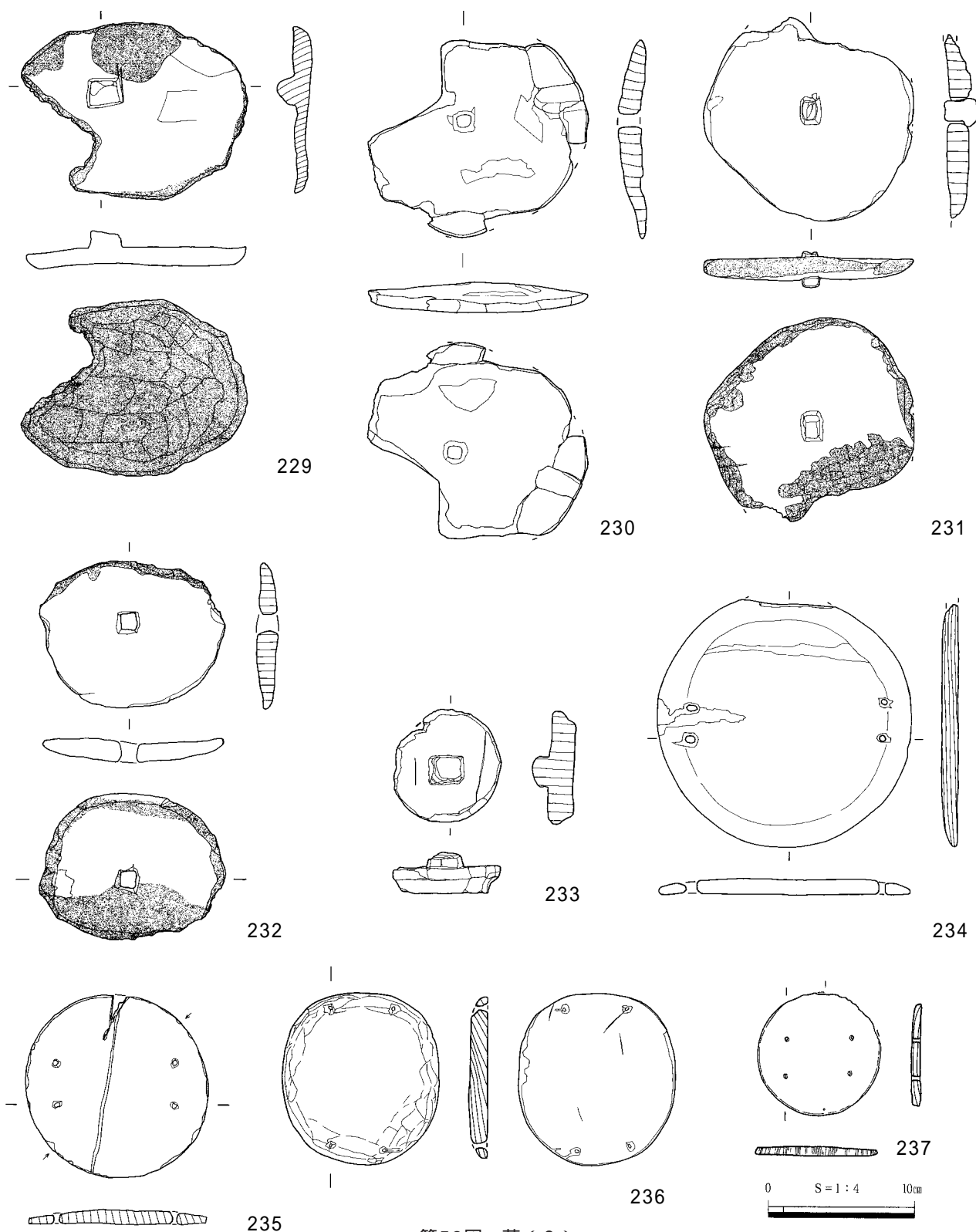
円板状のもので、中央に鈕を持つ、あるいは縁に2孔1組の孔を施すものである。

227、229~233は中央に鈕を持つものである。鈕は削出のものと、中央に穿孔して別作りの材を嵌め込むものがある。炭化したものが3点あり、煮沸用の土器蓋の可能性もある。

228、234~237は2孔1組の穿孔を両端に施すもので、紐を通してそのまま把手としたか、もしくは別作りの把手を括りつけて使用したものと思われる。228は片面に線刻を持つものである。小さいものはサメをモチーフにしたものと思われる。大きいものは魚のように見えるが、先端が欠損しており、詳細は不明である。



第52図 蓋(7)



第53図 蓋(8)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
227	蓋	国道2区	1層	弥生前期~中期	高 3.7,幅 10.4,厚0.9	横木取り		:146図98	6799
228	蓋	県道7区	J層	弥生中期	長18.1,幅17.1,厚1.1	横木取り	スギ	魚絵線刻	36664
229	蓋	国道2区	不明	不明	高2.2,幅 15.5	横木取り		炭化	7505
230	蓋	県道7区	SD27	弥生中期	高 2.1,幅 13.6,厚1.7	横木取り			43481
231	蓋	県道7区	木器溜3	弥生中期	高2.4,幅 14.3,厚1.6	横木取り	アカガシ亜属	炭化	39081
232	蓋	国道7区	I層	弥生中期	高 1.6,幅 12.5,厚1.5	横木取り	アカガシ亜属	炭化	42018
233	蓋	県道8区	SD38	弥生後期	高 2.8,幅 7.4	横木取り	スギ		33121
234	蓋	国道4区	b	弥生中期	高1.2,幅 16.6,厚1.2	横木取り	スギ		18453
235	蓋	県道7区	I層~	~ 弥生中期	幅12.8,厚1.1	横木取り	スギ		37713
236	蓋	県道7区	SD27	弥生中期	高1.3,幅10.9,厚1.4	横木取り			42193
237	蓋	国道2区	層	弥生中期~古墳前期	径13.1	板目	スギ	:149図120	6301

(6) 蓋 : 238 ~ 252



写真36 蓋(6)

238~242はヘルメット状に中央部が丸く、高く盛り上がるものである。240のみ紐孔突起が付いているが、それ以外にも突起が付いていた可能性は高い。壺とセットになる蓋(第25図107、第26図109)はいずれもこのように中央部が高く盛り上がり、赤彩されているものも多いため、これらが壺もしくは壺形の容器蓋である可能性は高い。裾部の形態から、238は置き蓋状、239、241は栓蓋状、240、242は被せ蓋状となっている。

243は裾部の形状から置き蓋と考えられる。頂部は扁平の鈕状をしており、胴部に穿孔が施されている。

244はやや舟形状となり両端に穿孔が施されている。頂部はやや盛り上がり、裾部はゆるやかに広がる置き蓋と思われる。

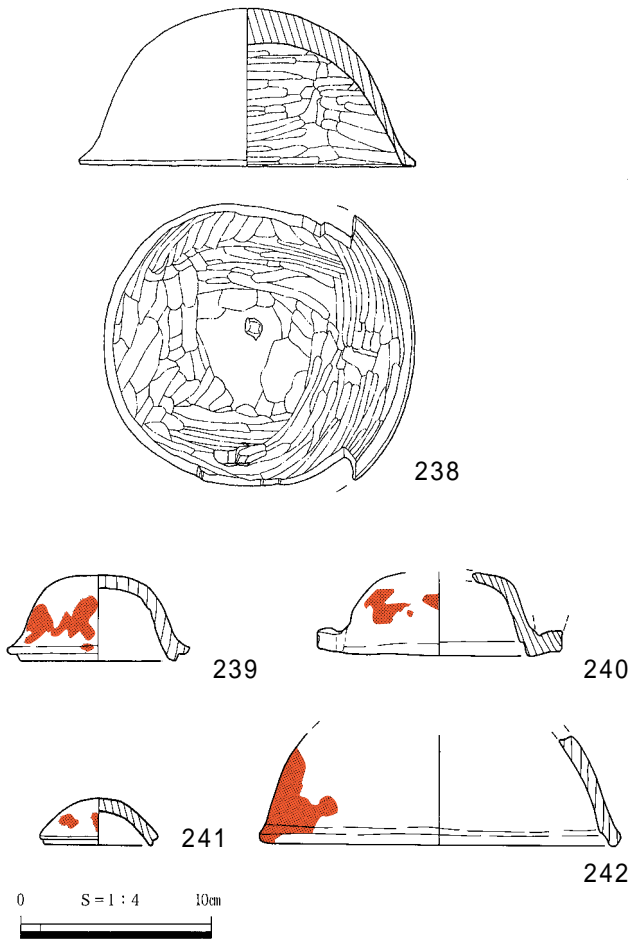
245は大型の栓蓋である。内側の段が発達し、相対的に裾が上に付いているように見える。上面と裾裏側に赤彩が施されている。大型で、把手となる部分が見られないことから、栓蓋のように裾を身の口径よりも大きくし、持ち手としていたのではないだろうか。トチノキ製で、心持材を使用しており、青谷上寺地遺跡では非常に珍しい例である。

246、251は小型の置き蓋で、全体はゆるやかにカーブを描いて膨らみ、頂部に1ないし2孔を施す。どちらも横木取りである。

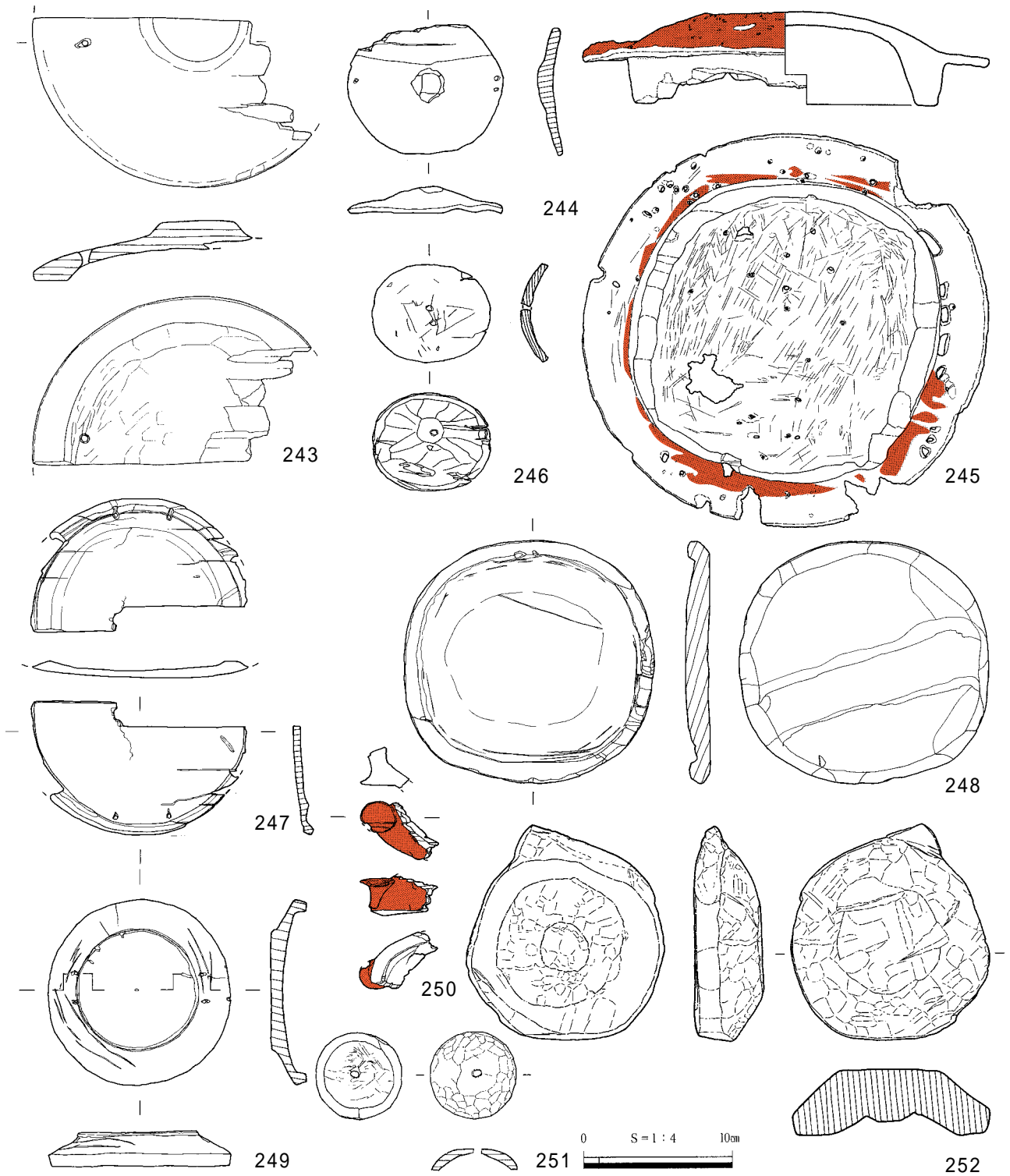
247~249は被せ蓋である。いずれも横木取りで、247は扁平な作りである。243と249には2孔1組の穿孔が施されている。249の頂部にはコンパス状工具の痕跡が残る。

250は第25図107と同様の形態と考えられ、外面には赤彩が残っている。

252は蓋の未製品である。突起状の部分が紐孔突起となる可能性はある。



第54図 蓋(9)



第55図 蓋(10)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
238	蓋	県道3区	不明	不明	高8.3,幅(18.0),厚1.9	横木取り	スギ	:300図327	21352
239	蓋	県道8区	SD38	弥生後期	高4.5,幅9.6,厚0.7	横木取り	ヤマグワ	:285図242 赤彩	27031
240	蓋	国道4区	SD38-3	弥生後期~古墳前期	高4.4,幅10.6,厚0.9	横木取り	モクレン属	赤彩	16770
241	蓋	県道8区	不明	不明	高2.5,幅(6.4),厚0.7	横木取り	ヤマグワ	:285図241 赤彩	26369
242	蓋	国道4区	SD38-3	弥生後期~古墳前期	高 5.8,幅(19.0)	横木取り	スギ	赤彩	16262
243	蓋	県道7区	SD27	弥生中期	高4.1,幅 18.8	横木取り	スギ	:287図267	42888
244	蓋	国道3区	I層相当	弥生中期	高 1.8,幅(15.8),厚0.8	横木取り	ケヤキ		14206
245	蓋	県道8区	木器溜3	弥生後期	高6.4,幅28.7	横木取り	トチノキ	:300図328 赤彩 心持材	30346
246	蓋	国道4区	SD38-3	弥生後期~古墳前期	高2.0,幅8.0,厚0.9	横木取り	横木取り		15704
247	蓋	県道7区	J層	弥生中期	高 1.8,幅(15.8),厚0.8	横木取り	アスナロ属		44821
248	蓋	国道4区	SD38-2	弥生後期	高2.5,幅25.7,厚2.3	横木取り	スギ		17994
249	蓋	県道7区	SD27	弥生中期	高2.4,幅12.3,厚1.3	横木取り	スギ		42207
250	蓋	県道8区	SD38	弥生後期	高 2.7,幅 5.3	横木取り	ヤマグワ	赤彩	27804
251	蓋	県道3区	SD20	弥生後期	高1.4,幅 0.6	横木取り	横木取り	:301図338	21162
252	蓋	県道7区	K層	弥生中期	高 4.4,幅 14.8	横木取り	ヤマグワ	:300図330 未製品	42443

(7) 槽・盤類 : 253 ~ 263



写真37 槽・盤類(1)

底部に脚が付くものである。平面形は長方形～小判形で、側面の立ち上がりは斜め上方に開いた後、垂直に切り立つ。

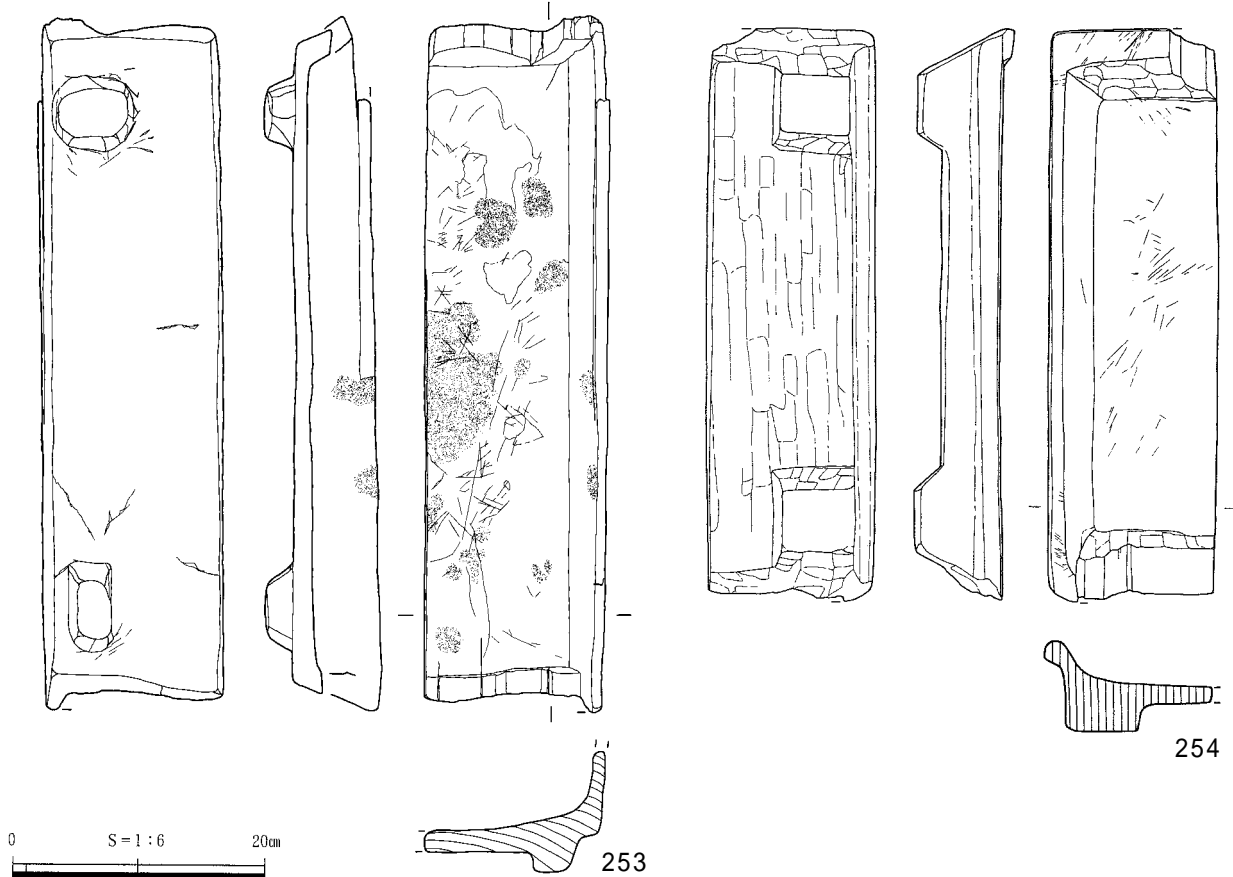
253、254、256～258は長方形の脚で、255、262は円形の脚、259は平面が長方形の脚の中心側1角を丸く削りとった形態をしている。261、263の脚は下駄の歯状を呈している。

255は超大型のものである。内面の立ち上がりはゆるやかなカーブを描く。表面全体が炭化している。

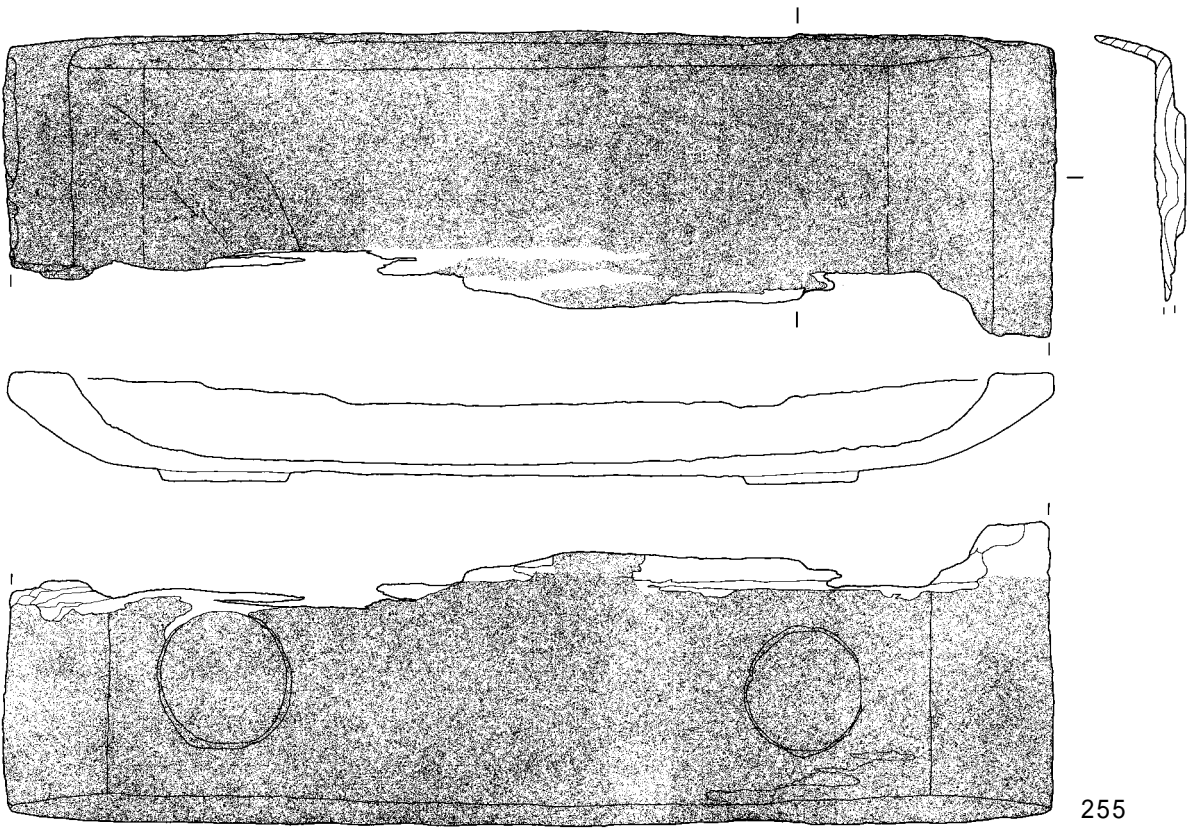
257は短辺の一方にカギ形の彫りこみを入れ、穿孔を1ヶ所施している。把手状のものを目釘で留めた痕跡であろうか。

258、262は側面の立ち上がりがゆるやかなカーブを描く。

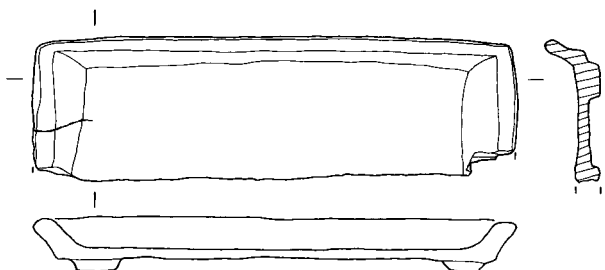
261は下駄の歯状の脚を持つもので、作りつけのアーチ形把手を持つ。対辺にも把手が作りつけられた可能性がある。



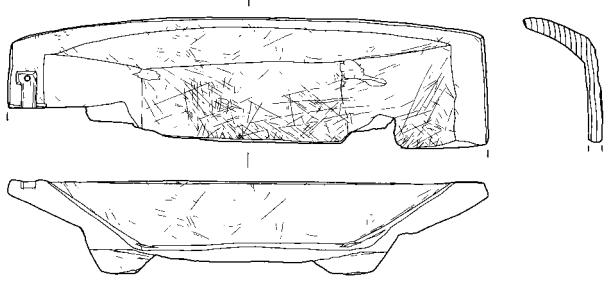
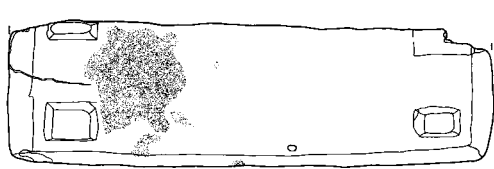
第56図 槽・盤類(1)



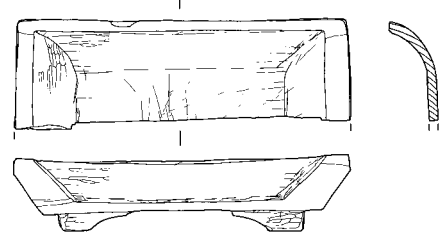
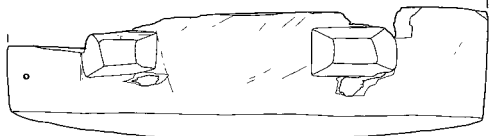
255



256



257



258

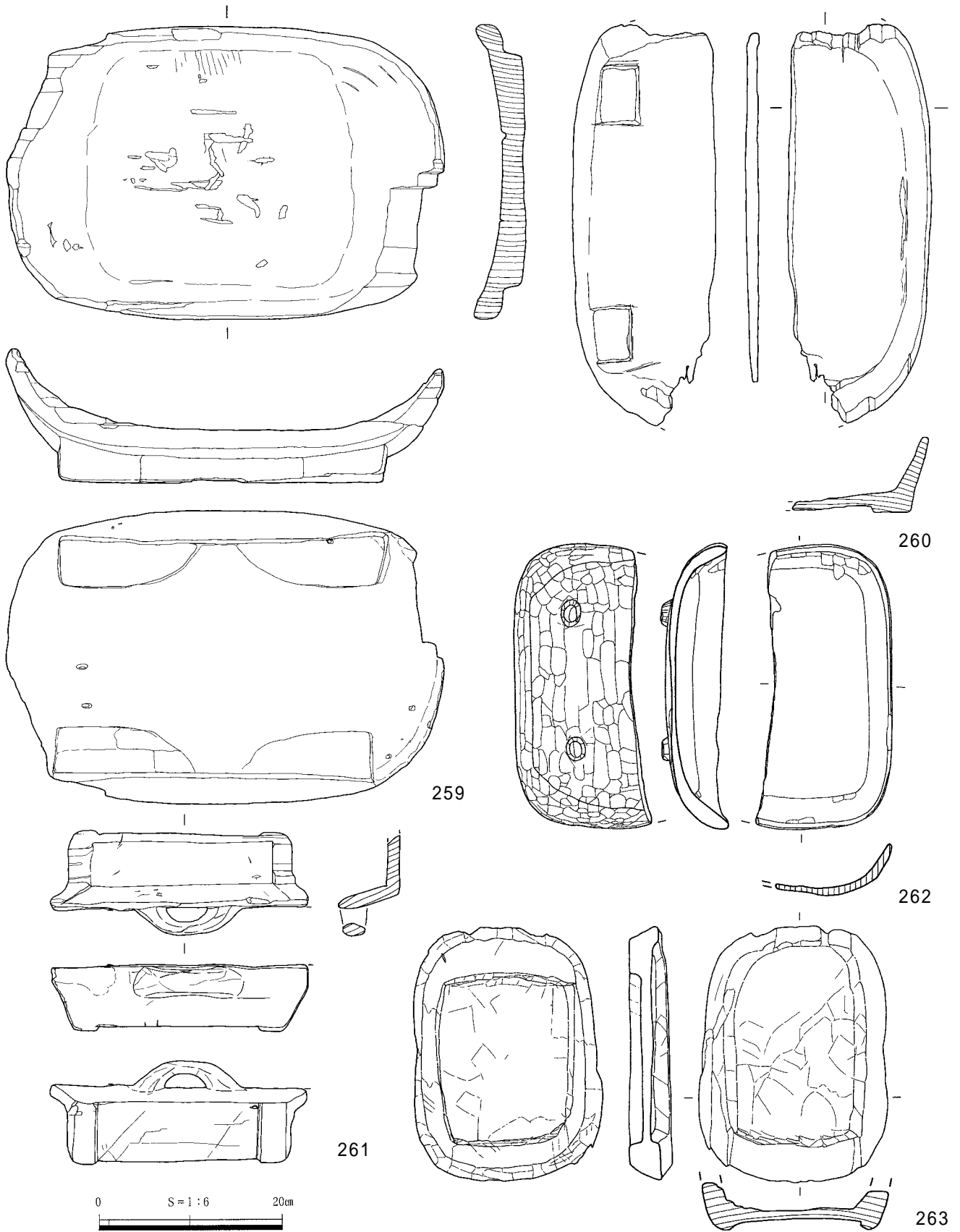


0 S=1:10 30cm

0 S=1:8 20cm

第57図 槽・盤類(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
253	槽・盤類	県道3区	SD20	弥生後期	長55.7,幅 14.8,厚4.2	横木取り		一部炭化	20929
254	槽・盤類	県道4区	SA4~6	弥生後期	長46.1,高7.2,幅(13.6)	横木取り		:297図315	2792
255	槽・盤類	県道7区	S71	弥生中期	長138.5,幅 40.3,厚4.3	横木取り	スギ	外面炭化	43166
256	槽・盤類	国道2区	層	弥生中期~古墳前期	長48.9,幅 11.7,厚2.3	横木取り		一部炭化	6971
257	槽・盤類	県道2区	層	古墳以降	長51.0,高10.0,幅(13.9)	横木取り		:297図314	25021
258	槽・盤類	県道3区	SD20	弥生後期	長35.6,高8.2,幅(11.8)	横木取り	マキ属	:297図313	20313



第58図 槽・盤類(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
259	槽・盤類	県道8区	SD38	弥生後期	長47.5,幅32.7,厚3.9	横木取り	スギ		30473
260	槽・盤類	県道7区	J層	弥生中期	長44.3,幅15.4,厚8.8	横木取り	スギ		43946
261	槽・盤類	国道3区	SK154下層		長28.7,高7.3,幅11.5,厚1.5	横木取り	スギ		14807
262	槽・盤類	国道5区	木器溜11	弥生中期	長31.1,高7.0,幅13.5	横木取り		148図108	9158
263	槽・盤類	県道5区	不明	不明	長28.0,高(5.3),幅20.0	横木取り		:298図317	9227

(7) 槽・盤類 : 264~274

底部に脚を持たないもので、すべて横木取り、スギ製である。

264~268は平面長方形で、短辺側の立ち上がりは明瞭で斜め上方に開く。268は内面短辺側が垂直に切り立っている。

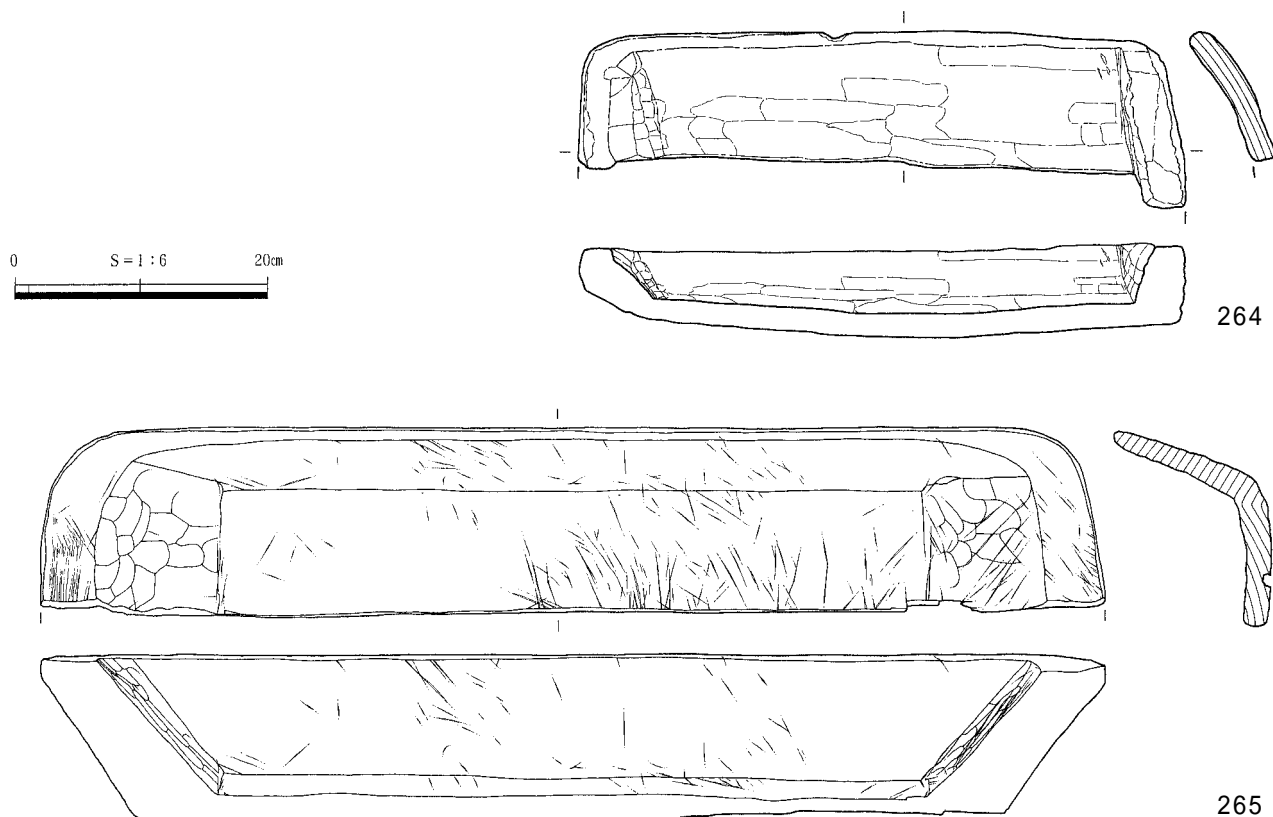
269~274は平面形が隅丸方形もしくは楕円形のものである。

270は平面形がかなり円に近い形で、側面の立ち上がりは小さい。内面は全体的に炭化しており、外面もやや炭化している。

274は内面全体が炭化し、加工も粗い。槽・盤類の未製品もしくは礎板の類であろうか。

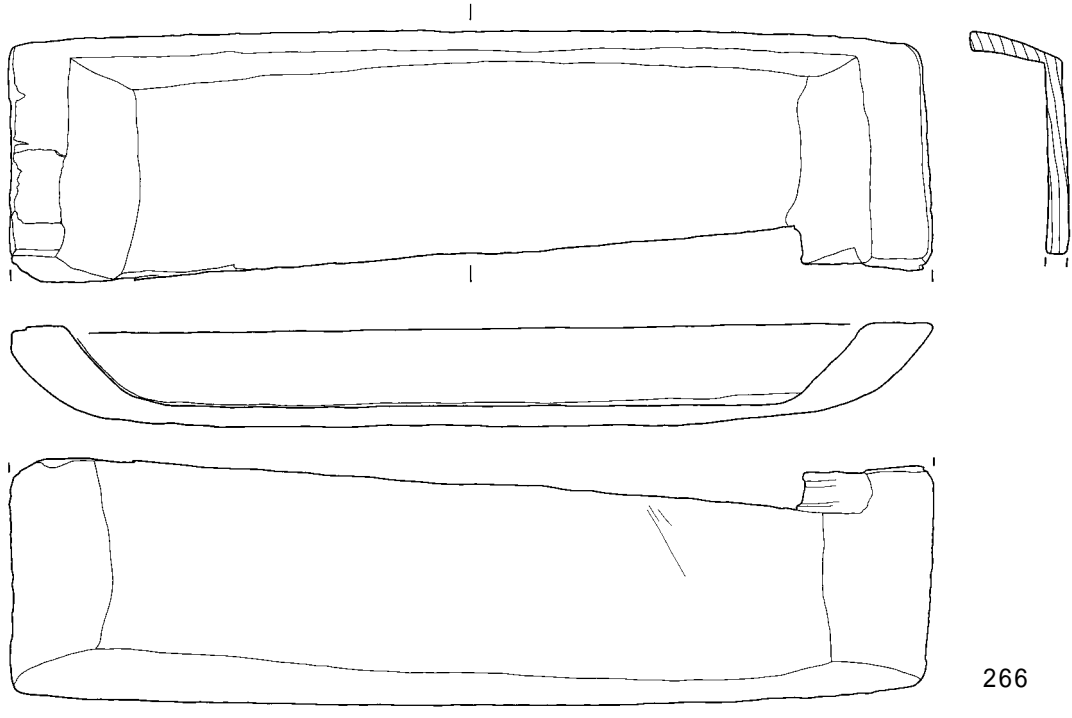


写真38 槽・盤類(2)

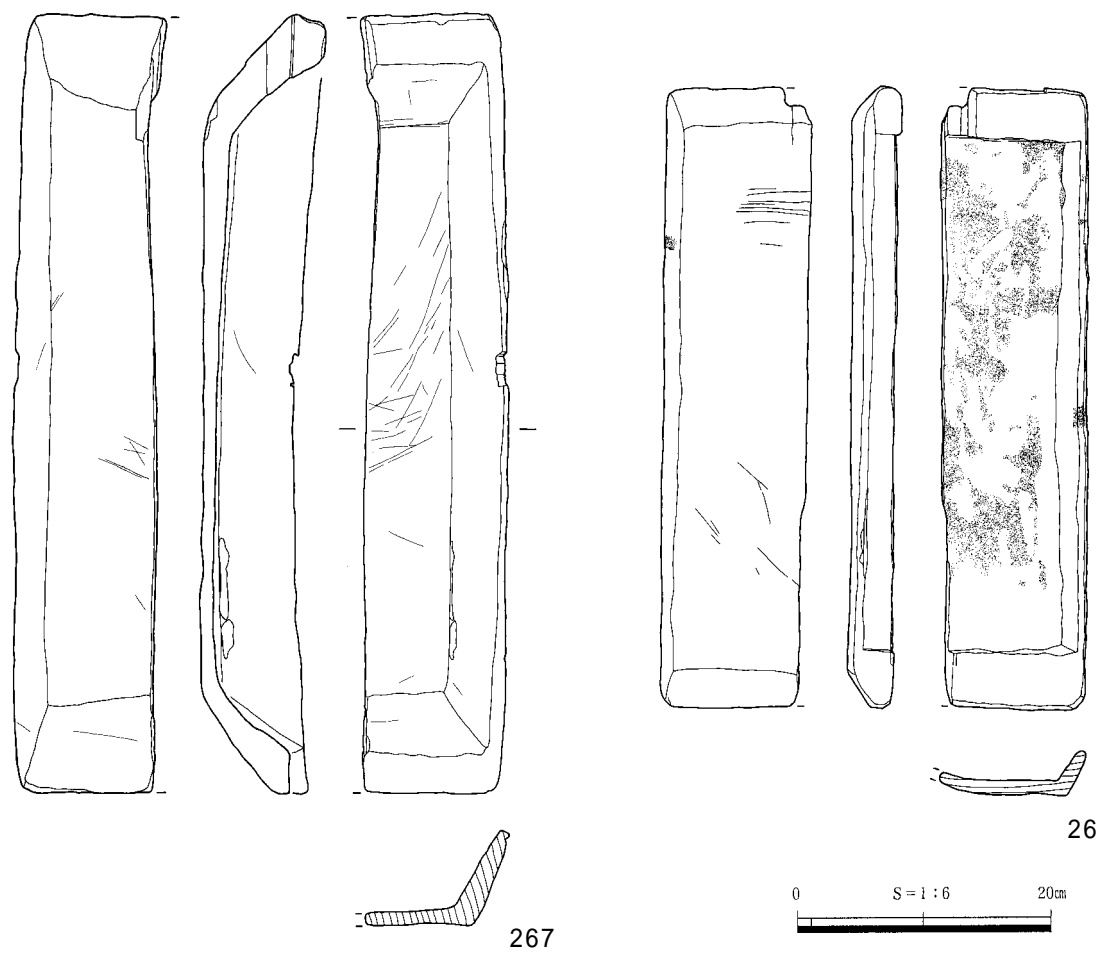


第59図 槽・盤類(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
264	槽・盤類	県道4区	SD11	弥生後期	長38.6,高6.9,幅(14.2)	横木取り		:298図316	5997
265	槽・盤類	県道4区	SA4~6	弥生後期	長84.2,高13.2,幅(15.0)	横木取り		:298図318	3534



266

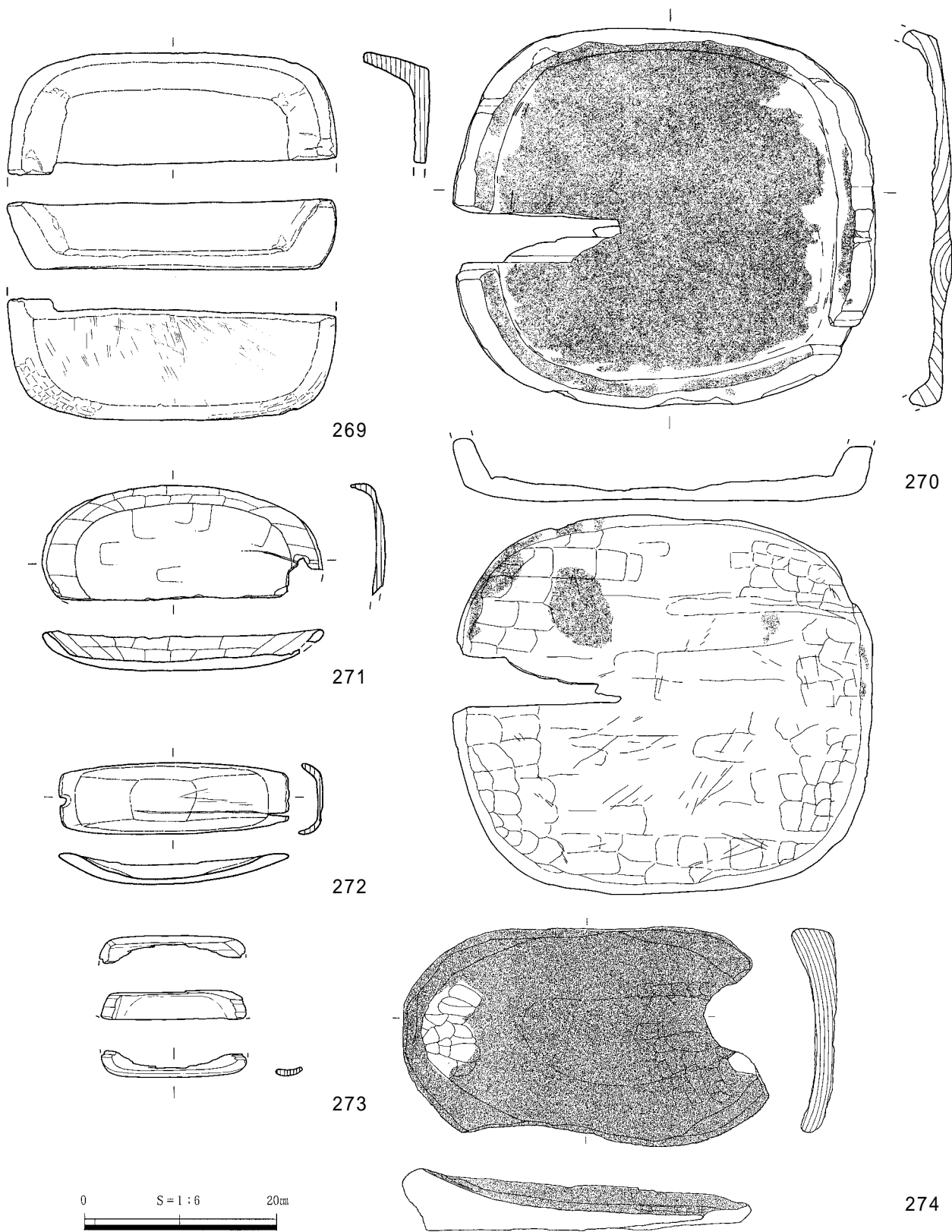


268

267

第60図 槽・盤類 (5)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
266	槽・盤類	県道7区	SD27	弥生中期	長73.9,幅19.4,厚8.6	横木取り	スギ		42212
267	槽・盤類	国道3区	I層相当	弥生中期	長62.4,幅11.1,厚8.9	横木取り			13753
268	槽・盤類	県道4区	SD11	弥生後期	長48.7,幅11.7,厚4.0	横木取り		一部炭化	5952

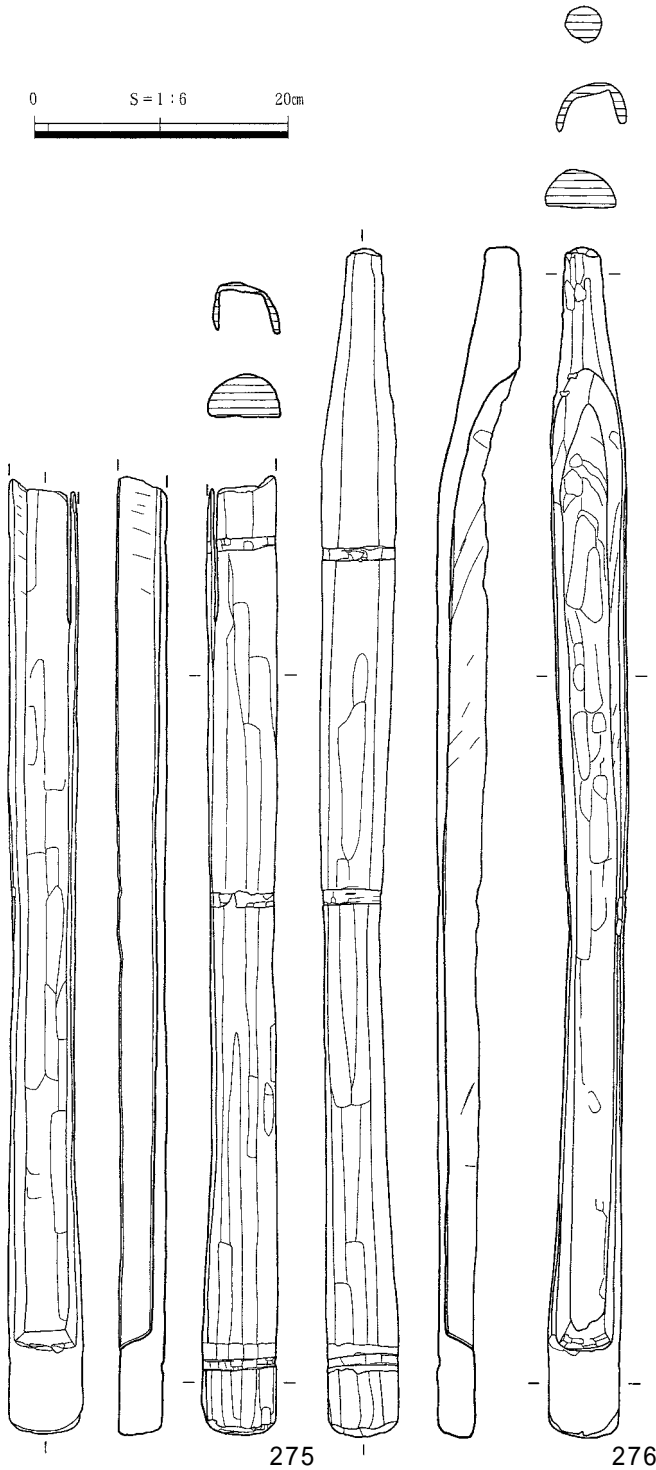


第61図 槽・盤類(6)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
269	槽・盤類	県道8区	木器溜3	弥生後期	長34.6,高7.4,幅(13.0)	横木取り	スギ	:296図310	30277
270	槽・盤類	県道7区	H層	弥生後期	長40.2,幅 44.4,厚3.0	横木取り	スギ	内面炭化	40604
271	槽・盤類	国道2区	1層	弥生前期~中期	長11.8,高4.4,幅29.1	横木取り		:148図110	6807
272	槽・盤類	県道7区	N層	弥生中期	長24.3,高3.3,幅7.4	横木取り	スギ	:296図309	44732
273	槽・盤類	県道8区	A層	弥生後期	幅 10.1	横木取り	スギ		27132
274	槽・盤類	国道2区	層	弥生中期~古墳前期	長30.6,幅50.4,厚8.7	横木取り		:148図111 内面炭化	6262

割物容器のうち出土例が少なく、他に分類しにくいものを一括した。

(8) 割物箱ほか 275~285



275、276は割竹形の割物容器である。セットで出土しており、組み合わせて使用されていたと思われる。どちらも身の外側に3ヶ所の帯状の彫りこみがあり、樹皮などで緊縛したものと思われる。断面はどちらも半円形であることから、組み合わせると円柱状となる。一方は先端が細く尖り、若干角度を変えている。もう一方の先端部が欠損しているため、結合したとき、内部空間が閉じた状態になるか開いた状態になるかは判別できない。

277~281も同様に2つで1セットとなる割竹形の割物容器と考えられる。

278は一方の端がやや膨らむタイプで、その先端は緊縛もしくは別材を嵌めて固定するようになっている。もう一方は割りぬかれており、こちら側が容器口縁部の可能性がある。

279は276と同様の形態をしている。これも先端が細く、角度を変えているため組み合わせたときの形態が想定できない。

281は一方の端に鋸歯状の線刻があり、こちら側が容器口縁部の可能性がある。胴部に3ヶ所彫りこみがあるのは275などと同様である。

282~285は短辺側が垂直に切り立つものとして、槽・盤類とは区分し、割物箱とした。

282は細長の箱である。底部外面には加工痕が明瞭に残る。

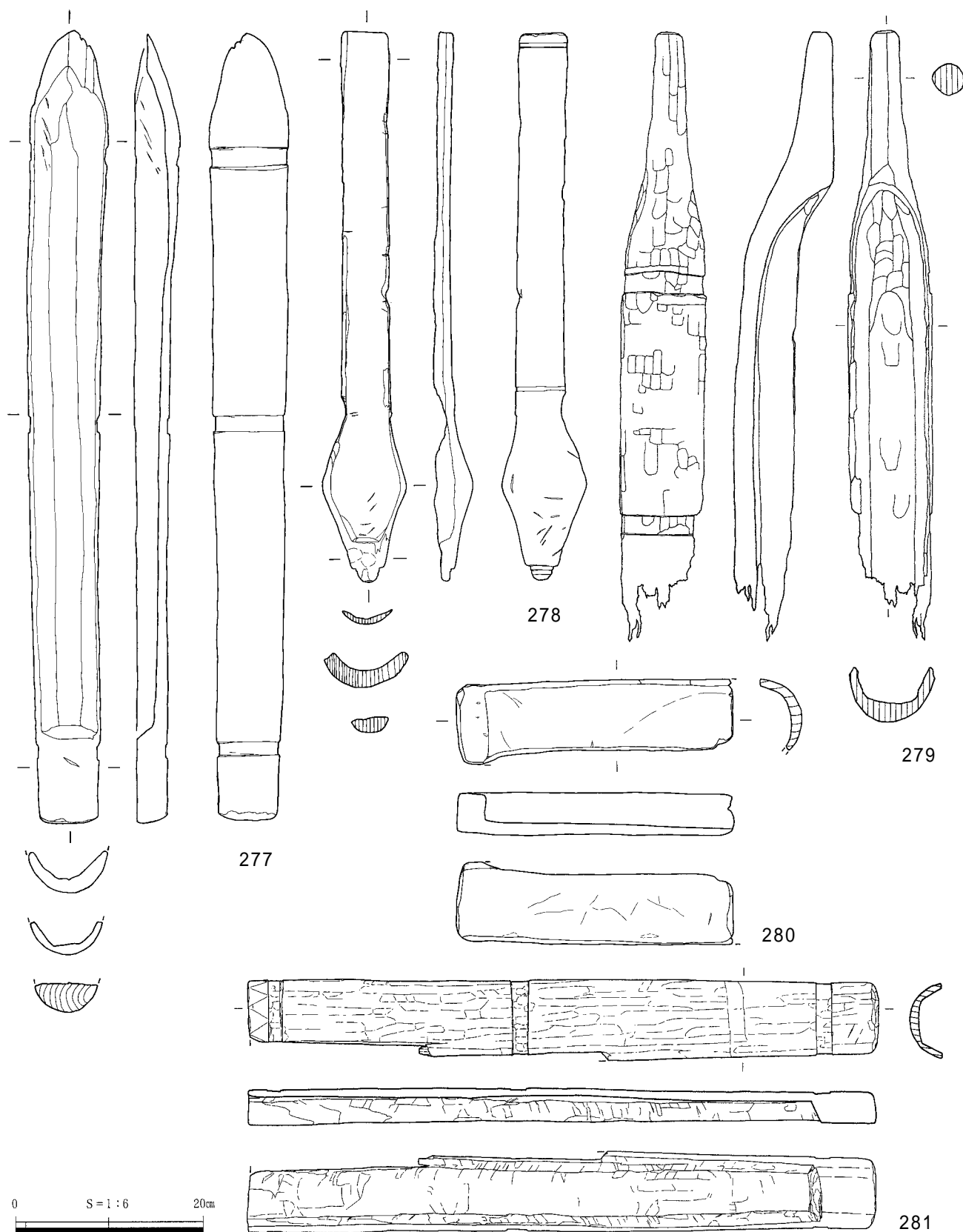
283は短辺の一方に把手状のものが作りつけられていた形跡がある。また長辺の口縁部内側は受口状に彫りこまれ、差し蓋構造となっている。

284は、短辺の一方が2段となっており、差し蓋が付く可能性がある。

285も同様に差し蓋構造を持つ箱で、側面の一方にはシカ、もう一方には魚と鋸歯文状の線刻が見られる。類似例として、兵庫県出石町袴狭遺跡出土例がある〔兵庫県 2000〕ただし、箱を置いた状態ではシカや魚は頭が下向きになり、用途と絵画の関係について再考の必要があろう。

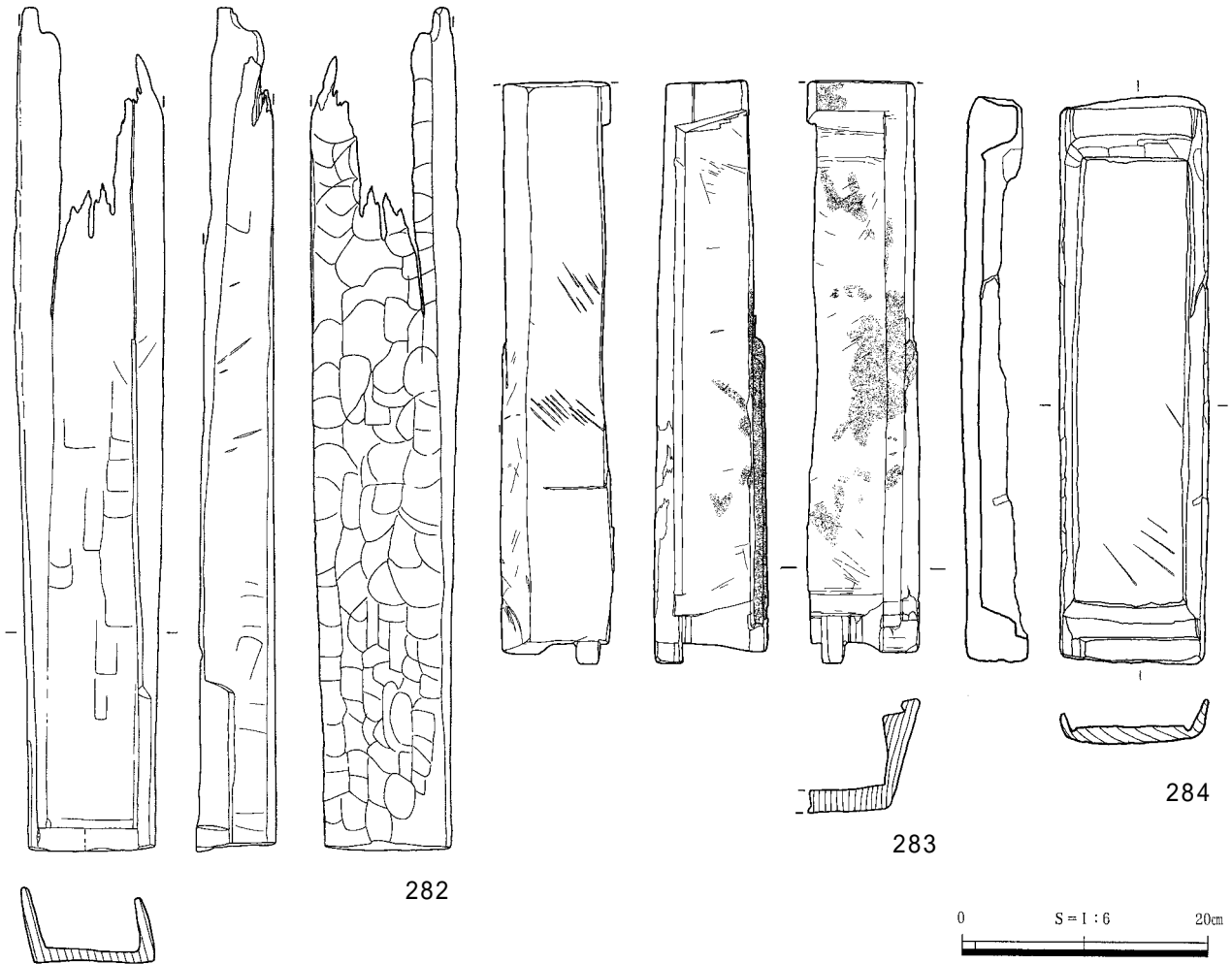
第62図 割物箱ほか(1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
275	細長容器	国道2区	1層	弥生前期~中期	長 77.7,幅6.1,高4.1,深3.5	横木取り		:152図130	6772-1
276	細長容器	国道2区	1層	弥生前期~中期	長96.7,幅6.0,高3.5,深2.7	横木取り		:152図131	6772-2



第63図 割物箱ほか(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
277	細長容器	国道5区	層上層	弥生中期	高4.7,幅 8.45,厚3.2	横木取り			9028
278	細長容器	国道7区	I層	弥生中期	長59.0,幅9.1,厚2.0	横木取り		炭化	36499
279	細長容器	国道2区	不明	不明	長 66.1,幅9.2,高6.9,深4.9	横木取り	スギ	:152図132	7546
280	細長容器	国道8区	D層	弥生中期～後期	高4.7,幅 29.8,厚1.2	横木取り	ヤマグワ		33046
281	細長容器	国道7区	J層	弥生中期	長66.7,幅8.5,高3.4,深3.0,繫縛溝幅1.4~1.7	横木取り	スギ	:305図362	36583

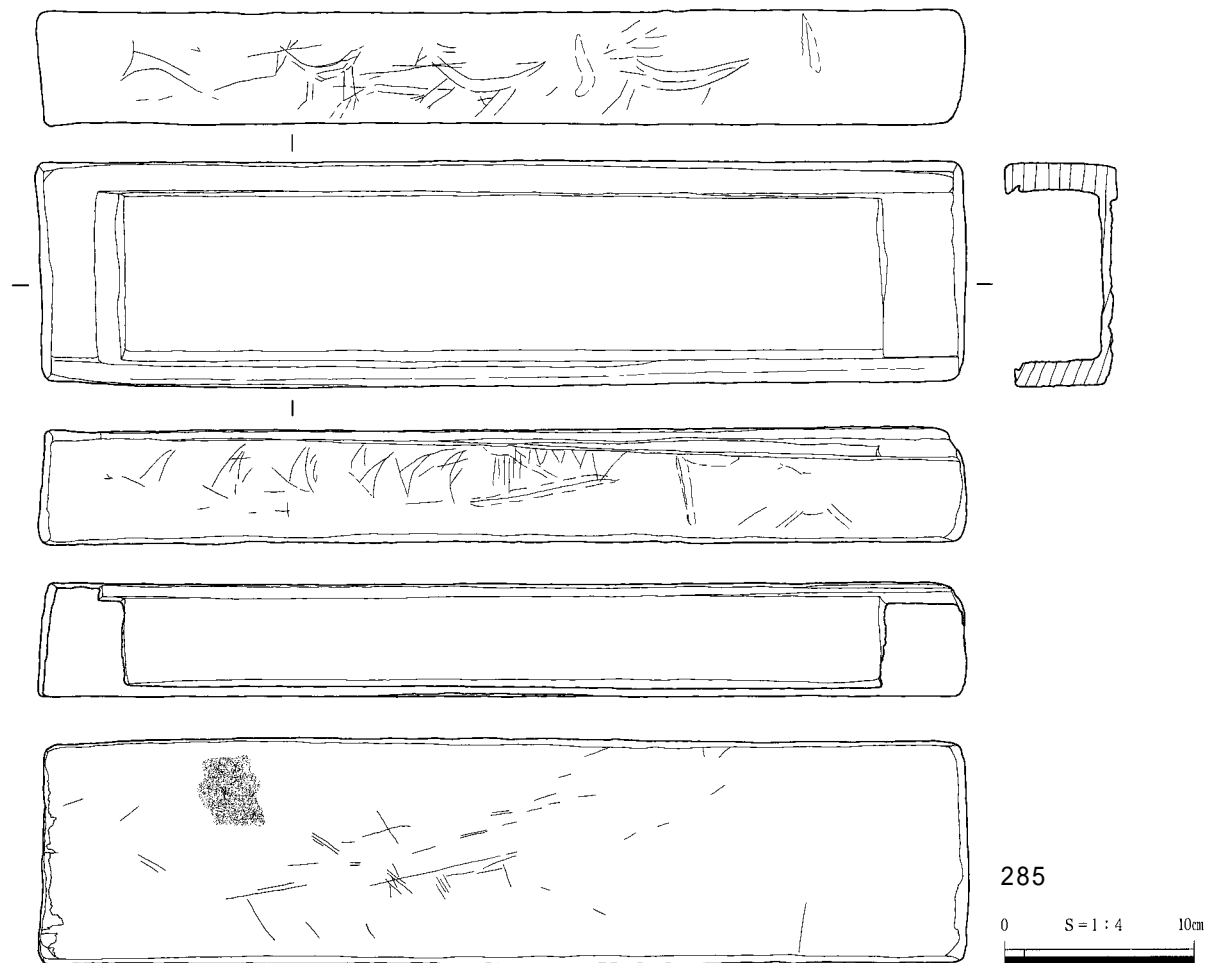


第64図 割物箱ほか(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
282	割物箱	国道2区	1層	弥生前期～中期	長 70.3,幅12.8,高6.3,深5.0	横木取り	スギ	:152図129	6713
283	割物箱	国道4区	SD11	弥生後期	長48.0,幅 9.2,厚 2.6	横木取り		一部炭化	5956
284	割物箱	国道2区	1層	弥生前期～中期	長46.5,高5.9,幅12.2,厚5.1	横木取り		:150図125	6653



写真39 割物箱ほか(1)



第65図 割物箱ほか(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
285	割物箱	国道5区	木器溜11	弥生中期	長49.1,幅12.0,厚6.0	横木取り	スギ	シカ・魚線刻 一部炭化	9243



写真40 割物箱ほか(2)

(9) 曲物 286 ~ 294

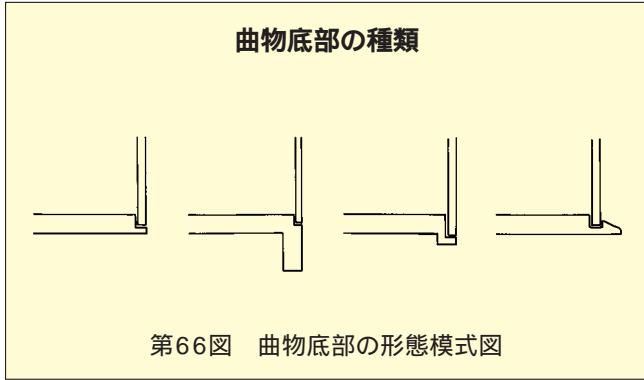
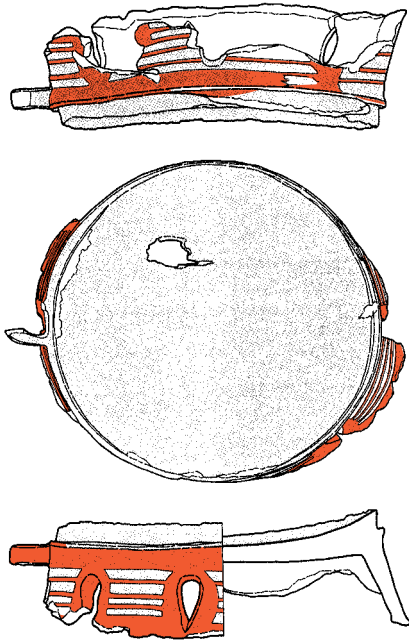
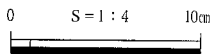


写真41 曲物



286



第67図 曲物(1)

側板の存在は不明だが、286、291には底部の段部分に側板の一部が目釘で固定されている状況が確認できる。青谷上寺地遺跡では、側面に段を持つ円板形、側面に段を持ち、脚をもつタイプ、側面に段を持ち、上底となるタイプ、外周のやや内側に溝を彫り、側板をはめ込むタイプがある。いずれも目釘・樹皮紐等で固定していたと思われる(第66図)。

286は赤・黒の漆で装飾された曲物底部である。脚部には涙滴状の透かし孔が施され、孔の周囲および上下はほぼ一定の幅で赤彩の縁取りがなされている。透かし孔は8ヶ所作られ、その間は3条の赤彩横線で装飾されている。この種の透かし孔は丹後～北陸地方にかけての土器に見られる。底部には1ヶ所アーチ形の把手が作りつけられ、底部上面は黒彩されている。側板がわずかに残存し、厚さ約2mmで黒彩されている。また底部の段内側にも黒彩されており、彩色を終えてから側板を取り付けたことがわかる。彩色は黒・赤の順に施され、筆状の道具の使用が認められる。

287、288、291は表面に2個ないし4個の穿孔があり、287、288には側面の段がないが、曲物蓋と考えられる。291は側面に厚さ約2mmの側板をわずかに残している。上面中央には円形のケビキ痕があり、また無数の使用痕と思われる痕跡が片面にだけ見られる。

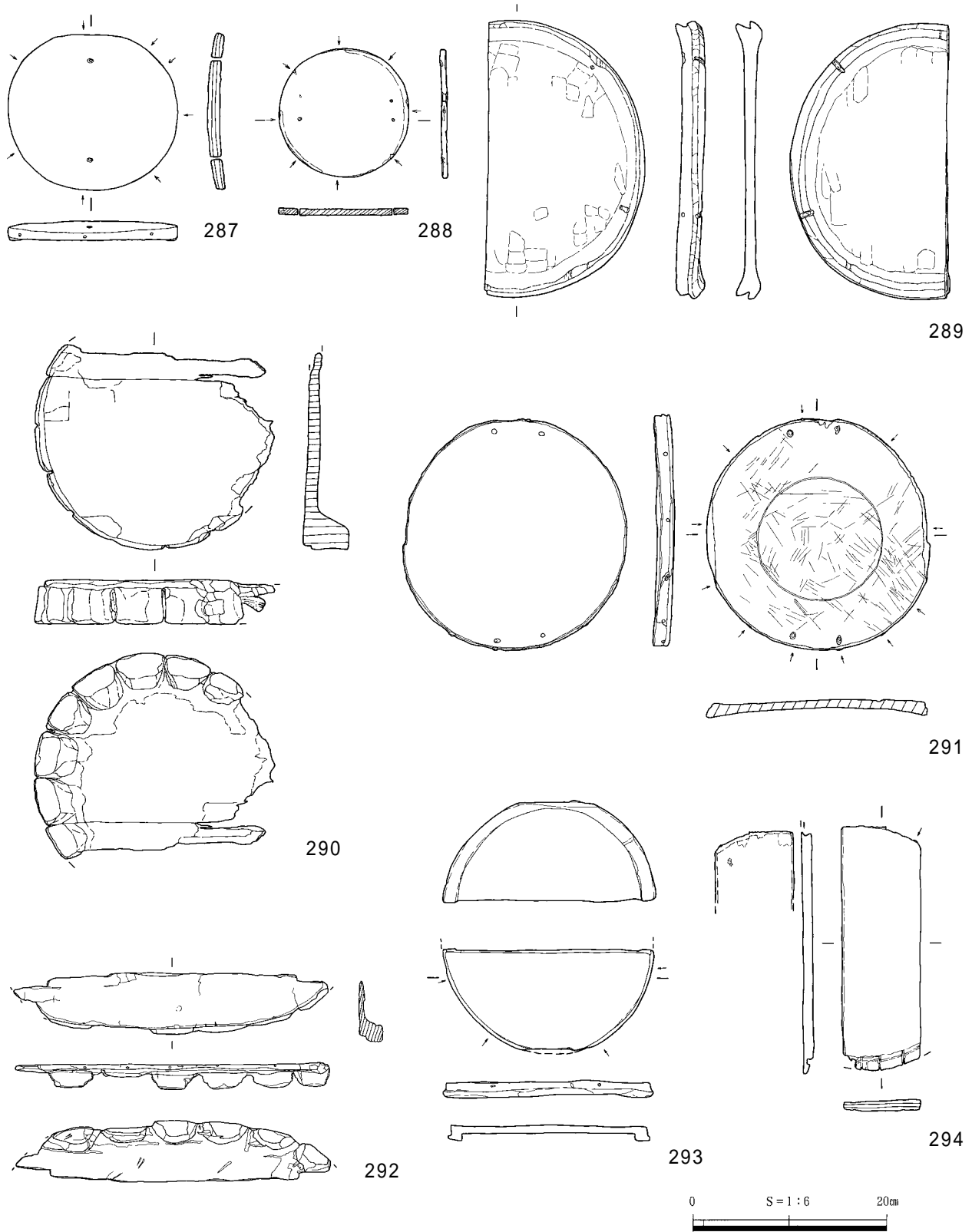
289は穿孔と溝状の切込みがあり、樹皮紐等で側板と底部を緊縛していたと考えられる。底部はわずかに上底状を呈す。

290、292は脚を持つものである。290は平面が円形、292は平面が楕円形となるものである。どちらも脚は切り込みを入れて分割している。

293は目釘で側板を留めるもので、底部は一段明瞭に彫りこまれ、上底となっている。

294は外周内側に溝を彫り、目釘または樹皮紐で側板を固定したと考えられるものである。

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
286	曲物	県道8区	SD69	弥生後期～古墳前期	底径16.7,脚径(19.1),幅0.3, 脚高3.7,枠装着部高1.0	横木取り	モクレン属	:307図364 漆塗り	27729



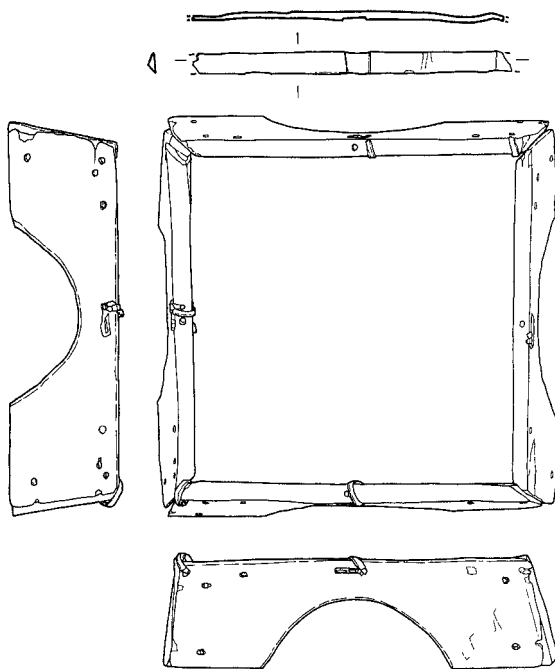
第68図 曲物(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
287	曲物	県道7区	J層	弥生中期	高1.8,幅17.6	横木取り	スギ	:308図368	42397
288	曲物	県道7区	SD27	弥生中期	幅13.5,厚0.6	横木取り	スギ		42208
289	曲物	国道2区	層	弥生中期～古墳前期	底径(29.2),高 2.5	横木取り	スギ	:149図119	6088
290	曲物	国道2区	層	弥生中期～古墳前期	底径(25.5),高 4.8	横木取り	スギ	:147図102	6228
291	曲物	県道7区	SD27	弥生中期	高2.0,幅24.1	横木取り	スギ	:308図369	43252
292	曲物	県道7区	H層	弥生後期	長 33.0,幅 6.5,厚2.6	横木取り			36186-1
293	曲物	県道7区	I層	弥生中期	底径22.0,脚幅0.9	横木取り	スギ	:307図365	42132
294	曲物	県道4区	SD11	弥生後期	底径(26.7),溝幅0.5	横木取り	スギ	:307図363	2783

(10) 指物 295～319



写真42 指物(上)と線刻板(下)



0 S=1:6 20cm

295

第69図 指物(1)

板材を組み合わせる箱もしくは箱形のをまとめた。

296は短辺側を凸形にし、3方に穿孔が見られることから、箱側板と思われる。

295は「四方転びの箱」に類似した例である。台形板の底辺側をアーチ形にカットし、木口側は内側を斜めにカットして4枚組合せ、上部が内傾する台状のものである。各板は両端に穿孔を開け、樹皮紐で緊縛されている。上辺側中央には方形孔を開け、細い板材を十字に渡して固定することで、強度を高めていたと思われる。

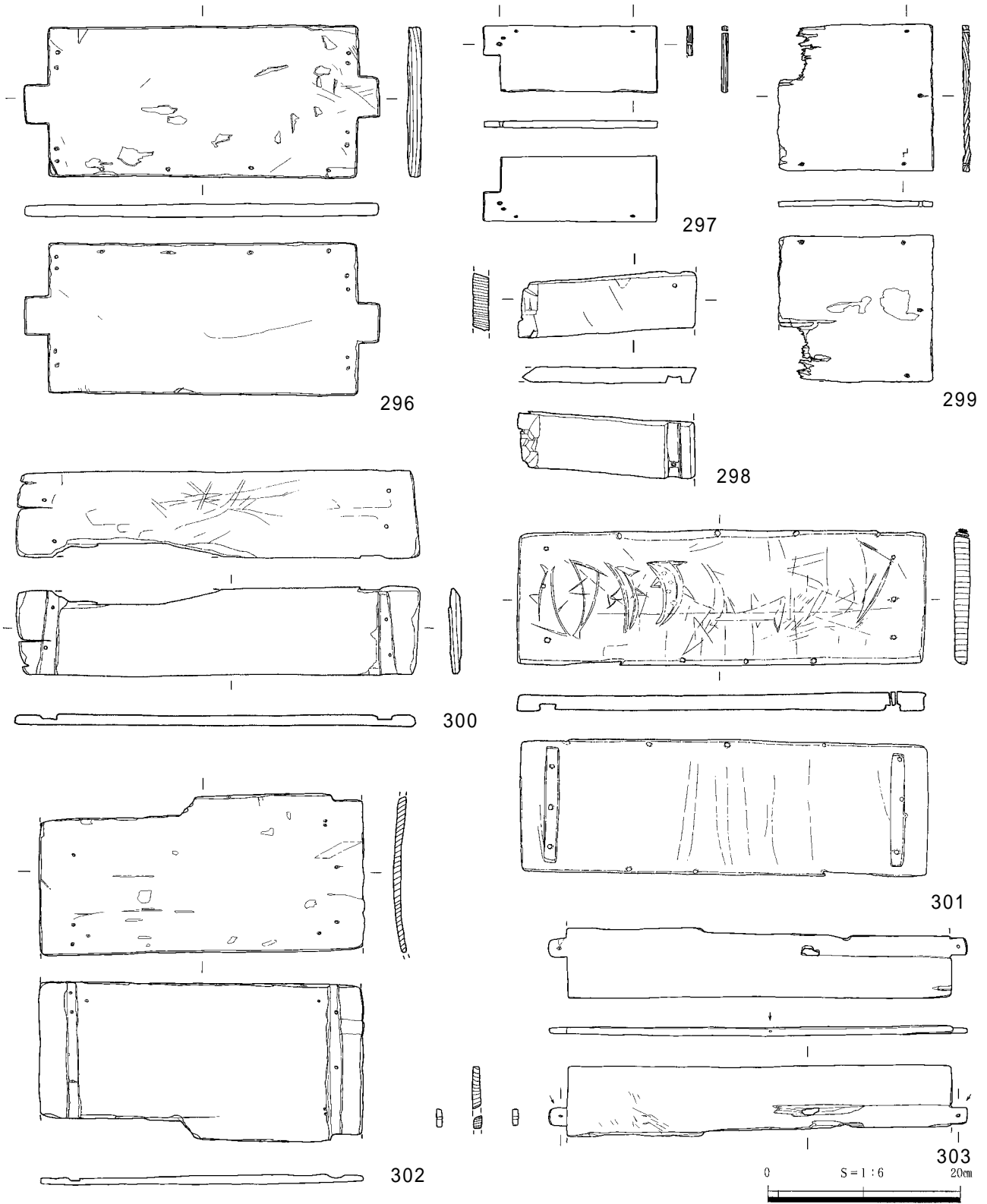
298、300～302、304～306、309、310は短辺側に溝が施され、箱状に結合していたと思われるものである。301はサメの線刻が描かれており、四方に目釘痕があることから天板もしくは底板となる。また、琴の底板と同じ構造でもあり、琴底板の可能性もある。

311は一方の側板にへび状の線刻が施されている箱である。長辺側板の底部には2ヶ所、短辺側板の底部には1ヶ所アーチ形にカットされ、脚となる。側板4枚と底板1枚で構成され、長辺側板には「H」状の溝、短辺側には「一」状の溝を彫り、各板を嵌めて目釘で固定している。

315は側面が逆台形となる箱である。側面底辺側をわずかに削って脚状とし、その上に半月状に透かし孔を開ける。向かい合う2枚の側板には透かし孔の上に方形の孔を開け、先端がやや肥厚する棒材を孔に通し、支木として底板を支えていたと考えられる。方形孔のない2枚の内側には側板を挟む溝が彫りこまれている。どの板も左右に2孔あり、また孔が斜めに開けられていることから、隣り合う2枚を錐状の工具で一気に孔を開け、樹皮状の紐で緊縛固定していたと考えられる。312～314、316～318も同様のものと考えられる。

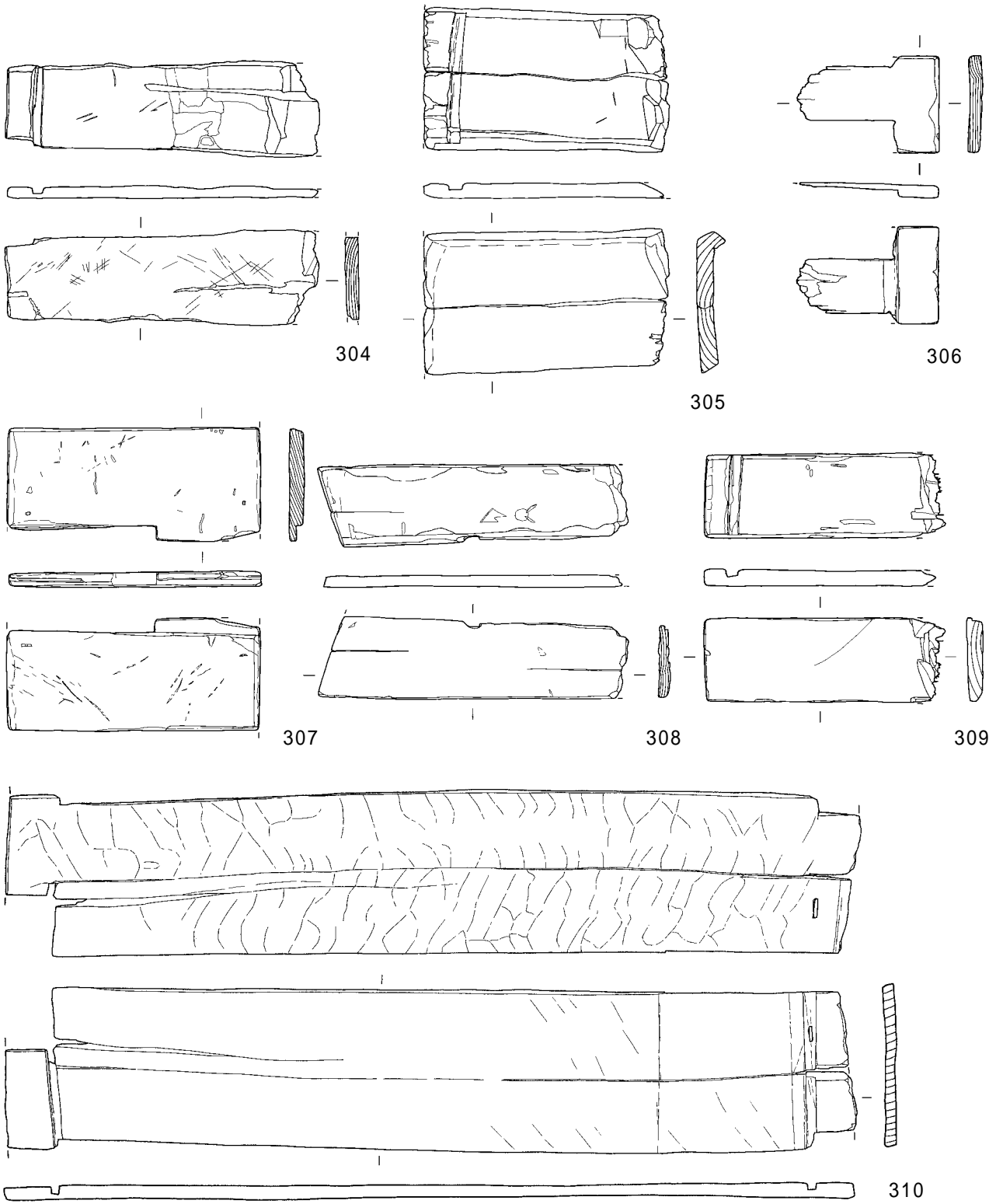
319は井桁状に組み合うものである。長辺側に樹皮紐が残っており、さらに別の部材が組み合わさる可能性がある。

297、299、307、308は箱状に組み合うものである。



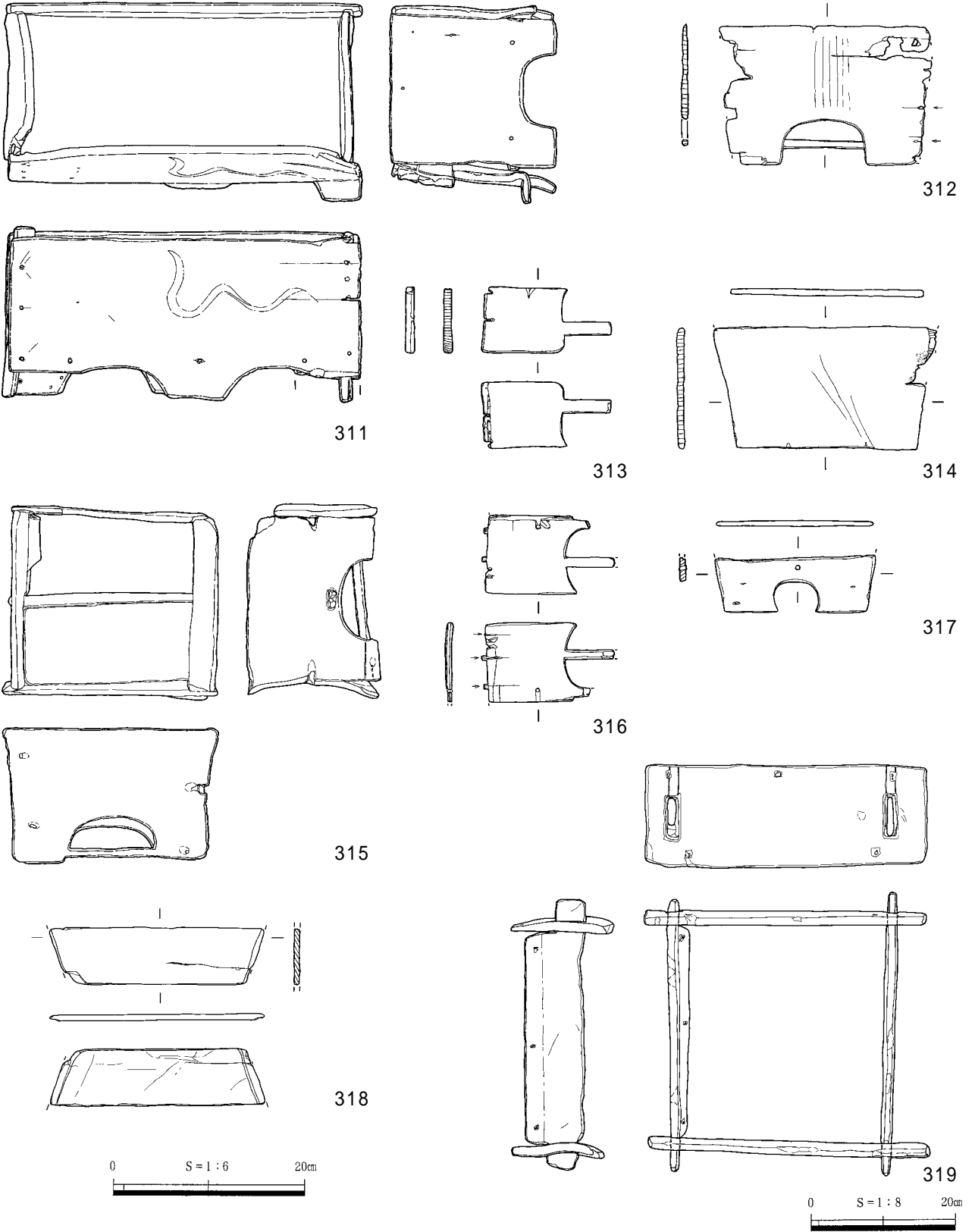
第70図 指物(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
295	指物	県道7区	J層	弥生中期	上縁径27.8×28.2, 下縁径31.5,高8.9,厚1.5	柱目	スギ	:312図387	38685
296	指物	県道7区	J層	弥生中期	長38.1,高15.9,厚1.3	柱目	スギ		42357
297	指物	国道5区	木器溜11	弥生中期	長18.3,幅6.2,厚0.8	柱目			9291
298	指物	排土中	不明	不明	長18.8,幅 5.9,厚1.6	板目	スギ		50149
299	指物	国道5区	木器溜11	弥生中期	長15.6,幅16.5,厚7.5	柱目			9301
300	指物	県道7区	I層	弥生中期	長42.5,幅9.1,厚1.2, 組合せ溝幅1.5	板目	スギ	:314図391	40804
301	指物	県道7区	J層	弥生中期		柱目		:314図393 サメ線刻	42348
302	指物	国道3区	SD38	弥生中期	長34.5,高16.7,厚0.9	柱目			14401-1
303	指物	国道1区	木器溜2	弥生後期	長44.1,高 7.6,厚0.9	板目			5943



第71図 指物(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
304	指物	県道7区	I層~	~弥生中期	長32.4,幅 10.0	板目	スギ		41839
305	指物	県道7区	I層~	~弥生中期	長25.4,高14.7,厚2.5	柁目	スギ		41841
306	指物	国道4区	不明	不明	長31.2,高8.4,厚1.3	柁目			15473-2
307	指物	国道4区	不明	不明	長26.65,高11.6,厚1.6	柁目			15473-3
308	指物	国道4区	不明	不明	長14.6,高10.0,厚1.3	柁目			15473-1
309	指物	県道7区	I層~	~弥生中期	長25.1,幅 8.8,厚1.8	板目	スギ		41840
310	指物	県道4区	不明	不明	長85.8,幅(16.6),厚1.6, 組合せ溝幅1.0	柁目		:314図392	3241



第72図 指物(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
311	指物	県道7区	J層	弥生中期	長37.4,幅20.6,高17.6,厚0.9,組合せ溝までの高4.1	柱目	スギ	:312図388	38675
312	指物	県道7区	SD67	弥生後期	長22.0,高14.7,幅18.6,厚0.8	板目	スギ		40389
313	指物	国道4区	SD38-3	弥生後期 ~ 古墳前期	長13.6,幅 7.0,厚1.0	板目	スギ		15887
314	指物	県道7区	SD67	弥生後期	長23.5,高12.8,幅19.0,厚0.8	板目	スギ		40391
315	指物	県道8区	SD38	弥生後期	長22.8,高14.4,幅20.0	柱目	スギ	:313図389	34543
316	指物	国道4区	SD38-3	弥生後期 ~ 古墳前期	長14.0,高8.4,厚0.9	柱目	スギ		15828
317	指物	県道4区	SD11	弥生後期	長16.8,幅 5.9,厚6.5	柱目			2918
318	指物	国道4区	b	弥生中期	長22.7,幅 6.1,厚0.8	柱目			18438
319	指物	県道7区	J層	弥生中期	長39.1,幅14.4,厚1.6	柱目	スギ		42399-1
319	指物	県道7区	J層	弥生中期	長39.3,幅12.8,厚1.4	柱目	スギ		42399-2
319	指物	県道7区	J層	弥生中期	長37.9,幅8.4,厚1.5	柱目	スギ		42399-3
319	指物	県道7区	J層	弥生中期	長39.5,幅9.8,厚1.4	柱目	スギ		42399-4

(11) その他(容器脚など) 320~339



写真43 その他(容器脚)

容器脚のように単体では容器とはいえないものの、容器の可能性のあるものをまとめた。

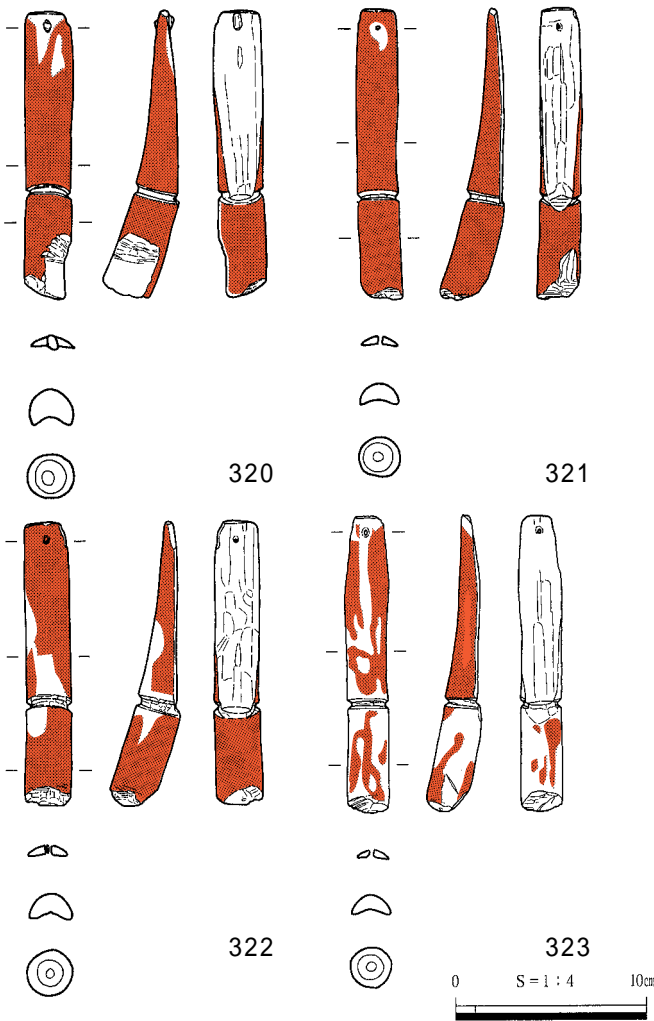
320~323、324~327はそれぞれ4本セットで出土したもので、容器の脚と考えられている。中央やや下に輪状の溝が施され、それより上は斜めにカットされて先端には穿孔が施される。溝以下の部分は反り返る形で斜めにカットされている。カット面以外は全面赤彩されており、上部のカット面が容器に固定される面と思われる。穿孔の部分に樹皮紐が残っているものもあり、緊縛して固定していたと考えられる。

328~330は3本セットで出土した脚である。形態・サイズの的に320~323と同じである。

331~333はそれぞれ単体で出土しており、セットの本数は不明である。331と332は形態・サイズが非常に似ており、セットの可能性もある。333は先端部がやや肥厚し、他とは様相が異なる。心を外して加工していることから、上記とは全く別物であろう。337は溝の下でかなり屈曲する。心去材を加工している。

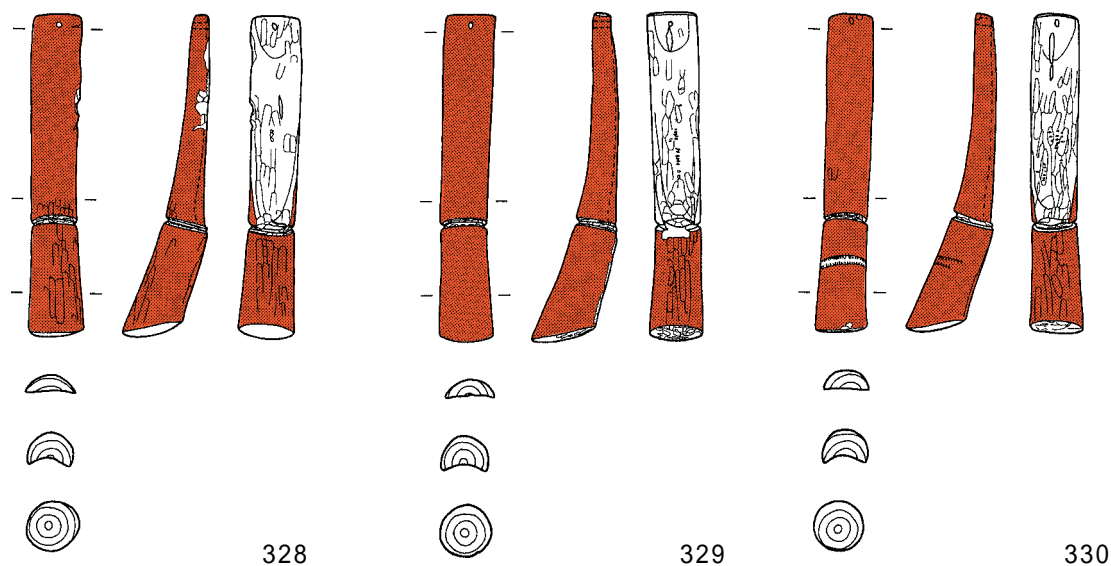
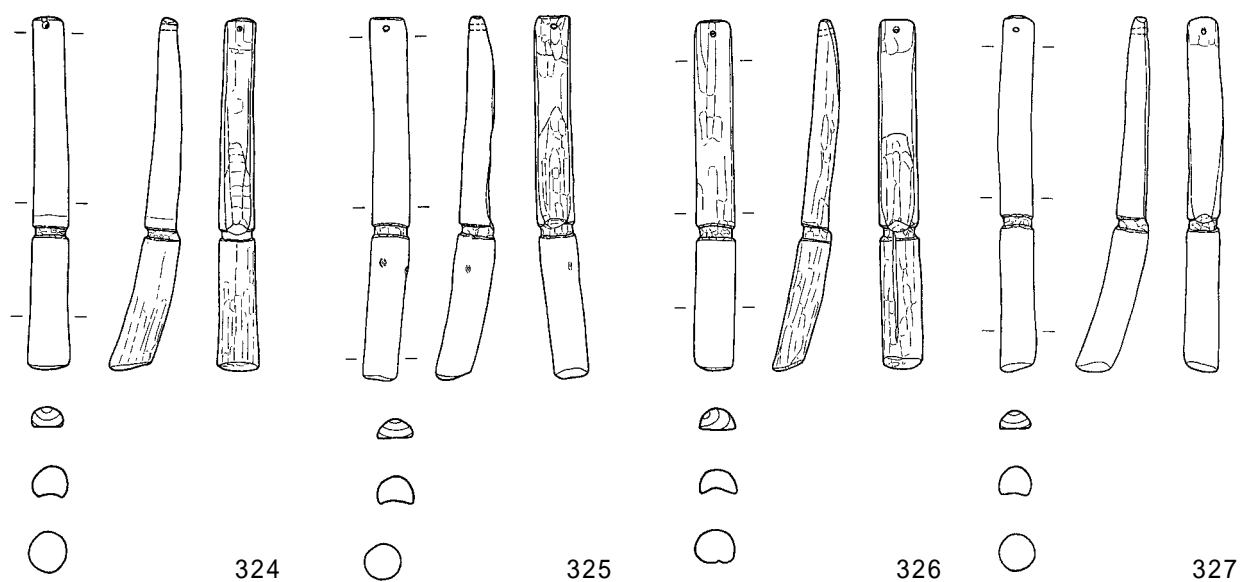
334~336はカットされた面が長く、脚となる部分が短い。先端に溝が彫られ、脚との境に穿孔が施されるなど、320などとは全く逆となる。類似したものが三重県津市六大A遺跡から出土しており、報告書では曲物脚として民俗例とともに紹介されている【三重県2000】

338、339は平面が楕円形を呈す、曲物底板と似た形状のものである。これらには側板ではなく、ヒゴを編んだもので外周を覆い、目釘で固定している。上部の構造が不明であるが、「容器」の可能性は高い。339は底部の作り、編み方とも雑であるが、338はどちらも丁寧に作られており、またしっかりとした目釘が上部に11箇所、側面に14箇所打ち込まれている。いずれも横木取りである。



第73図 その他(1)

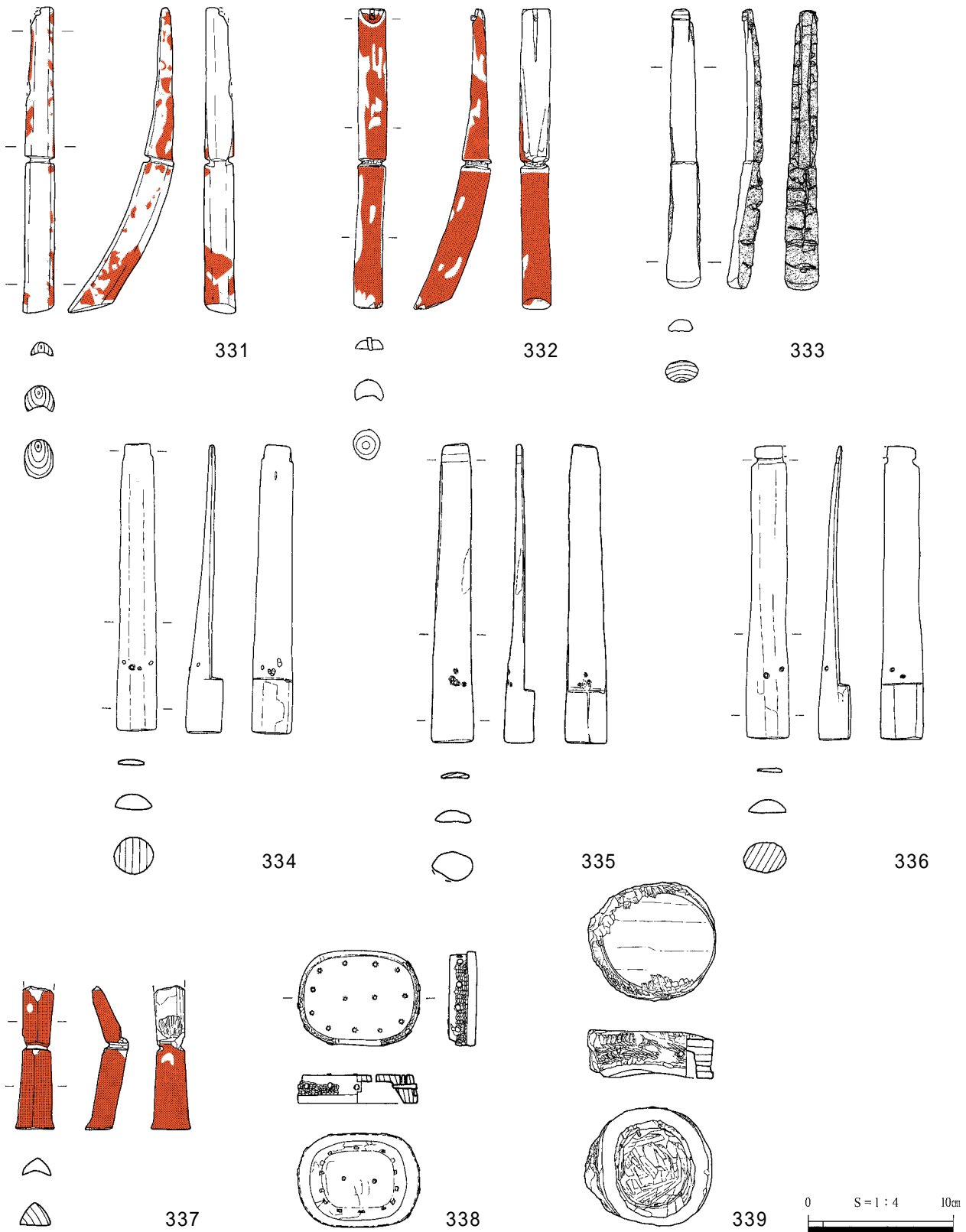
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	量量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
320	容器脚	県道7区	層	弥生後期~古墳前期	長15.0,幅2.4,裝飾部長10.0	心持材	イヌガヤ	:303図347 赤彩	36086-1
321	容器脚	県道7区	層	弥生後期~古墳前期	長15.2,幅2.1,裝飾部長10.6	心持材	イヌガヤ	:303図348 赤彩	36086-2
322	容器脚	県道7区	層	弥生後期~古墳前期	長14.8,幅2.4,裝飾部長10.0	心持材	イヌガヤ	:303図349 赤彩	36086-3
323	容器脚	県道7区	層	弥生後期~古墳前期	長15.5,幅2.2,裝飾部長10.0	心持材	イヌガヤ	:303図350 赤彩	36086-4



0 S=1:4 10cm

第74図 その他(2)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
324	容器脚	県道7区	H層	弥生後期	長18.7,幅2.2,装飾部長11.5	心持材	イヌガヤ	:303図351	36339-1
325	容器脚	県道7区	H層	弥生後期	長19.2,幅1.8,装飾部長11.2	心持材	イヌガヤ	:303図352	36339-2
326	容器脚	県道7区	H層	弥生後期	長18.4,幅2.0,装飾部長11.2	心持材	イヌガヤ	:303図353	36339-3
327	容器脚	県道7区	H層	弥生後期	長18.8,幅1.8,装飾部長10.9	心持材	イヌガヤ	:303図354	36339-4
328	容器脚	国道1区	木器溜	弥生後期	長16.9~17.4,径2.8	心持材	イヌガヤ	:147図104 赤彩	5824-1
329	容器脚	国道1区	木器溜	弥生後期	長16.9~17.4,径2.8	心持材	イヌガヤ	:147図105 赤彩	5824-2
330	容器脚	国道1区	木器溜	弥生後期	長16.9~17.4,径2.8	心持材	イヌガヤ	:147図106 赤彩	5824-3



第75図 その他(3)

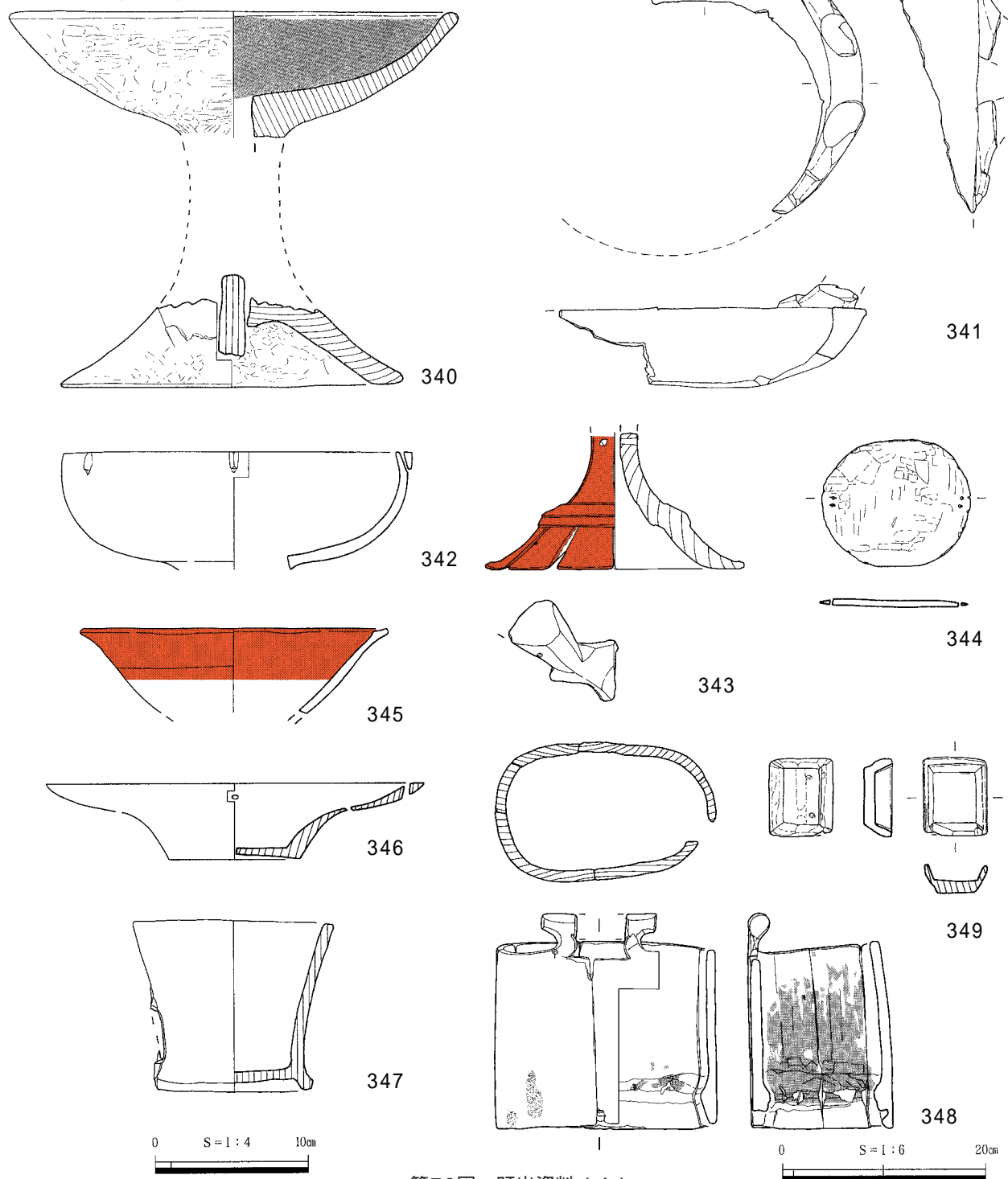
挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
331	容器脚	国道3区	SD11	弥生後期～古墳前期	長21.1,幅2.2,厚2.2	心持材	イヌガヤ	赤彩	10640
332	容器脚	県道8区	SD54	弥生後期	長20.7,幅2.2,裝飾部長10.1	心持材	カヤ	:304図355 赤彩	34698
333	容器脚	国道4区	SD38-2	弥生後期	高19.4,幅2.3,厚1.4	心去材	イヌガヤ	片面炭化	18047
334	容器脚	県道7区	J層	弥生中期	長20.0,幅2.7,装着部長16.1,上端快り長1.1	心去材	アスナロ属	:304図359	36615
335	容器脚	県道7区	J層	弥生中期	長20.6,幅2.8,装着部長16.8,上端快り長0.6	心去材	アスナロ属	:304図361	36622
336	容器脚	県道7区	J層	弥生中期	長20.3,幅3.0,装着部長16.5,上端快り長0.4	心去材	アスナロ属	:304図360	36631
337	容器脚	県道7区	H層	弥生後期	長(9.9),幅2.7,裝飾部長(3.6)	心去材	イヌガヤ	:304図356 赤彩	42057
338	その他容器	県道7区	K層	弥生中期	高 2.0	横木取り	ヤマグワ	:307図366	36772
339	その他容器	国道3区	I層相当	弥生中期	高3.2,底径8.8×8.2,脚高1.9,種装着部長2.2,幅0.2	横木取り	ヤマグワ	:307図367	13295

(12) 既出資料 340~367

発掘調査報告書に掲載された資料である。

S=1/4 : 340~347、350~352

S=1/6 : 348、349、353~367

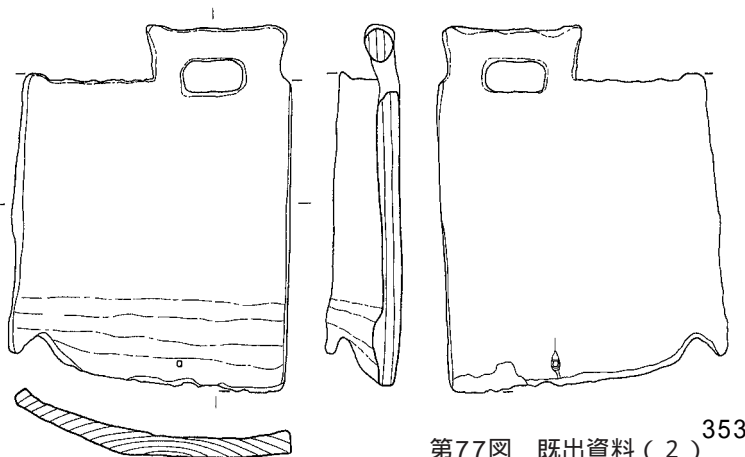
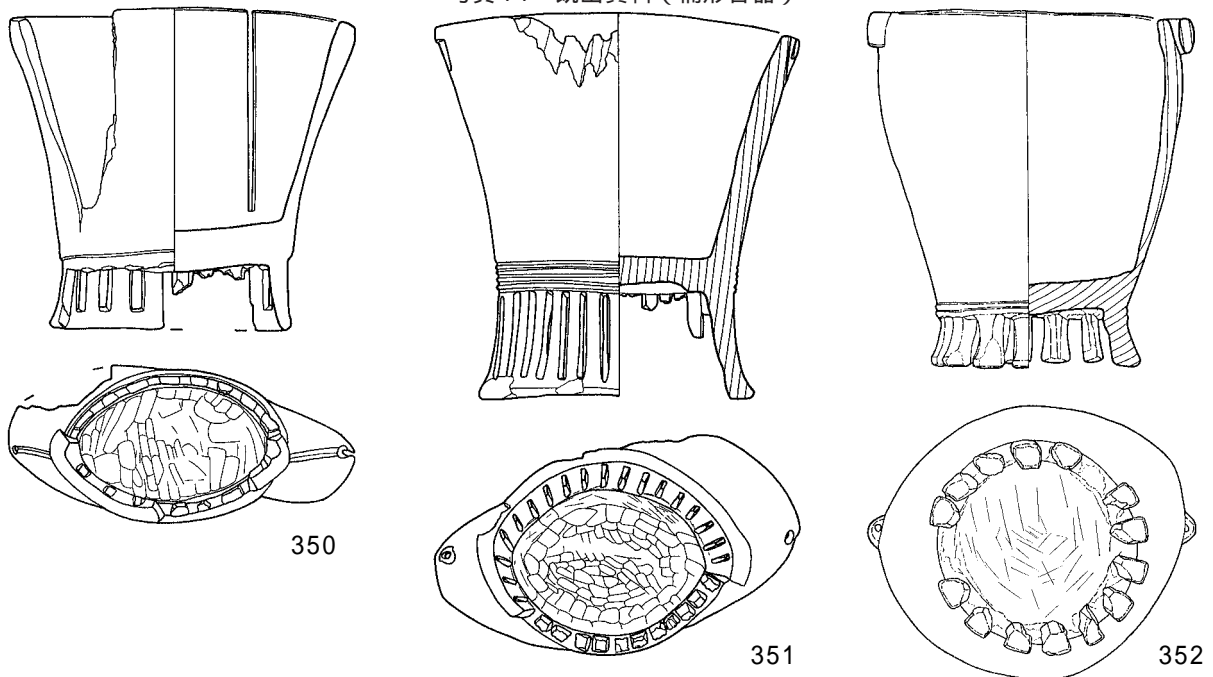


第76図 既出資料(1)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
340	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 4.2, 口径 26.5	横木取り	サカキ	内面黒彩	30093
341	高杯	県道3区	SD20	弥生後期	高 6.7, 幅(22.0), 厚0.4	横木取り	ヤマグワ	:291図286	21326
342	高杯	県道7区	J層	弥生中期	高 7.8, 幅(22.9), 厚0.7	横木取り	ヤマグワ	:295図302	42461
343	高杯	県道4区	SD11	弥生後期	高 8.9, 幅 5.1, 厚1.8	横木取り	ヤマグワ	:289図277 赤彩	4459
344	蓋	県道7区	不明	不明	幅9.7×8.3, 厚0.4	柱目		:301図339	44662
345	高杯	県道8区	SD38	弥生後期	高 5.7, 幅(20.6)	横木取り	ヤマグワ	:292図291 赤彩	33376
346	椀・杯形容器	県道7区	SD27	弥生中期	口径(24.8), 高(5.0), 底径(8.6), 身深4.3, 厚0.5-	横木取り	ヤマグワ	:285図246	42315
347	椀・杯形容器	国道2区	層	弥生中期~古墳前期	口径13.1, 底径10.2, 高11.4		ヤマグワ	:145図92	6098
348	桶	国道1区	木器溜	弥生後期	高18.7, 幅22.2	縦木取り	サワラ	:149図117 内面黒彩	4930
349	槽・盤類	県道7区	不明	不明	長7.8, 高2.9, 幅6.3, 厚1.2	横木取り	スギ	:296図305	44911

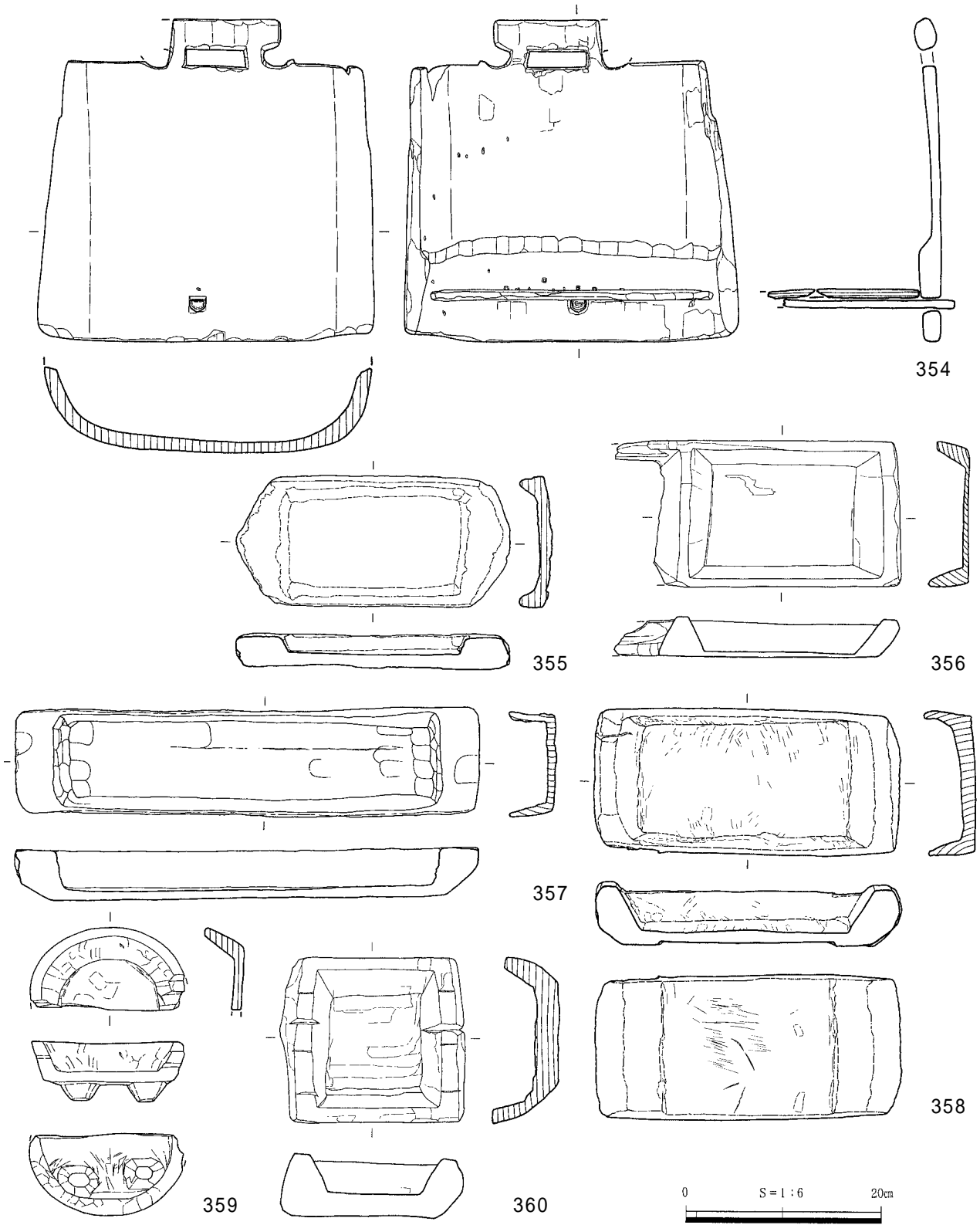


写真44 既出資料(桶形容器)



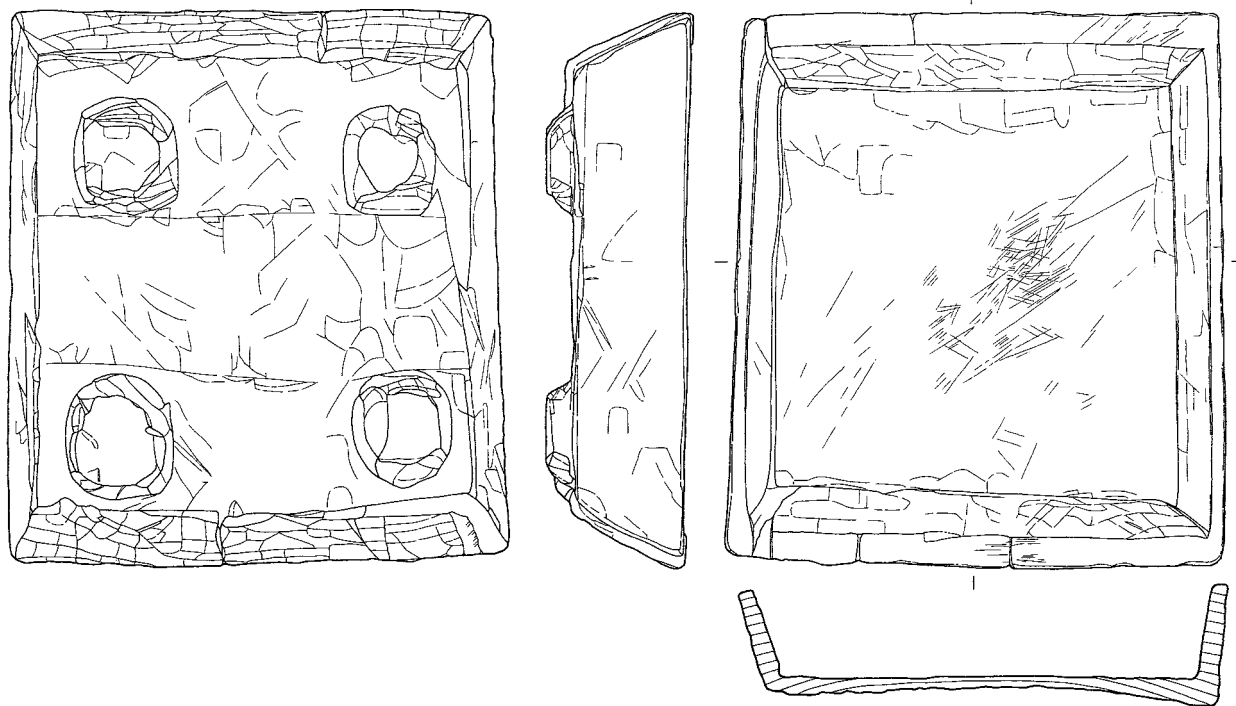
第77図 既出資料(2) 353

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
350	桶形容器	国道2区	層	弥生中期～古墳前期	口径19.2×10.3底径14.5×10.9高20.3	縦木取り	ヤマグワ	:145図89	6255
351	桶形容器	国道2区	1層	弥生前期～中期	口径18.4×7.5底径12.7×7.8高17.1	縦木取り	ヤマグワ	:145図90	6660
352	桶形容器	県道7区	J層	弥生中期	口径17.3×14.4高18.9脚高3.4, 身深14.5厚0.9～底径11.0	縦木取り	ヤマグワ	:287図268	36961
353	桶	国道1区	木器溜2	弥生後期	高2.9	縦木取り	スギ	:149図115	5852

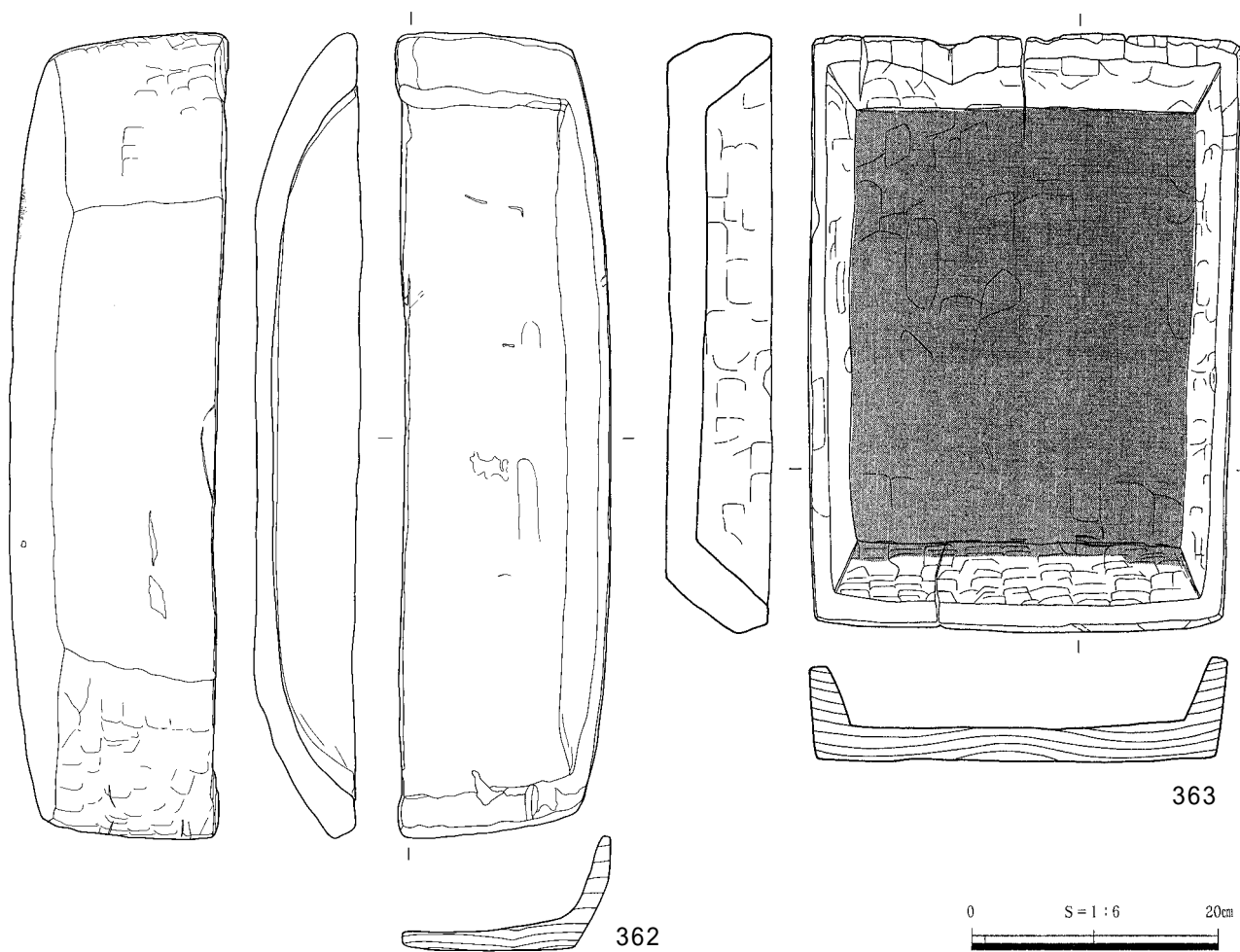


第78図 既出資料(3)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
354	桶	国道4区	b層	弥生後期	高33.8,長径34.0	縦木取り	スギ	:149図114	17258
355	槽・盤類	県道8区	SD69	弥生後期～古墳前期	長28.4,高3.7,幅13.5	横木取り	スギ	:296図311	27702
356	槽・盤類	県道7区	l層	弥生中期	長29.6,高4.1,幅15.1	横木取り	スギ	:296図308	42106
357	槽・盤類	国道2区	1層	弥生前期～中期	長47.6,高4.9,幅11.3	横木取り		:150図124	7159
358	槽・盤類	県道7区	J層	弥生中期	長31.8,高6.5,幅15.0	横木取り	スギ	:296図307	36531
359	槽・盤類	県道8区	SD69	弥生後期～古墳前期	長15.8,高6.0,幅(8.4)	横木取り	アスナロ属	:297図312	27735
360	槽・盤類	県道7区	J層	弥生中期	長19.1,高6.5,幅17.2	横木取り	スギ	:296図306	42371



361

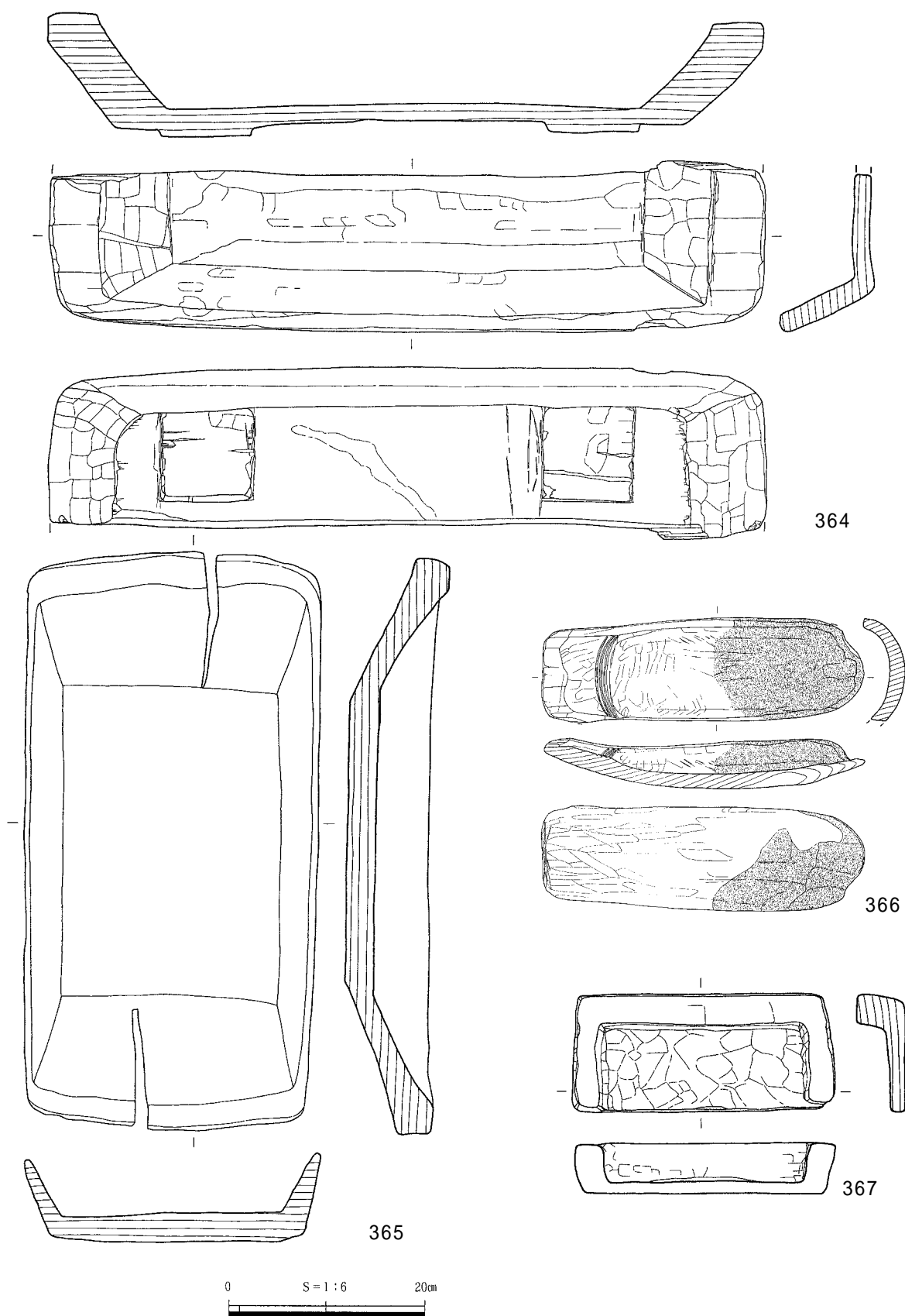


362

363

第79図 既出資料(4)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
361	槽・盤類	国道2区	SD11	弥生前期～中期	長39.7,幅44.2,厚2.6	横木取り	スギ	:150図121	7063
362	槽・盤類	県道7区	L層	弥生中期	長67.4,幅 17.1,厚4.1	横木取り	スギ		36835
363	槽・盤類	国道2区	2層	弥生前期～中期	長49.1,高8.6,幅35.5	横木取り	スギ	:150図126 内面黒彩	6446



第80図 既出資料(5)

挿図番号	器種	調査区	遺構・層位	時期	法量(cm)	木取り	樹種	備考	取上番号
364	槽・盤類	国道3区	SD27	弥生中期	長73.4,幅12.4,厚1.8	横木取り		:151図128	14042
365	槽・盤類	国道2区	層	弥生中期～古墳前期	長59.5,高8.5,幅30.5,厚3.0	横木取り	スギ	:151図127	6951
366	槽・盤類	国道4区	b	弥生中期	長32.8,幅10.6	横木取り	スギ	:147図103 炭化	18407
367	槽・盤類	国道2区	1層	弥生前期～中期	長26.8,高5.1,幅12.2,厚1.3	横木取り		:150図123	6821

第3節 青谷上寺地遺跡出土木製容器の特性
【時期的変遷と器種組成】

これまで出土した木製品を層位から時期ごとに分けると、弥生時代後期の出土量が非常に多い。それには集落の変遷や、有機物が残りやすい埋蔵環境など様々な要因が関係していたであろう。

第81図は青谷上寺地遺跡出土木製容器の統計データである。破片資料のため解釈には注意が必要であるが、総数1030点のうち最も数量が多いのは槽・盤類（162点）で、次いで桶（151点）および底板（139点）、高杯（138点）、蓋（102点）、椀・杯形容器（78点）と続く。

槽・盤類、桶の数量が多いのは、元来大型製品であり、廃棄時の破片数が多くなること、大きい破片は残存しやすいことなどが影響していると思われる。槽・盤類の場合、破片資料の中で接合する可能性があるが、桶の場合は底板の数量が個体数として類推できるため、桶が最も多くなることは確実であろう。

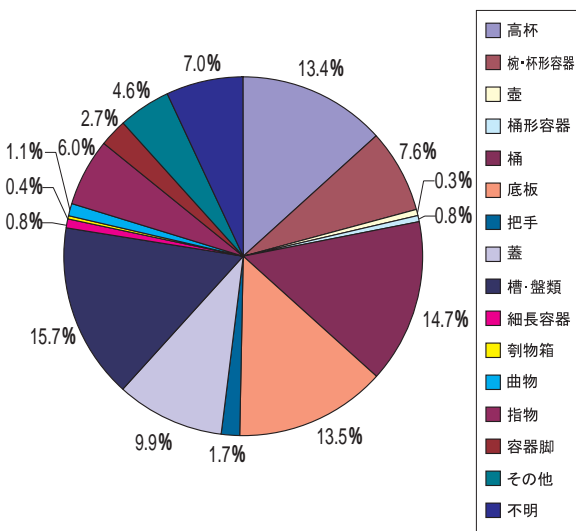
弥生時代中期に属する資料数は、いずれの器種でも出土量のばらつきが小さいのに対し、後期では量が増加する器種（高杯、桶、壺、容器脚など）と減少する器種（桶形容器、削物箱、指物）があり、時期別の器種組成を考える上で重要である（第82図）。高杯脚部 や桶形容器は中期に隆盛し、高杯杯部 や壺などは後期に隆

盛して、青谷上寺地遺跡の特徴的組成となっている。

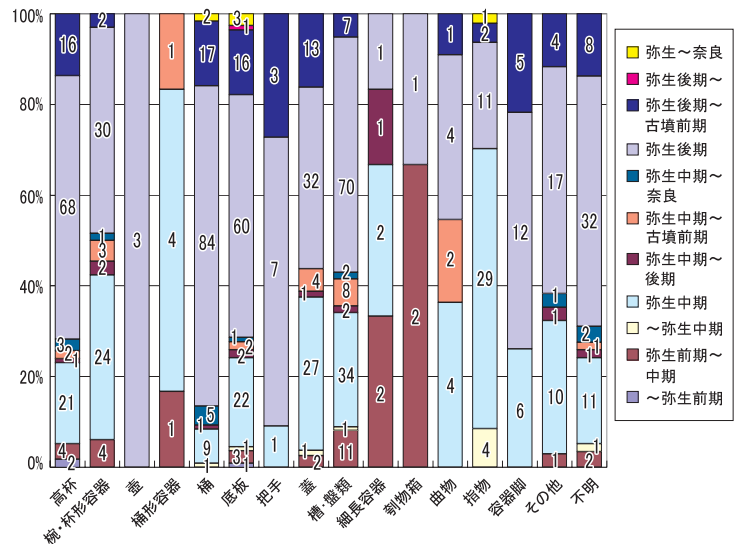
【木製容器と土器】

高杯杯部 の形態は、木器・土器のどちらにも存在し、青谷上寺地遺跡での出土量では土器が上回っているが、埋蔵環境とも関わるため必ずしも実態とは言い切れない。しかし、山陰東部では土製高杯の出土量が少ないとの指摘〔高橋1991、平井1992〕や、近畿では弥生時代前期から木製高杯が生産され、弥生時代中期には土器と木製容器でほぼ同様の形態をしていることから〔樋上2002〕高杯は木製容器が元来主体であった可能性もある。近畿では土製高杯が弥生時代後期に至って盛行していくのに対し、青谷上寺地遺跡の場合は後期の段階では土器では全く見られない器形（高杯脚部 や高杯杯部（花卉状装飾）、飾り耳の付帯など）に変化し、精製品として優れたものを生み出している。

弥生時代中期に見られる桶形容器の器形および装飾は土器ではほとんど見られない。可能性のあるものとしては鳥取県会見町宮尾遺跡、鳥取県米子市目久美遺跡、兵庫県姫路市和久遺跡から出土の高杯形とされている土器がこの形態に近い〔会見町1982、米子市1986、姫路市2003〕。これらは平面が円形で、木製容器のような舟形ではないが、姫路市和久遺跡例では口縁部に穿孔があり、桶形容器と関連するものと考えられ



第81図 器種組成グラフ



第82図 器種別出土時期グラフ

る。時期的には土器の方がやや古く中期前葉ごろから出現しているが、その初源をどちらに求めるかは今のところ決し難い。

【製作技法】

製作技法としては挽物の検討を十分にしないてはならないが、現時点では青谷上寺地遺跡で挽物の可能性のあるものは、高杯杯部（水平口縁）の一部だけである。石川県金沢市西念・南新保遺跡出土高杯（本書の高杯杯部にあたる）は工楽善通によって挽物と断定されているが〔工楽1989〕、青谷上寺地遺跡の高杯杯部には轆轤を使用するときに見える同心円状の加工痕は全く認められず、平面形も正円とは言えないため、挽物ではない。

挽物の可能性のある2点の高杯杯部（第5図2、第6図6）は弥生時代中期に属しており、杯部が後期から出現すること、他の器種で挽物の可能性のある資料が今のところ発見されていないことから言って、挽物技術が現れてすぐ消えるということは想定しにくい。搬入品の可能性を視野に入れるべきであろう。

製作技術でもう一つ重要なことは、一木で作るものと、組合せて作るものがあるという点である。求められる容器の大きさにも因らうが、例えば高杯のような杓を用いる方式、桶のような底板を目釘で留める方式、指物のように樹皮紐で板同士をつなげる方式など様々な組合せ技

術が存在する。一木式では容器の大きさに限界が生じるが、組合せ技術が高まったことによって、少ない材でより大きな容積を得る、材の有効活用が可能になったと考えられる。また杓のような技術は、建築での継手・仕口の発達に大きな影響を受けていると思われる。さらに目釘や樹皮紐用の穿孔技術は、鉄器の普及に大きく関わっていると考えられる。

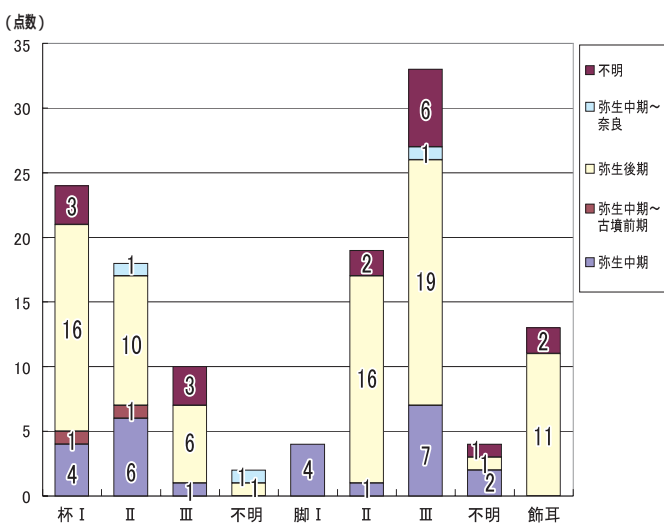
【高杯】

青谷上寺地遺跡の木製高杯の特徴は、石川県以外では初となる6葉の杯部（花卉状装飾）の出土と、弥生時代中期より後期の出土量の増加にある（第83図）。

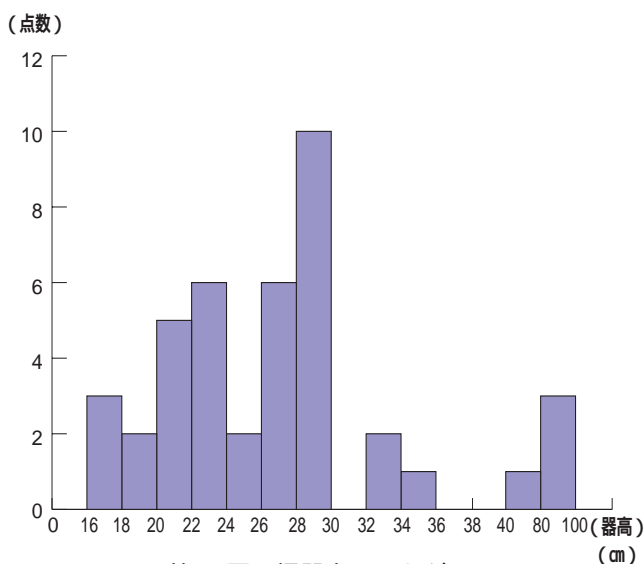
山陰東部では弥生時代中期よりも後期の方が土製高杯は減少傾向を示すことは先に触れたが、青谷上寺地遺跡の遺物出土量から考えると、それを補完しているように思われる。

中期に多い杯部では、水平口縁の大きさ・付帯位置によっておよそ形態の変化が追える。対応する脚部は、完形（第6図9）のほか、脚柱部の突帯の有無から、脚部が該当すると考えられる。第12図28では杯部の特徴である扁平な杯底部内面まで残存しており、その証拠と言える。

後期に1点ではあるが杯部と脚部の形態を持つ高杯が存在する（第6図10）。一木式で、杯部に対応する脚部（参照：第8図15）とほ



第83図 高杯時期別グラフ



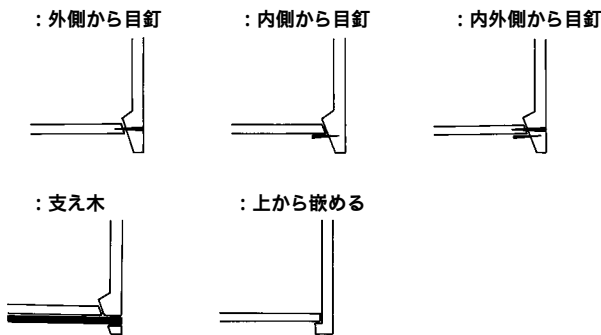
第84図 桶器高ヒストグラム

ば同様の形態であることから、形態的に杯部と杯部の間に位置するものと言える。杯部と杯部では出土層位、形態の時期的特徴から、杯部へ変化したと見てよいだろう。

【割物桶】

青谷上寺地遺跡において、割物桶は現在までに151点と非常に多く出土している木製容器の一つである。形態的には第2節で述べた分類のとおりとなり、樹心を外して筒状に割りぬいた身と、円形または小判形の底板を組み合わせて製作されている。それぞれの器種で、器高の規格性を調べたのが第84図のグラフである。これを見る限り、40cm以上の大型桶が確実にグループを作るほか、20cm未満と20～30cmほどの大きさでグループ分けができ、大・中・小の規格性を意図していたと考えられる。今後、用途との関わりの中で検討していかなければならないだろう。桶は器形以外に、底板の装着方法にも何種類が存在し、この部分にも注目する必要がある。装着方法は次の5つに分類することができる^(註3)。すなわち、Ⅰ：(底板を桶の下から入れて)外側から目釘を打ち込んで固定するもの、Ⅱ：身の内側から目釘を打ち込んで底板を支えるもの、Ⅲ：外側と内側両方に目釘を打ち込んで固定するもの、Ⅳ：桶底部に方形の穿孔をして支え木を通し、底板を受けるもの、Ⅴ：底板を上から嵌めるもの、である(第85図)。これらを各分類

～：筒状に割りぬいた胴部に、底板を下から嵌めこみ、目釘もしくは支え木を用いて固定する。
 ～：筒状に割りぬいた胴部の上から底板を嵌めこむ。



第85図 桶底の分類

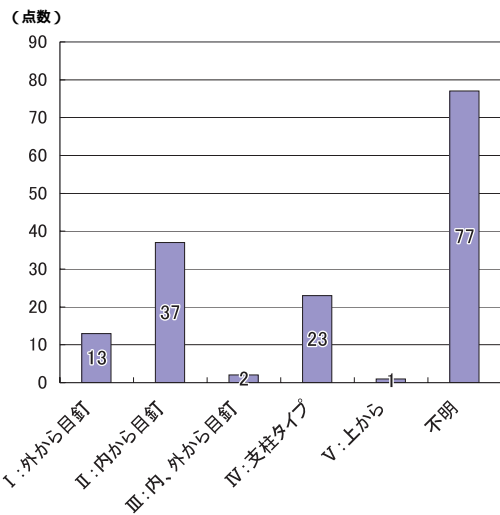
で集計すると、第86図のグラフとなる。これに出土層位による時期的検討を加えて考慮すると、

- ・支え木を使用するのは桶Ⅳと、桶Ⅴ・桶Ⅵの一部であり、大型品ほど占める割合が高い。
- ・底部が肥厚しないタイプ(桶Ⅰ、桶Ⅱ)は外側から目釘を打つものが多い。
- ・弥生時代中期においては、外側から目釘を打ち込むものも多く、後期では内側から打ち込むものが多い。

ということが言える。

【樹種と器種】

第1節で示したように、木はそれぞれ性質が異なる。例えば大径木となって加工し易いスギは、割物桶を始め、槽・盤類などの大型容器で圧倒的な比率を占める(第87図)。それに対して、高杯や椀・杯形容器などの彩色が施されるような精製品や小型容器ではヤマグワが大半を占め、ケヤキ・カヤなどが次いでいる。青谷上寺地遺跡出土木製容器の樹種統計はスギとヤマグワが主であり、青谷上寺地遺跡の特性と言えよう。さらに未製品や鑿・ヤリガンナなどの鉄製工具の出土により、在地で製作された蓋然性は高い。組合せ式高杯には雇い柄が利用されているものがあり、これには一つの樹種で製作される例のほか、スギ・アスナ口属・サカキなどが用いられることがあり、別材を使用することの意味を考えなければならないだろう。装着のための工



第86図 桶底集計グラフ

夫（ひずみの度合い）が施されているのであろうが、様々な角度から検討する必要がある。

漆塗文様のある壺・蓋はそれぞれサクラ属・モクレン属で、同じく漆塗文様のある曲物底部はモクレン属である。サクラ属・モクレン属ともに散孔材であり、肌目が細かい。またモクレン属は軽くて柔らかいため、加工・細工し易い。ヤマグワやケヤキなどは環孔材で、木目の美しい材だが、表面に文様を塗り描くにはその美しい木目が却って邪魔となる。そのため文様を描くきれいな下地を得るために肌目の細かいモクレン属などが選択されていたと考えられる。ただし、現在までの本遺跡でのモクレン属の出土量では一本の木で作られたとしてもあまりにも少ない。壺の器形・装飾は土器にも存在する山陰特有のもので、在地での製作の可能性が極めて高いが、材の入手自体に関しては他地域からの搬入も視野に入れておく必要がある。

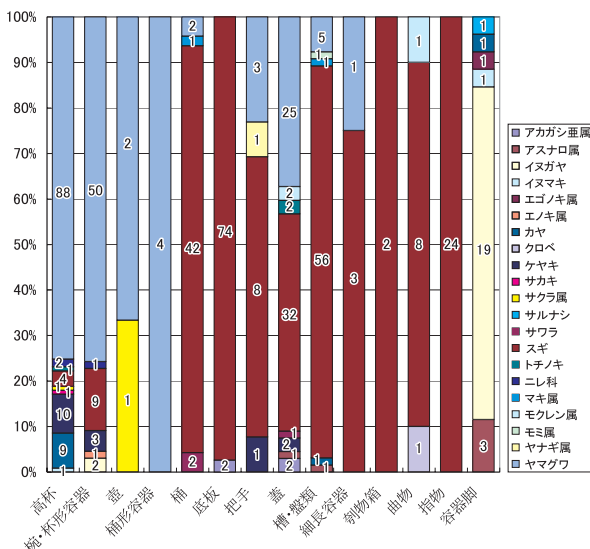
容器脚はイヌガヤが多く、カヤやアスナロ属など肌目の細かい材を使用している。多くは心持材を使用し、同径材を得るために一本の材を3・4等分に切り分けたものと考えられる。イヌガヤは弾力性があり、容器本体に斜めに装着することによって容器にかかる重量をうまく分散させるという特性を利用しているものと思われる。

【木取りと器種】

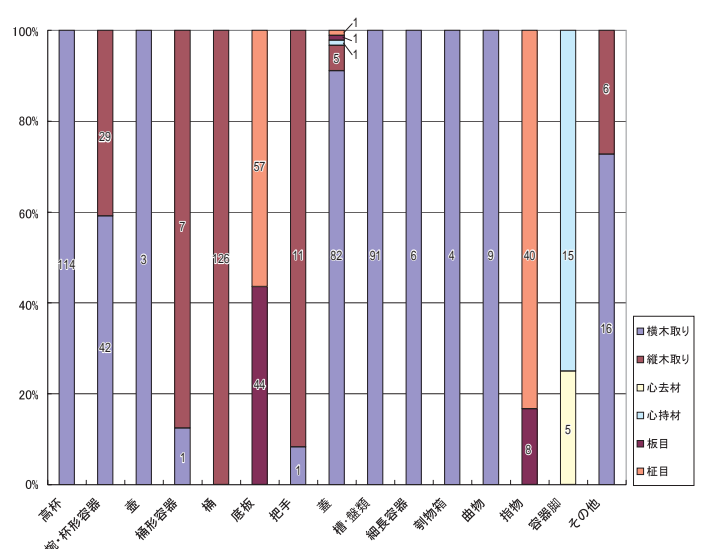
各器種と木取りの集計を第88図にまとめた。これまで見てきたとおり、器種（細分類）ごとに木取りはほぼ統一されている。高杯、槽・盤類、蓋などは横木取りであり、桶形容器、桶は縦木取りである。概して口が広く、浅いものは横木取り、口がやや狭く、深いものは縦木取りという傾向がある。例えば槽・盤類のような大型製品を縦木取りするにはかなりの大径木が必要となるし、桶を横木取りする場合も同様に大径木が必要となり、現実にはそのような木取りのものは出土しておらず、木取りが意図的に行われてきたことが分かる。

底板や指物などの板材では、柱目材と板目材の双方がほぼ同じ割合で出現している。一般的に柱目は乾燥による収縮が少なく、板目のように反り返ることがない。現代木工の指物箱などの組合せを伴うものにはひずみの少ない柱目がよく選ばれるが、この第88図を見る限りではそのような特化は見られない。

椀・杯形容器で括った一群は縦木取り・横木取りどちらも包含するため、製作意図としてさらに細分できる可能性がある。今後の資料増加や他の研究成果を元に、椀・杯形容器の細分類には再検討をする必要がある。



第87図 器種別樹種統計グラフ



第88図 器種別木取り統計グラフ

第4節 他地域との比較

青谷上寺地遺跡出土木製容器の中で特徴的なものは高杯と桶である。この2種を柱に、各地域との比較検討をしていくこととする。

(1) 高杯

第3節で述べたように、高杯の特徴は杯部と脚部の形態である。このうち杯部とした水平口縁高杯は、奈良県唐古遺跡を始めとして各地に出土例がある。代表的な出土遺跡として、島根県松江市タテチヨウ遺跡、西川津遺跡、大阪府東大阪市鬼虎川遺跡、瓜生堂遺跡、和泉市池上曾根遺跡、石川県小松市八日市地方遺跡、愛知県朝日遺跡などがあり、西日本に広く分布している。時期的には唐古遺跡が弥生時代前期と古い他、概ね中期に該当している。

杯部の出土例は石川県金沢市西念・南新保遺跡例が以前から知られていたほか、石川県小松市白江念仏堂遺跡、白江梯川遺跡など石川県での出土が多く、いずれも6葉のもので挽物とされるものが多い。近年では島根県松江市西川津遺跡で杯部と思われる出土例が報告されており〔島根県2003〕、また第8図12と同様の4葉のものが島根県出雲市姫原西遺跡で出土している。分布域としては北陸から山陰にかけての日本海沿岸である。ただし青谷上寺地遺跡例はヤマグワ製が多いのに比べ、北陸地方ではケヤキ製が多く、挽物の可能性が高いという点で異なり、北陸と山陰の間で高杯そのものが流通した可能性は低い。また細部の観察では、花弁状装飾の溝断面が西念例では平坦面を作るのに対し、青谷例はいずれもV字状を呈している。また北陸のものは口縁部が段を呈しており、モチーフとしての花弁状装飾の初源を北陸と山陰どちらに求めるかは今後の検討課題である。

山陰においては、先に述べたように姫原西遺跡で4葉のものが出土しており、樹種がカヤという点や一木式であること、横木取りで飾り耳が付く点など第8図12との類似性が高く、青谷と出雲という山陰地域内では流通していた可能性がある。

脚部は青谷上寺地遺跡以外ではほとんど出土していない。現在までのところ唯一の出土例は石川県金沢市戸水B遺跡例である〔石川県2004〕。横木取りで、4方向に透かしが入り、脚柱部に突帯が設けられる点は青谷例と同様である。ただし、底部下面に円柱形の突起が10個付き、樹種がサクラ属という点では青谷例と異なり、製作地が違う(在地?)可能性がある。

前述のように、脚部は杯部と相応するため北陸での出土例は多いが、その他地域での出土例は極めて少ない。福岡県福岡市比恵遺跡出土例は分割された脚と段の形状から脚部と断定できる。外面は赤漆(水銀朱)が塗布され、横木取りである。復元した場合12個の脚となる可能性が高く、脚柱部に溝が延長すれば杯部が上部に付くことも考えられる。

このように見ると、杯部は近畿地方で弥生時代前期から見られ、中期には西日本各地で出現する。青谷上寺地遺跡で中期から後期に属する脚部は、他遺跡では戸水B遺跡しか出土しておらず、今のところ青谷上寺地遺跡で発達した形態と言える。後期に至り、第6図10のような杯部+脚部の形態の高杯が出現し、杯部の形態が新たに北陸・山陰で隆盛する。初源は不明だが、今のところ分布域は日本海沿岸に限定される。

(2) 割物桶

円筒状に割りぬいた体部に底板を嵌めこむ割物桶は、山陰・北陸で特に多く出土しているが、近畿から九州まで出土例は存在する。

桶のような把手や桶のような紐孔突起が付くものは分類可能だが、出土例は分類不能な破片資料が大半である。桶・を区分なく見ていくと、山陰では島根県松江市の西川津遺跡、タテチヨウ遺跡、出雲市姫原西遺跡、大社町五反配遺跡など島根県での出土例が群を抜いている。また鳥取県内でも、鳥取市桂見遺跡や米子市池ノ内遺跡、吉谷中馬場山遺跡などで出土しており、近傍では山口県阿東町宮ヶ久保遺跡でも1点出土し、山陰地方を中心に広く分布してい

ることが分かる。

北陸においては、石川県金沢市西念・南新保遺跡、小松市八日市地方遺跡をはじめとした石川県での出土例が非常に多いほか、富山県上市町江上A遺跡、氷見市惣領浦之前遺跡、小杉町針原東遺跡、下村加茂遺跡、福井県三方町田名遺跡で出土している。近畿地方では滋賀県大津市滋賀里遺跡、京都府峰山町古殿遺跡、京都市深草坊町遺跡、大阪府茨木市溝咋遺跡、八尾市久宝寺遺跡、兵庫県篠山市上板井遺跡での出土例があり、溝咋遺跡・久宝寺遺跡出土割物桶は搬入品と考えられている〔黒須2004〕九州でも若干出土例があり、福岡県北九州市金山遺跡、春日市辻田遺跡出土例が割物桶と考えられる。

出土量と分布地域を見ると、高杯に比べて非常に多く、かつ広く出土していることが分かる。高杯は土製・木製双方が存在するが、土製の桶は今のところ出土例がない。生活に必要とされるもので、木以外の材料では代替品が作成できないことは、用途を考える上で重要なポイントと考えられよう。

青谷上寺地遺跡での桶・は今のところ他遺跡で出土例がなく、本遺跡での出土量も少ないことから在地で一時的に生産されたものと考えられる。

割物桶はおよそ弥生時代中期ごろから山陰・北陸で出現し始め、後期には底部が肥厚する筒形に定型化してくる。底板の固定方法は、大型のものは支え木を使用し、小型・中型は目釘で留めるものが多いのも各地一様である。

(3) 桶形容器

平面および正面の形状、分割された脚部、口縁部両端の穿孔、縦木取りという点で青谷例と最も類似しているのが、石川県小松市八日市地方遺跡出土例、島根県出雲市海上遺跡出土例である。八日市地方遺跡例は、脚端部の分割(4分割)とケヤキ製という点では青谷例とは異なり、在地での製作が考えられる。海上遺跡例は底部以下が破損しているため詳細は不明だが、青谷例と同様透かし孔を幾つも設けており、樹種も

クワ属(クワ科)ということから青谷例と非常に近い存在と考えられる。八日市地方遺跡ではこの他にも桶形容器に類似すると思われる「台付容器」が出土しており、平面は長辺がやや膨らむ長方形で、底部に透かしのある脚が付くもので、底部も扁平に仕上げられ、「桶形容器」との類似性が認められる。ここで出土したものはヤマグワ製であり、木取りは確認できないが、「桶形容器」との関連が深いと考えてよいだろう。

(4) その他

椀・杯形容器(コップ形容器)も青谷上寺地遺跡を代表する木製容器であるが、やはりこれも山陰・北陸地方で出土例が多い。鳥取県米子市目久美遺跡、島根県松江市西川津遺跡、布田遺跡、出雲市海上遺跡、石川県小松市八日市地方遺跡、広島県大朝町横路遺跡などが挙げられる。横路遺跡例はマツの瘤を利用したものでやや異質であるが、他は底部を砲弾形の尖底にし、縦木取りで、(樹種同定が済んでいるものは少ないが)広葉樹製という点でいずれも共通している。時期は弥生時代前期から出土しているが、中期が最も多い。また韓国光州市新昌洞遺跡で類似した形状の容器が出土しており〔国立光州博物館1997〕今後は韓国での出土例も視野に入れ、環日本海地域での検討が必要となろう。

以上、木製容器について青谷上寺地遺跡と他地域との共通性・類似性に焦点を当て、検討を行った。木製容器各器種でそれぞれ傾向が若干異なるが、概ね北陸・山陰を中心とした日本海沿岸地域に青谷上寺地遺跡出土木製容器との共通性が見出された。分布域も各器種ごとに時期的な相違があり、今後の資料数の増加と観察結果(形態、樹種、木取り)によっては地域性と時期的変遷をより明らかにすることが可能となろう。

第5節 まとめと課題

本章では青谷上寺地遺跡出土木製容器の器種分類と、木取り・樹種などの属性情報から青谷上寺地遺跡出土木製容器の特性をまとめ、他地域との比較検討の中からその親縁性を北陸から山陰にかけての日本海沿岸地域に読み取った。特に高杯、桶に関しては、青谷での出土量と他遺跡での出土例との関係から、青谷上寺地遺跡の特性（器形の変遷）を追うことができた。今後は他遺跡出土例の研究成果を加えながら、遺物編年の充実を図っていきたい。

本論では、木製容器に関する民俗研究、現代の木工職人、漆職人に触れることができなかった。例えば、石川県では山中漆器、輪島塗など木工と漆芸技術が今も工芸技術として有名であり、木地屋と呼ばれる漆器の素地を作る職人と漆塗職人の分業体制となっている。木地屋はかつて良質の木材を求めて広範囲に移動を繰り返して全国の山々を転々としていたという〔森本2004〕、日本海沿岸で見られるこのような木製容器の共通性が、このような木地屋（集団）によってもたらされたとしたら、各地で製作されながらも相互に形態的類似性が生じることも想像に難くない。社会の階層化が進む弥生時代社会を研究する上で重要な要素となるだろう。

今後の課題としては、加工痕・使用痕の微細構造を観察することによって、製作技法・使用法をより正確に把握すること、またそれに関連して現在の木工技法の検討をすることである。製作技法の検討は木製容器だけでなくその加工具である鉄器・石器にも関わることであり、「もの作り」という青谷上寺地遺跡出土品調査研究のキーワードに深く関連する。材を知り尽くし、指物に代表される組合せ技術は現代まで引き継がれ、「木の文化」を大切に日本人にとって身近で重要な「もの」といえよう。

また、もう一つのキーワードである「交流」に関しては、木製容器出土量の多い島根県と石川県での出土例との比較研究を深化させ、日本海沿岸地域での（木製容器）編年体系、樹種や

木取り等から各地域での特性をさらに検討していくことが重要となろう。また韓国でもここ数年低湿地の遺跡が発掘されており、土器などとともに木製容器もその比較検討材料とすることが可能となろう。

参考文献

会見町教育委員会

1982 『宮尾遺跡天万遺跡発掘調査報告書』

飯塚武司

1999a 「東日本における古墳出現期の木工集団（上）」『古代文化』第51巻第5号

1999b 「東日本における古墳出現期の木工生産」『古代文化』第49巻第4号

2003 「弥生時代中期後半の南関東における木工生産」『考古学研究』第49巻第4号

(財)石川県埋蔵文化財センター

2004 『八日市地方遺跡』

2004 『戸水B遺跡』

石川ゆずは

2004 「惣領浦之前遺跡出土の木製品について」『富山考古学研究』紀要第7号（財）富山県文化振興財団

稲本正

1994 『森の博物館』 小学館

出雲市教育委員会

2000 『出雲市民病院移転予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 海上遺跡』

金沢市教育委員会

1983 『西念・南新保遺跡』

1989 『西念・南新保遺跡』

1992 『西念・南新保遺跡』

木内武男

1996 『木工の鑑賞基礎知識』 至文堂

工業善通

1989 「木製高杯の復元」『古代史復元5 弥生人の造形』 講談社

黒須亜希子

2004 「溝咋遺跡出土木製品に関する再考察」『大阪文化財研究』第26号(財)大阪府文化財センター

小松市教育委員会

1998 『猫橋遺跡』

2003 『八日市地方遺跡』

佐原真・金関恕編

1981 『古代史発掘4 弥生時代1 稲作の始まり』 講談社

島根県埋蔵文化財調査センター

1979 『タテチョウ遺跡』

1980 『西川津遺跡』

- 1982 『西川津遺跡』
- 1987 『タテチヨウ遺跡』
- 1987 『西川津遺跡』
- 1999 『姫原西遺跡』
- 2003 『西川津遺跡』
- 2004 『五反配遺跡』
- 高橋 護**
- 1991 「土師器の編年 - 中国・四国 - 」『古墳時代の研究』 6 雄山閣
- (財)鳥取県教育文化財団**
- 1996 『桂見遺跡』
- 2000 『青谷上寺地遺跡1』
- 2000 『青谷上寺地遺跡2』
- 2001 『青谷上寺地遺跡3』
- 2002 『青谷上寺地遺跡4』
- 2003 『吉谷上馬場山遺跡』
- 鳥取市教育委員会**
- 1984 『岩吉遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター**
- 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町木製品・総括編』
- 奈良国立文化財研究所**
- 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』解説編
- 成田寿一郎**
- 1996 『木工挽物』 理工学社
- (財)東大阪市文化財協会**
- 1987 『鬼虎川の木質遺物 第7次発掘調査報告書 第4冊』
- 樋上昇**
- 2002 「「生活の道具」と「王の所持品」～木製品からみた生産と流通～」一宮市博物館編 『14年度秋季特別展 川から海へ1～人が動く・モノが運ばれる～』
- 姫路市教育委員会**
- 2002 『TSUBOHORI 平成13年度 姫路市埋蔵文化財調査概報』
- 兵庫県教育委員会**
- 2000 『袴狭遺跡』
- 平井典子**
- 1992 「弥生土器からみた備前・備中南部とその周辺 - 中期中葉から後期前半を中心として - 」『吉備の考古学的研究(上)』山川出版社
- 布留遺跡天理教発掘調査団**
- 1981 『出土木器の樹種と木取り』
- 古野毅・澤辺攻編**
- 1994 『木材科学講座2 組織と材質』 海青社
- 埋蔵文化財研究会**
- 1996 『第39回埋蔵文化財研究集会 古代の木製食器 弥生期から平安期にかけての木製食器』
- 町田章**
- 1985 「9容器 2.木製容器」佐原真・金関忍編 『弥生文化の研究』5 雄山閣
- 三重県埋蔵文化財センター**
- 2000 『六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)』
- 森本仙介**
- 2004 「吉野における木地屋の終焉をめぐって」奈良県立民俗博物館 『民俗博物館だより』Vol.30 No.3・4合併号
- 山田昌久編**
- 2000 『考古資料大観8 木・繊維製品』 小学館
- 米子市教育委員会**
- 1986 『目久美遺跡』
- 1986 『池ノ内遺跡』
- 国立光州博物館**
- 1997 『光州新昌洞低湿地遺跡』
- 註
- (1) 指物技術上の用語 [奈良1994]
- (2) 工楽善通1989「木製高杯の復元」による。弥生時代の挽物技術については成田寿一郎による反論もある。 [成田1996]
- (3) 高垣陽子 2003「考古学研究会9月例会発表資料」による。

	高 杯	椀・杯形容器	桶形容器	
弥生前期 末 中期	6図3 5図1 5図2 6図4 6図10	6図9 12図28 11図27 10図26 12図29	20図84 23図102 20図79 19図66 20図68 20図78 23図103 23図100 23図101	77図351 24図105 77図352
	8図12 8図14 8図13 8図15	10図23 14図42 13図34 8図15	22図93 22図96 22図95 22図92 21図85 20図69 22図98	23図99 25図108 26図110
				壺

表3 木製容器編年表(1)

桶	底板・把手	
<p>28図113</p> <p>28図114</p> <p>31図127</p> <p>31図126</p>	<p>42図174</p> <p>41図170</p>	<p>弥生前期末 中期</p>
<p>27図111</p> <p>28図112</p> <p>29図118</p> <p>30図119</p> <p>31図125</p> <p>32図128</p> <p>32図129</p> <p>33図130</p> <p>34図131</p> <p>35図137</p>	<p>43図183</p> <p>44図188</p> <p>44図189</p> <p>42図181</p> <p>44図188</p> <p>44図191</p>	<p>後期 古墳前期</p>

表4 木製容器編年表(2)

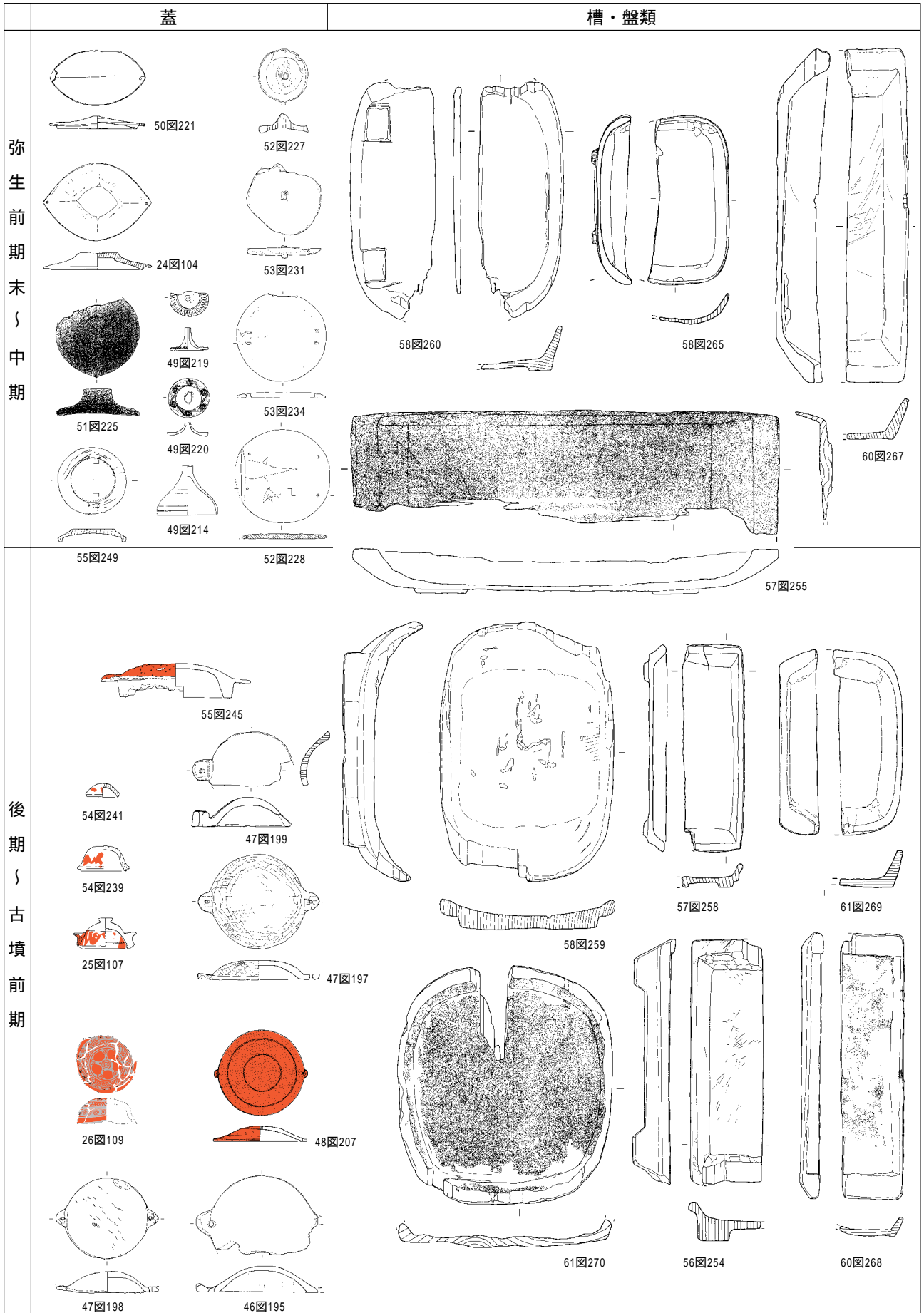


表5 木製容器編年表(3)

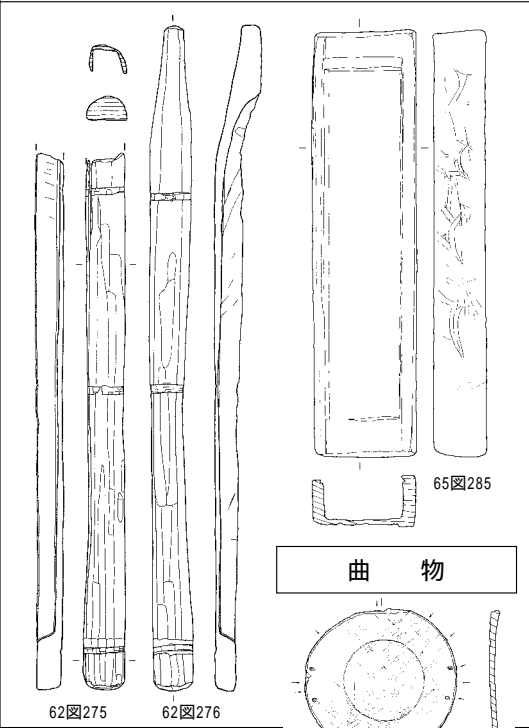
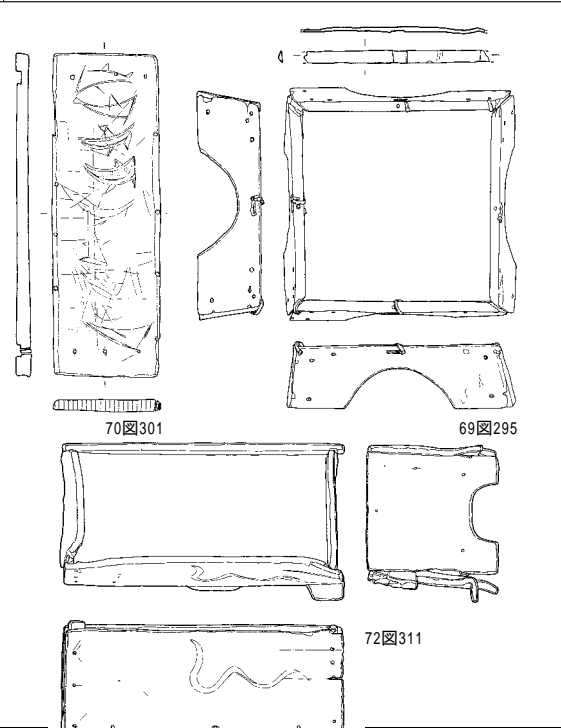
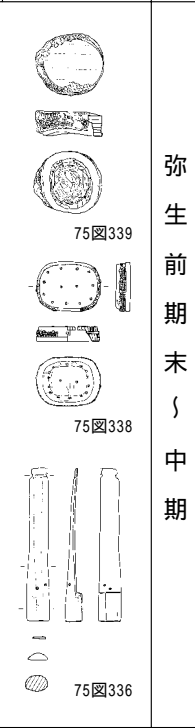
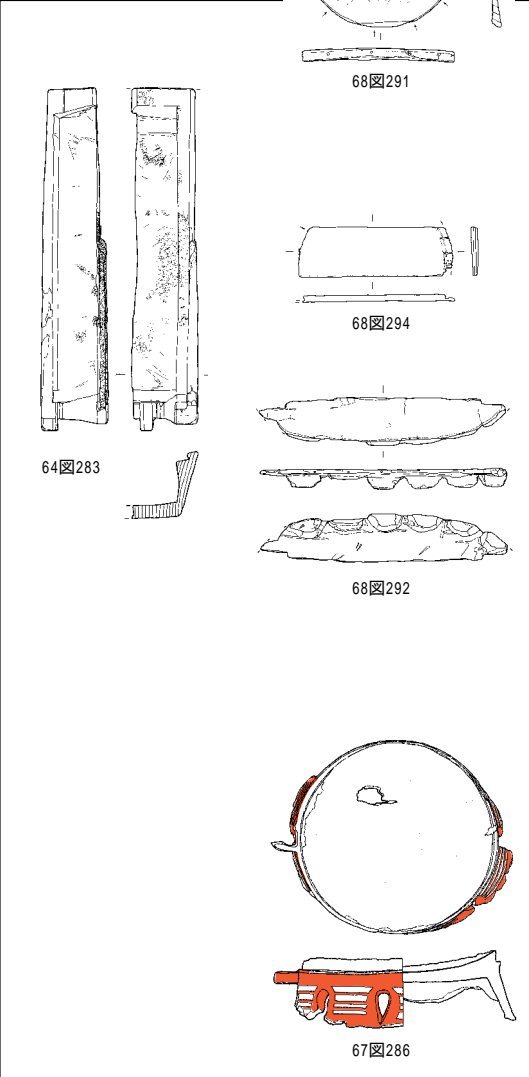
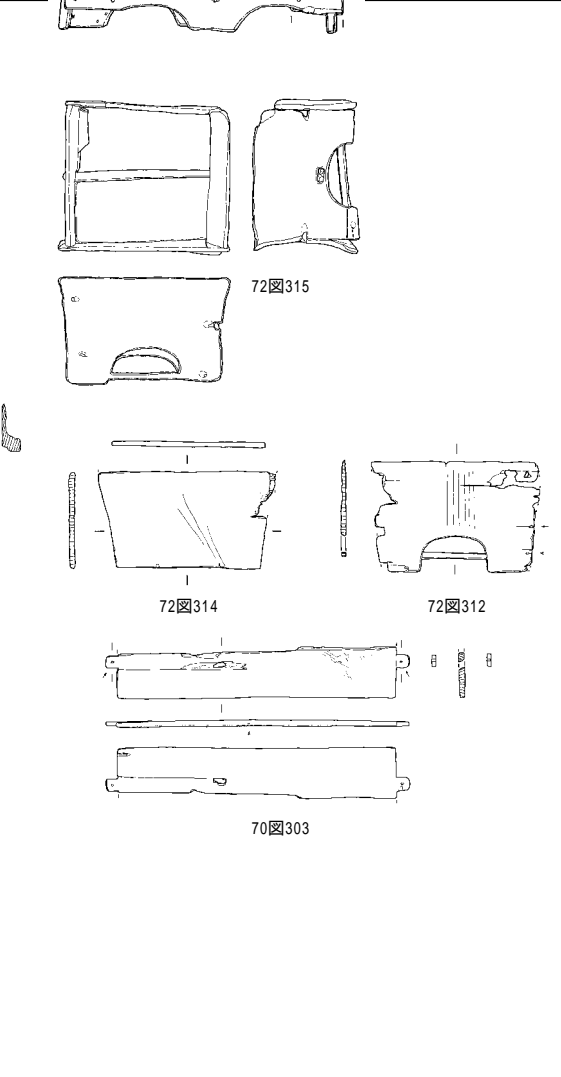

細長容器・割物箱	指物	その他	弥生前期末 ～ 中期
 <p>62図275 62図276</p> <p>65図285</p> <p>曲物</p>	 <p>70図301 69図295</p> <p>72図311</p> <p>72図315</p>	 <p>75図339</p> <p>75図338</p> <p>75図336</p>	
 <p>64図283</p> <p>68図291</p> <p>68図294</p> <p>68図292</p> <p>67図286</p>	 <p>72図314</p> <p>72図312</p> <p>70図303</p>	 <p>75図337</p> <p>74図330</p> <p>74図324</p> <p>73図322</p>	後期 ～ 古墳前期

表6 木製容器編年表(4)